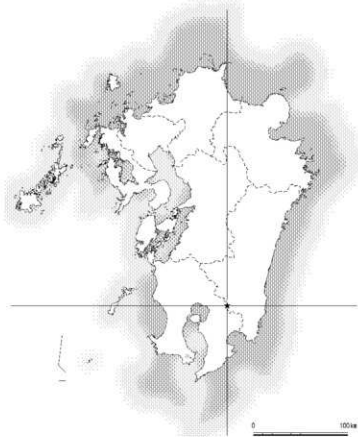


都城市所在

ひら みね

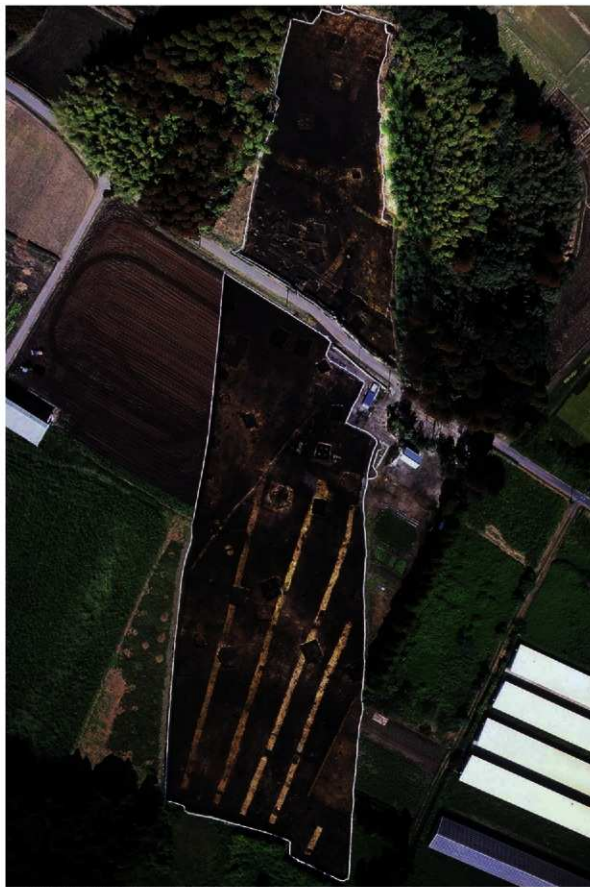
# 平峰遺跡(3次調査)

一般国道10号都城道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4



2012

宮崎県埋蔵文化財センター



平峰遺跡調査区全景(1次調査から3次調査区合成、上が北)



1 調査地西側地域遠景



2 調査地南側地域遠景

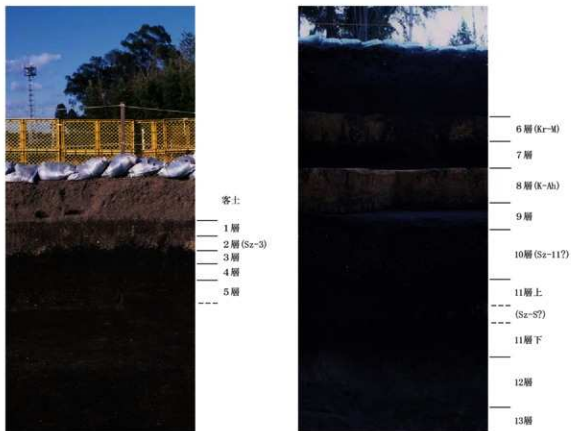


1 38号～40号竪穴建物跡全景(東から)



2 45号竪穴建物跡全景(東から)





1 基本土層堆積状況(左: E調査区北壁、右: D調査区下層確認区西壁)



2 E調査区西壁および45号調査穴建物跡土層堆積状況



1 44号竪穴建物跡出土  
平底瓶



2 36号竪穴建物跡出土  
仕切付角鉢



3 部分的に異なる色調の粘土  
を使用した土器

(包含層)(左側図未掲載資料)

1 接合部に塗布された赤色  
顔料



2 甕内面の放射状のミガキ



3 鉢内面の放射状のミガキ



1 鉢の補修例1



2 鉢の補修例2  
(片口に改変?)  
(実測図未掲載資料)



3 高坏の補修例  
(実測図未掲載資料)



1 被熱により変色した壺の口縁1



2 被熱により変色した壺の口縁2 (実測図未掲載資料)



3 鉄滓が付着した土器口縁 (実測図未掲載資料)



- 1 鉄滓が付着した高坏  
(実測図未掲載資料)



- 2 34号竪穴建物跡出土羽口  
と鉄滓が付着した土器口縁  
(実測図未掲載資料)



- 3 36号・37号竪穴建物跡出土  
羽口 (実測図未掲載資料)



1 軽石加工品



2 有孔円板と各種玉類



3 43号壑穴建物跡出土鉄鋳



## 序 文

宮崎県都城市平塚町に所在する平峰遺跡の発掘調査報告書を宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第219集として刊行します。

平峰遺跡の発掘調査は、国道10号都城道路の建設に伴い、国土交通省九州地方整備局宮崎河川国道事務所の依頼を受けて、宮崎県埋蔵文化財センターが主体となって平成19年度から21年度にかけて実施しました。本書は、その中の平成21年度に実施した3次調査について報告を行ったものです

調査では、古墳時代中期～後期の堅穴建物跡を中心として、縄文時代の土坑、古代の道路・溝状遺構や土坑など多くの遺構と遺物がみつかりました。とりわけ古墳時代については、五角形や六角形の平面形をした堅穴建物跡、仕切付角鉢や平底瓶など、朝鮮半島とのつながりを思わせる全国的にみても類例が少ない資料がみつかっています。また、滑石製有孔円板は宮崎県内では初めての出土例となります。このほか、鉄製品を加工した鍛冶工房やその材料となる鉄素材、住居廃絶に伴う土器の投棄など、当時の人々の行動を明らかにするものが数多く見つかりました。このような資料から、都城盆地において古墳時代の人々が営んでいた生活の様子を具体的に明らかにすることができました。また、さらに視野を広げれば、宮崎にとどまらず、日本列島から朝鮮半島にいたるまでの広範な地域の人々が密接に関係していたことも明らかになりました。

今後、これらの調査成果が、考古学や歴史研究の上はもとより、学校教育や生涯学習の場において、より地域に密着した資料として広く活用されることを願ってやみません。

最後に、調査および遺物整理、報告書の刊行にあたりご協力いただいた関係諸機関をはじめ、地元の皆様方に心より厚くお礼申し上げます。

平成24年3月

宮崎県埋蔵文化財センター  
所 長 森 隆茂



## 例 言

- 1 本書は、一般国道10号都城道路建設に伴い宮崎県教育委員会が実施した、宮崎県都城市平塚町に所在する平峰遺跡の3次発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局宮崎河川国道事務所の依頼を受けて、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施し、平成21（2009）年9月30日から平成22（2010）年3月26日まで行った。なお、調査に至る経緯については、2012年発行の平峰遺跡1次・2次調査報告書（宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第211集）に詳述してあるので、そちらを参照していただきたい。
- 3 発掘調査は、加藤徹、川越宏之、福田光宏、古田陽、有馬絢子、黒木俊彦が担当した。現地調査における図面作成および写真撮影については、調査担当者が分担して行った。
- 4 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書に係わる業務については、整理作業員の協力を得て行った。なお、軽石製品を除く石器・鉄器・玉類の実測、および遺構・遺物実測図の淨図と遺物写真撮影については加藤が行った。
- 5 空中写真撮影業務は有限会社フジタに、基準点測量等の測量業務は株式会社平和総合技研、自然科学分析は株式会社パレオ・ラボにそれぞれ委託した。
- 6 実測で使用した測量基準は、国土座標平面直角座標系第Ⅱ系（世界測地系）および東京湾海抜（T.P.）で、方位は座標北を指す。また、国土地理院発行地形図は真北を指す。
- 7 本書で使用した土層・土器等の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帳（2008年度版）」による。
- 8 遺物の出土状況のうちレベルについては、各土層断面の軸線を基準として、土層断面に投影している。
- 9 本書の執筆は第4章第1節を株式会社パレオ・ラボ（竹原弘展・藤根久）、同第2節を同じく株式会社パレオ・ラボ（佐々木由香・バンドリ スタルシャン）が行い、そのほかの執筆と第4章を含む全体の編集を加藤が行った。
- 10 遺物の注記は、注記時における遺構名の変更などによる混乱および誤記をさけるため、調査時の略号と遺構番号をそのまま用いている。なお、遺構番号は遺構の種類を問わず、基本的に検出した順番で割り振っている。また、調査中における層序も番号の重複を避けるため、通し番号で割り振っている。以上の遺構および層序番号の注記と報告書中の名称および番号の対応は付表2に記載している。
- 11 土器観察表の「調整」項目中の数値は、調整を行った工具等の原体に関する数値を示す。詳細については、付表3に記載している。なお、項目等については、次の文献を参考にした。  
奈良県立権原考古学研究所 1986『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊
- 12 出土遺物、およびその他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

# 本文目次

序文	i
例言	ii
目次	iii
第1章 はじめに	1
第1節 調査の組織	1
第2節 調査の経過	2
第3節 遺跡の基本層序と立地環境	6
第2章 検出遺構	9
第1節 遺構の分布状況	9
第2節 縄文・弥生時代の遺構	14
第3節 古墳時代の遺構	17
第4節 古代・中世の遺構	44
第3章 出土遺物	47
第1節 縄文・弥生時代の遺物	47
第2節 古墳時代の遺物	51
第3節 古代の遺物	80
第4章 自然科学分析	81
第1節 平峰遺跡3次調査出土遺物の蛍光X線分析	81
第2節 平峰遺跡3次調査出土の炭化種実	84
第5章 遺構と遺物の検討	87
第1節 竪穴建物跡について	87
第2節 古墳時代の土器について	89
第3節 有孔円板と高坏脚部転用羽口について	103
第6章 総括	111
第1節 平峰遺跡における古墳時代集落の変遷	111
第2節 平峰遺跡の歴史的位置づけ	113

## 挿 図 目 次

図1	平峰遺跡3次調査の調査区配置図	3
図2	平峰遺跡1次・2次調査の調査区配置図	4
図3	平峰遺跡の位置	6
図4	平峰遺跡の周辺地形	7
図5	平峰遺跡の基本土層	8
図6	D調査区遺構配置図	9
図7	E調査区遺構配置図1	10
図8	E調査区遺構配置図2	11
図9	E調査区遺構配置図3	12
図10	E調査区遺構配置図4	13
図11	F調査区遺構配置図	14
図12	集石遺構実測図	15
図13	9号～12号土坑実測図	16
図14	32号竪穴建物跡実測図	18
図15	32号竪穴建物跡出土遺物	18
図16	33号竪穴建物跡実測図	19
図17	34号竪穴建物跡実測図	20
図18	33号・34号竪穴建物跡出土遺物	21
図19	35号竪穴建物跡実測図	24
図20	35号竪穴建物跡出土遺物	25
図21	36号竪穴建物跡実測図	26
図22	36号竪穴建物跡出土遺物	27
図23	37号竪穴建物跡実測図	28
図24	37号竪穴建物跡出土遺物	29
図25	38号竪穴建物跡実測図	30
図26	39号・40号竪穴建物跡土層断面実測図	30
図27	39号・40号竪穴建物跡実測図	31
図28	38号・39号竪穴建物跡出土遺物	32
図29	40号竪穴建物跡出土遺物	33
図30	41号竪穴建物跡実測図	34
図31	41号竪穴建物跡出土遺物	34
図32	42号竪穴建物跡実測図	35
図33	42号竪穴建物跡出土遺物	35
図34	43号竪穴建物跡実測図	36

図35	43号竪穴建物跡出土遺物	37
図36	44号竪穴建物跡実測図	38
図37	44号竪穴建物跡出土遺物	38
図38	45号竪穴建物跡実測図	40
図39	45号竪穴建物跡土層断面実測図	41
図40	46号竪穴建物跡実測図	42
図41	47号・48号竪穴建物跡実測図	43
図42	古代以降の各遺構実測図	44
図43	縄文土器実測図	47
図44	縄文・弥生時代石器実測図1	48
図45	縄文・弥生時代石器実測図2	49
図46	縄文・弥生時代石器実測図3	50
図47	土師器実測図1 壺1	52
図48	土師器実測図2 壺2	53
図49	土師器実測図3 壺3	54
図50	土師器実測図4 甕1	57
図51	土師器実測図5 甕2	58
図52	土師器実測図6 甕3	59
図53	土師器実測図7 甕4	60
図54	土師器実測図8 甕5	61
図55	土師器実測図9 甕6	62
図56	土師器実測図10 壺・甕底部	63
図57	土師器実測図11 鉢1	64
図58	土師器実測図12 鉢2・模倣坏	65
図59	土師器実測図13 高坏1	67
図60	土師器実測図14 高坏2	68
図61	土師器実測図15 高坏3	69
図62	土師器実測図16 高坏4	70
図63	須恵器実測図	72
図64	古墳時代石器実測図1	74
図65	古墳時代石器実測図2	75
図66	古墳時代石器実測図3	76
図67	古墳時代石器実測図4	77
図68	有孔円板・玉類実測図	78
図69	鉄器実測図	79
図70	蛍光X線分析対象の遺物	81
図71	試料1の元素マッピング図および透過X線マッピング	82

図72	試料2の蛍光X線分析結果	83
図73	分析対象の炭化種実	85
図74	平峰遺跡における竪穴建物の規模	87
図75	平峰遺跡3次調査出土の土師器分類図	91
図76	平峰遺跡3次調査出土の土師器にみる調整技法などの諸例	95
図77	平底瓶・仕切付角鉢の諸例	99
図78	E調査区の点あげ遺物の分布	100
図79	九州中・南部地域における有孔円板・滑石製管玉と高坏転用羽口出土遺跡の分布	105
図80	平峰遺跡における古墳時代竪穴建物の変遷	112
図81	九州南部地域の古墳時代における墓制の地域性	114

## 挿表・付表目次

表1	34号竪穴建物跡ベルト内鍛造剥片等分布状況1	22
表2	34号竪穴建物跡ベルト内鍛造剥片等分布状況2	22
表3	試料1の点分析結果	83
表4	分析対象の炭化種実	84
表5	1次・2次調査の竪穴建物跡における諸要素の状況	88
表6	竪穴建物別にみた各土師器類型の出土状況	92
表7	九州中・南部地域における有孔円板・滑石製管玉出土遺構一覧	104
表8	宮崎県における弥生時代～古墳時代の羽口・鉄滓出土遺構一覧	106
表9	九州中・南部地域における高坏脚部転用羽口出土遺構一覧	107
付表1	竪穴建物跡一覧表	115
付表2	調査時略号等の注記対応一覧表	115
付表3	出土土器観察項目・内容一覧表	116
付表4	3次調査出土土師器・須恵器観察表	117
付表5	出土石器観察表	131
付表6	出土石製品・玉類等観察表	132
付表7	出土鉄器観察表	132

## 図版目次

巻頭図版 1	平峰遺跡調査区全景	
巻頭図版 2	1 調査地西側地域遠景	2 調査地南側地域遠景
巻頭図版 3	1 38号～40号竪穴建物跡全景	2 45号竪穴建物跡全景
巻頭図版 4	1 基本土層堆積状況	2 E調査区西壁および45号竪穴建物跡土層堆積状況
巻頭図版 5	1 44号竪穴建物跡出土平底瓶	2 36号竪穴建物跡出土仕切付角鉢
	3 部分的に異なる色調の粘土を使用した土器	
巻頭図版 6	1 接合部に塗布された赤色顔料	2 甕内面の放射状のミガキ
	3 鉢内面の放射状のミガキ	
巻頭図版 7	1 鉢の補修例	2 鉢の補修例 2
		3 高坏の補修例
巻頭図版 8	1 被熱により変色した壺の口縁 1	2 被熱により変色した壺の口縁 2
	3 鉄滓が付着した土器口縁	
巻頭図版 9	1 鉄滓が付着した高坏	
	2 34号竪穴建物跡出土羽口と鉄滓が付着した土器口縁	
	3 36号・37号竪穴建物跡出土羽口	
巻頭図版10	1 軽石加工品	2 有孔円板と各種玉類
		3 43号竪穴建物跡出土鉄錠
図版 1	1 D調査区全景	2 E調査区全景
		3 F調査区全景
図版 2	1 33号竪穴建物跡床面検出状況	2 34号竪穴建物跡床面検出状況
	3 35号竪穴建物跡床面検出状況	
図版 3	1 36号竪穴建物跡床面検出状況	2 37号竪穴建物跡床面検出状況
	3 38号竪穴建物跡床面検出状況	
図版 4	1 39号竪穴建物跡床面検出状況	2 40号竪穴建物跡床面検出状況
	3 41号竪穴建物跡床面検出状況	
図版 5	1 42号竪穴建物跡床面検出状況	2 43号竪穴建物跡床面検出状況
	3 44号竪穴建物跡床面検出状況	
図版 6	1 46号竪穴建物跡床面検出状況	2 47号竪穴建物跡床面検出状況
	3 48号竪穴建物跡床面検出状況	
図版 7	1 9号土坑検出状況	2 10号土坑半裁状況
		3 11号土坑遺物出土状況
	4 11号土坑完掘状況	5 集石遺構内歴検出状況
		6 12号土坑断削状況
	7 32号竪穴建物跡検出状況	8 32号竪穴建物跡床面検出状況
図版 8	1 33号竪穴建物跡遺物出土状況 1	2 33号竪穴建物跡遺物出土状況 2
	3 33号竪穴建物跡焼土断削状況	4 33号竪穴建物跡完掘状況
	5 34号竪穴建物跡土層堆積状況	6 35号竪穴建物跡検出面遺物出土状況
	7 35号竪穴建物跡埋土遺物出土状況	8 35号竪穴建物跡完掘状況
図版 9	1 36号竪穴建物跡埋土遺物出土状況 1	2 36号竪穴建物跡埋土遺物出土状況 2

	3 36号竪穴建物跡完掘状況	4 37号竪穴建物跡埋土遺物出土状況
	5 37号竪穴建物跡遺物出土状況	6 37号竪穴建物跡完掘状況
	7 38号竪穴建物跡検出面遺物出土状況	8 38号竪穴建物跡完掘状況
図版10	1 39号竪穴建物跡検出面遺物出土状況	2 39号竪穴建物跡埋土遺物出土状況
	3 39号竪穴建物跡土層堆積状況	4 39号竪穴建物跡完掘状況
	5 40号竪穴建物跡埋土遺物出土状況	6 40号竪穴建物跡完掘状況
	7 41号竪穴建物跡埋土遺物出土状況	8 41号竪穴建物跡完掘状況
図版11	1 42号竪穴建物跡検出面遺物出土状況	2 42号竪穴建物跡埋土遺物出土状況 1
	3 42号竪穴建物跡埋土遺物出土状況 2	4 42号竪穴建物跡完掘状況
	5 43号竪穴建物跡埋土遺物出土状況 1	6 43号竪穴建物跡埋土遺物出土状況 2
	7 43号竪穴建物跡土層堆積状況 1	8 43号竪穴建物跡土層堆積状況 2
図版12	1 43号竪穴建物跡完掘状況	2 43号竪穴建物跡FK-Ah面検出状況
	3 44号竪穴建物跡検出面遺物出土状況	4 44号竪穴建物跡床面遺物出土状況
	5 44号竪穴建物跡掘込み遺物出土状況	6 44号竪穴建物跡粘土断面剖状況
	7 44号竪穴建物跡北東隅遺物出土状況	8 44号竪穴建物跡完掘状況
図版13	1 45号竪穴建物跡遺物等検出状況	2 45号竪穴建物跡遺物出土状況
	3 45号竪穴建物跡完掘状況	4 46号竪穴建物跡土層堆積状況
	5 46号竪穴建物跡桜島3テフラ残存状況	6 46号竪穴建物跡完掘状況
	7 包含層遺物出土状況 1	8 包含層遺物出土状況 2
図版14	1 13号土坑底面検出状況	2 14号土坑底面検出状況
	3 15号土坑遺物出土状況	4 道路状遺構 (F17Gr) 土層堆積状況
	5 道路状遺構 (F17Gr) 硬化面検出状況	6 道路状遺構 (F17Gr) 完掘状況
	7 溝状遺構 (H10Gr) 完掘状況	8 E調査区北壁にみられる畝状の凹凸
図版15	1 縄文土器	2 縄文・弥生時代石器 1
図版16	土師器 1	3 縄文・弥生時代石器 2
図版17	土師器 2	
図版18	土師器 3	
図版19	土師器 4	
図版20	土師器 5	
図版21	土師器 6	
図版22	土師器 7	
図版23	土師器 8	
図版24	土師器 9	
図版25	土師器10	
図版26	土師器11	
図版27	土師器12	
図版28	土師器13	





# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の組織

平峰遺跡の3次発掘調査（平成21年度）およびそれに伴う整理作業（平成22～23年度）と報告書の作成（平成23年度）は以下の組織で実施した。なお、調査に至る経緯については、平峰遺跡1次・2次発掘調査報告書（宮崎県埋蔵文化財センター2012）に詳しいため、そちらを参照していただきたい。

調査主体 宮崎県教育委員会

調査機関 宮崎県埋蔵文化財センター

### 平成21年度 発掘調査

所長		福永展幸
副所長兼総務課長		長友英詞
総務課総務担当リーダー		高山正信
調査第二課長		石川悦雄
調査第二課調査第四担当リーダー		近藤 協
調査第一課調査第一担当	主 事	古田 陽（調査担当）
調査第二課調査第三担当	主 事	加藤 徹（調査担当）
調査第二課調査第三担当	主 事	有馬絢子（調査担当）
調査第二課調査第四担当	主 査	黒木俊彦（調査担当）
調査第二課調査第四担当	主 査	川越宏之（調査担当）
調査第二課調査第四担当 （発掘作業員）	調査員	福田光宏（調査担当）

池田ヒサ子、岩切由起子、上原勇、内山次男、榮留利盛、大山義治、加藤嘉寿子、上宮田明、上森勲、河野露子、河野春雄、隈元俊光、蔵留ハナエ、庄司邦芳、新村ミイ子、立山昇、永岡武雄、中村ミヤ子、東レイ子、蛭牟田勇、福岡咲子、福重光夫、船越幸一、古澤真智子、前畑篤子、益留ハツミ、水落邦義、森山百合子、湯地常幸

### 平成22年度 整理作業

所長	森 隆茂
副所長	北郷泰道
総務課長	矢野雅紀
総務課総務担当リーダー	長友由美子
調査第二課長	永友良典
調査第二課調査第四担当リーダー	大村公美恵

調査第二課調査第三担当 主 事 加藤 徹（整理担当）  
（整理作業員）

安楽京子、稲元光恵、上田勝子、栄留博美、河野京子、倉木真由美、黒木鈴代、郡司昌子、  
近藤美千代、澤部洋子、垂水美穂、手銭富佐江、西田久美子、畑中美穂、濱砂雅子、福田理恵子、  
前田洋子、松岡れい子、松本静香

#### 平成23年度 整理作業

所 長	森 隆 茂
副所長	北郷泰道
総務課長	坂上恒俊
総務課総務担当リーダー	長友由美子
調査第二課長	永友良典
調査第二課調査第四担当リーダー	大村公美恵
調査第二課調査第三担当 主 事	加藤 徹（整理担当）

（整理作業員）

上田勝子、栄留博美、金子悦子、新開美和、武野美智子、手銭富佐江、西田久美子、潤田孝子

#### 平成21～23年度 事業調整

宮崎県教育庁文化財課 日高広人

## 第2節 調査の経過

調査に先立ち、平成21（2009）年9月30日より重機による草木等の伐採および調査事務所等の建て込みを行う。10月5日よりE調査区の表土掘削、続いてD調査区の表土掘削を行う。この際、1次・2次調査の結果を受けて、基本土層の3層を重機による掘削対象深度の目安とし、4層上面でそろえた。調査区が3カ所に分かれていること、および1次・2次調査での調査区名の使用状況から、3つの調査区を北側よりそれぞれD調査区、E調査区、F調査区とした。なお、15～20日にかけて、業務委託により10m間隔で調査区グリッドおよび座標（世界測地系）の設定を行った（図1）。この際、1次・2次調査の調査担当者への確認を行ったが、担当者の誤認により3次調査では測地系とグリッド名が1・2次調査とは異なるもの（図1・図2参照）となってしまった。なお、基本層序については1次・2次調査を踏襲しているが、詳細については次節で述べる。各調査区の表土除去後、10月13日より作業員を雇用し、まずD調査区とE調査区において人力での掘削を開始する。以下、調査区ごとに調査の経過を述べていくこととする。

最も北側に位置するD調査区では、重機による表土掘削において、基本土層2層の桜島3テフラ（Sz-3、桜島文明軽石）層よりも20cm程下から遺物の出土を確認した。表土掘削時における遺物の出土状況としては、調査区北側に多く、南側では少ない状況であった。表土掘削後の4層からは、遺構確認のための精査を行いながら掘り下げを行った。4層中からの出土遺物は、縄文土器やチャート製の剥片など縄文時代の遺物が中心であった。4層中では遺構の確認はできず、精査を繰



図1 平峰遺跡3次調査の調査区配置図 (S=1/1200、座標系は世界測地系)

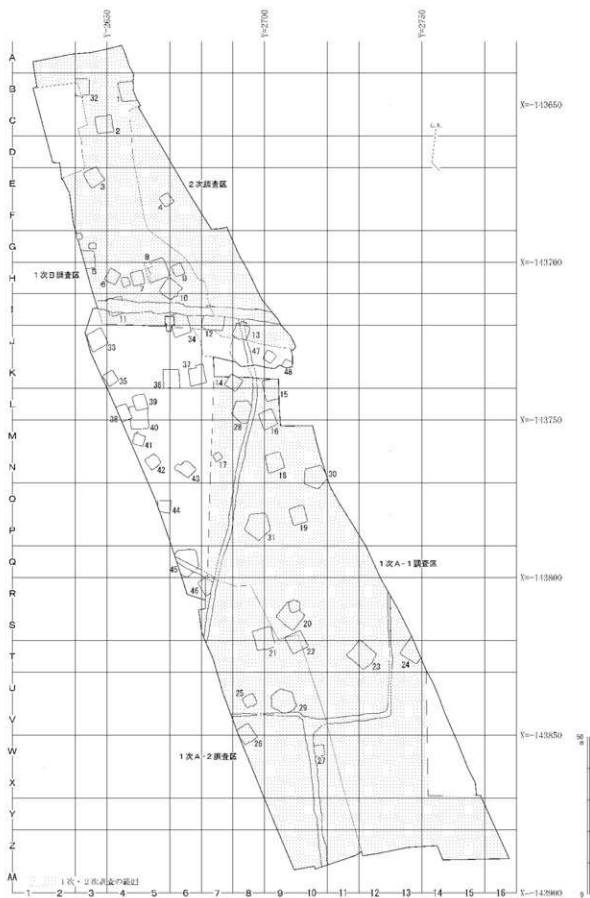


図2 平峰遺跡1次・2次調査の調査区配置図 (S=1/1200、座標系は日本測地系)

り返ししながら5a層まで掘り下げを行ったが、4層に比べると5層に含まれる遺物の量は少ないため、主な遺物包含層は4層といえる。5a層まで精査を行いながら掘り下げ、12号土坑を検出するとともに32号堅穴建物跡の輪郭を確認した。各遺構について、土層観察用のベルトを設定し、それぞれ掘り下げを行った。12号土坑検出面からは弥生土器や鉄器が出土しているが、埋土の状況から縄文時代の土坑である可能性が高い。D調査区5層では、この他にはピット以外目立った遺構は確認できなかった。12号土坑、32号堅穴建物跡発掘後に空中写真撮影を行った。

D調査区は谷に面した台地端付近に位置し、縄文時代早期頃の集石遺構などが存在する可能性が考えられたので、両遺構の調査終了後、調査の進展状況を考慮しながら、1グリッド分(10×10m)の広さで下層確認区を設定して掘り下げを行う。掘削深度が深くなるため途中で平坦面を設置しながら、基本土層11層、縄文時代草創期の指標とされる桜島薩摩テフラ(Sz-S)下まで掘り下げを行った。現地表下およそ2m程度となる。途中の層内からの遺物の出土量はわずかであったが、桜島11テフラ(Sz-11)を含む基本土層10層で土坑1基、桜島薩摩テフラを含む11層中で土坑1基と集石遺構1基を検出した。順次これらの調査を行い、当調査区については12月22日に調査を終了し、24日に埋め戻しを行う。

E調査区では重機による表土掘削を行った段階で、レベル的に高いE調査区の中央部付近で多くの土器を検出している。この時点で既に、高坏の比率がやや多いことに気づくことができた。表土掘削時の土器の出土状況などから、4層中に生活面が存在する可能性を考え精査を行う。しかし、4層の黒色土中での遺構の検出は困難であったため、霧島御池軽石が混じり色調がやや明るくなる5層での検出を試みて、精査を行いながら掘り下げを行う。掘り下げ時に、土器集中部を数カ所検出していたが、遺構の輪郭を検出するまでには至らなかった。1次・2次調査に携わった作業員の話から、土器集中部に堅穴建物跡が存在する可能性があることがわかったので、土器集中部をブロック状に残しながら、周辺の掘り下げを行った。その後、遺構が検出された場合、ブロック内の遺構軸線上に土層観察用のベルトを設定して遺物の堆積状況と遺構の掘形の観察を行ったが、掘形については埋土と基本土層4層との区別は困難であった。E調査区では、11月12日までに10軒の堅穴建物跡(35号～44号)の他、11号・13号土坑、道路状遺構を検出し、堅穴建物跡については北側より順次調査を行う。これらの遺構の中で13号土坑については、当初遺物の出土状況などから古代の堅穴建物跡の可能性を考えたが、他の堅穴建物跡と同様に4層から5a層の黒色土での輪郭の検出は困難であった。精査を繰り返しながら掘り下げた結果、最終的には平面楕円形のしまった軽石類似層の堆積を確認したことにより、土坑と判断した。45号堅穴建物跡については、その上層にある道路状遺構は検出していたものの、当初建物跡の存在には気づいていなかった。その後、精査を幾度か繰り返した結果、建物跡と認識した。

このほか、E調査区については、道路工事に伴って2月15日より市道部分に調査区の拡張を行った。当初この市道部については調査対象に含まれていなかったため、調査期間を3月26日まで延長を行った。この市道部では、3軒の堅穴建物跡(33号・47号・48号)を新たに検出したほか、1次調査で一部調査を行っていた34号堅穴建物跡と、溝状遺構の延長部とを検出し、これらの遺構について順次調査を開始する。また、市道部以外の堅穴建物跡を床面まで調査した段階で業務委託による空中写真撮影を行った。その結果、排土搬出用のスロープを設定していた調査区南側

に、1次調査で一部調査を行った46号竪穴建物跡がかかっていることが判明した。そのため、調査終盤の平成22（2010）年3月8日より46号竪穴建物跡の調査を行った。

E調査区については、竪穴建物跡などの遺構の調査を3月18日までに終了した後、ピットや調査区壁面の土層断面図などの補足実測を行い、3月23・24日に埋め戻しを行い調査を終了した。

最も南側に位置するF調査区は、11月30日に一度精査を行い、ピット以外の遺構が無いことを確認した。また、遺構だけでなく、遺物の出土量もD・E調査区と比べると著しく少なかった。したがって、E調査区の調査を優先し、当調査区については平成22（2010）年2月以降にピットなどの断割や調査区の測量などを断続的に行った。そして、E調査区と同じく3月23・24日に埋め戻しを行い、調査を終了した。

なお、上記空中写真撮影については、平成21（2009）年12月3日に1回目、平成22（2010）年2月17日に2回目の撮影を業務委託により行った。

### 第3節 遺跡の基本層序と立地環境

平峰遺跡は宮崎県都城市の西部にある平塚町に位置し、鹿児島県曾於市（旧曾於郡末吉町）に隣接している（図3）。遺跡から数百m西側に界隈が存在する。遺跡周辺の歴史的環境については、1次・2次発掘調査報告書（宮崎県埋蔵文化財センター2012）で詳しく述べられているのでここでは省略する。本節では基本土層と立地については簡単に触れておく。

平峰遺跡は、大淀川支流野間谷川と、さらにその支流の小河川によって挟まれた台地上に立地

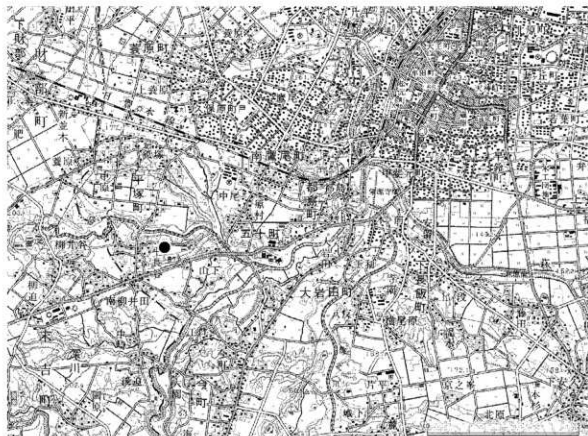


図3 平峰遺跡の位置 (S=1/50000)



図4 平峰遺跡の周辺地形 (S=1/5000、網掛け部は1次～3次調査の範囲)



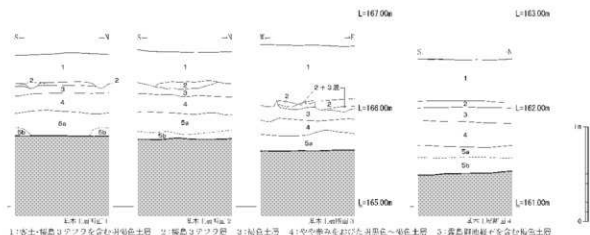


図5 平峰遺跡の基本土層 (S=1/40)

し、南北両側には谷が形成されている。台地は西側へと広がっており、遺跡は台地の東端に近い場所に位置している（図4）。調査によって1～5層までの基本土層（図5）を確認しているが、遺構の掘削やD調査区における下層確認調査によってさらに6～12層（巻頭図版4）を追加した。

- |                         |                             |
|-------------------------|-----------------------------|
| 1層：桜島3テフラを含む明褐色土        | 7層：褐色土                      |
| 2層：桜島3テフラ (Sz-3、桜島文明軽石) | 8層：鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah)         |
| 3層：黒色土                  | 9層：黒色土                      |
| 4層：やや赤みをおびた明褐色～褐色土      | 10層：桜島11テフラ (Sz-11) を含む暗褐色土 |
| 5層：霧島御池軽石を含む褐色土         | 11層：桜島薩摩テフラ (Sz-S) を含む明褐色土層 |
| 6層：霧島御池軽石 (Kr-M)        | 12層：灰色土                     |

遺跡の基本土層をみると、E・F調査区の土層はわずかながら北側に向かって傾斜しているものの、ほぼ水平に近い堆積状況を示しており、台地上の平坦な部分に立地していることがわかる。E調査区の北端に位置する市道よりも北側では北に向かって緩やかに傾斜しているが、D調査区付近では再び水平に近い堆積となり段状の平坦面を形成している。この平坦面については、霧島御池軽石 (Kr-M) 層および鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) 層がほぼ水平堆積となっており、自然地形を反映していることが分かる。D調査区のさらに北側では谷部の平野へ向かって傾斜が急になっており、一部では崖状の地形を形成している。このほか、D調査区における下層確認用深掘り区では、13層下において河川堆積物と考えられる砂礫層を確認している。野間谷川の旧河道に該当すると考えられる。一方、南側については、F調査区の南側から強く傾斜して、狭い谷部へといたる。

以上のような土層堆積状況と遺構の分布をみると、台地の上でも主に北側が中心的に利用されており、平坦部南側の利用頻度はやや低いといえることができる。

#### 参考文献

- 部城市史編さん委員会編 2006『部城市史』資料編考古 部城市  
 宮崎県埋蔵文化財センター 2012『平峰遺跡（1次・2次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第211集

## 第2章 検出遺構

### 第1節 遺構の分布状況

#### (1) D調査区 (図6)

D調査区は、今回調査を行った3つの調査区の中で最も北側に位置し、遺跡が立地する台地の北縁部にあたる。E調査区の北側より始まった傾斜が当調査区付近では再び水平に近い緩やかな傾斜となり、調査区の北側から平野に向かって再び傾斜している。したがって、当調査区は台地頂部から一段低い平坦面状の地形に位置する。前章の立地の項でも述べたように、D調査区の土層（巻頭図版4-1）観察から、縄文時代の広域火山灰層である鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）と霧島御池軽石（Kr-M）の二層だけでなく、さらに下層の桜島11テフラ（Sz-11）を含む基本土層10層の上面も比較的水平的な堆積となっている。このため、当調査区が位置する平坦面は人工的なものではなく、自然地形を反映したものであると考えられる。

D調査区では、遺物は包含層である4層から多く出土している。4層内では遺構を確認することはできなかったため精査を行いながら掘り下げた結果、5層内で32号竪穴建物跡のほか、縄文時代の12号土坑を検出している。32号竪穴建物は1次調査の調査区外にあたる範囲である。D調査区においては、古墳時代の遺構としてこの竪穴建物1軒以外に検出していない。この調査区の周辺ではこれまでの調査を通して、4軒の竪穴建物跡がみつまっている程度である。弥生時代の遺構は確認されていない。縄文時代後・晩期の遺構についても12号土坑以外は検出していない。このように遺構は少ないが、包含層である4層内では、縄文時代晩期および弥生時代中期中頃の土器が出土している。また、縄文時代晩期の土器と同じ頃のものと考えられる頁岩

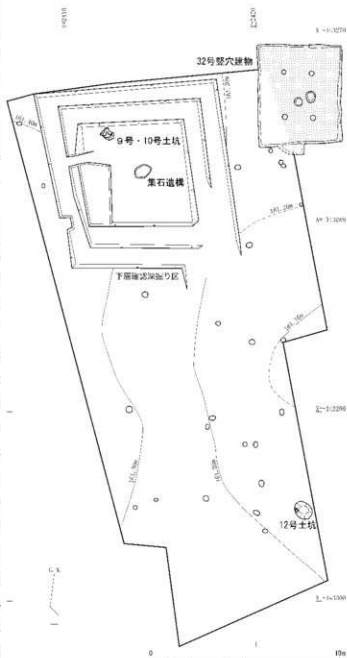


図6 D調査区遺構配置図 (S=1/200)

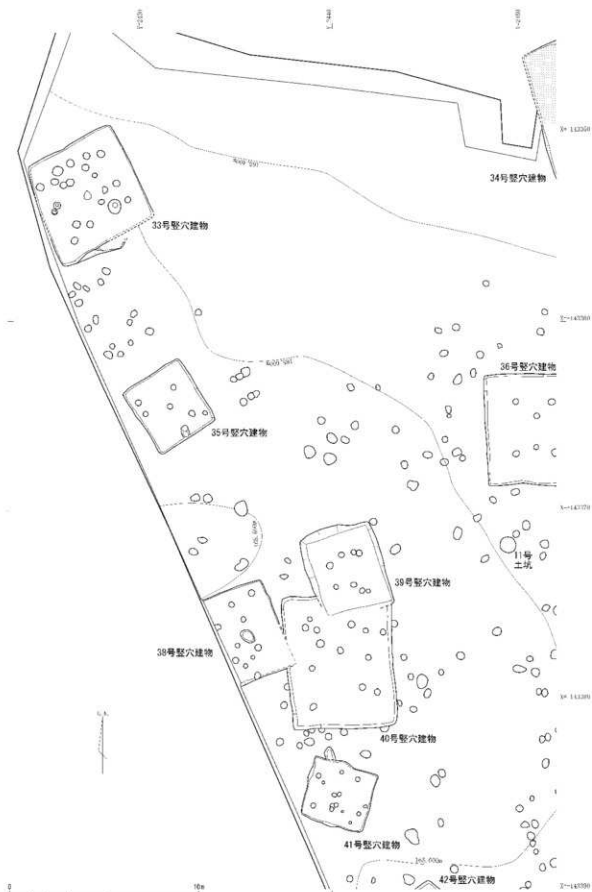


图7 E调查区遺構配置図1 (S=1/200)



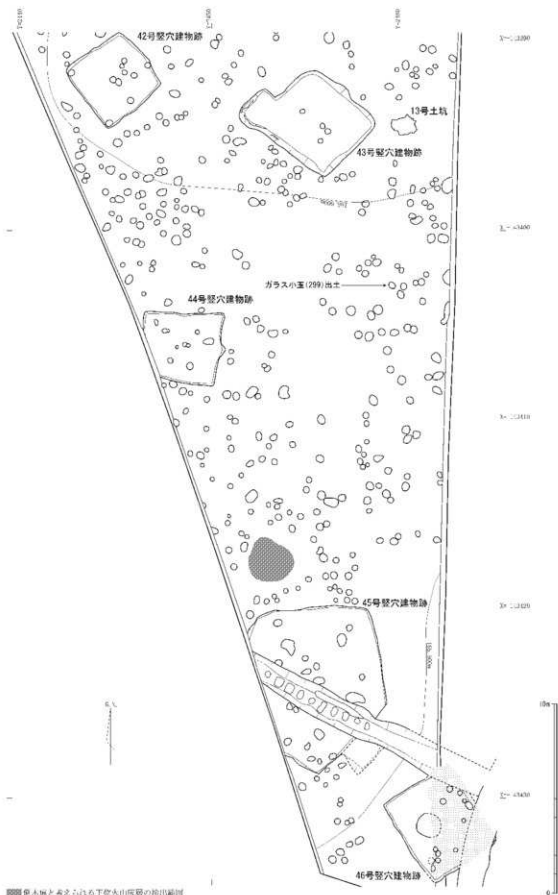
図8 E調査区遺構配置図2 (S=1/200)

源ホルンフェルスやチャート、黒曜石製の石器および剥片・碎片類が、他の調査区と比較すると多くみつまっている。D調査区では当該時期の遺構はみつからないが、1次調査のB調査区では1号・2号土坑から、土器や、石器製作にともなう剥片や碎片、失敗品の可能性がある石鏃などが出土している。

ところで、縄文時代早期頃には台地縁辺部においては集石遺構(群)が形成されることがある。南側の谷部を挟んで平峰遺跡と向かい合った位置にある勤女木遺跡(宮崎県埋蔵文化財センター2011)においても1基のみであるが検出されている。以上の状況、および調査の進展状況を考慮しつつ、当調査区では下層確認の目的で、1グリッド(以下「グリッド」は「Gr」と省略)分(10×10m)の範囲について掘り下げを行い、最終的には現地地表下2m程度まで掘り下げた。その結果、桜島薩摩テフラ(Sz-S)と考えられる細粒火山灰を含む11層および桜島11テフラ(Sz-11)と考えられる粗粒の黄色軽石を含む10層の縄文時代草創期から早期頃と考えられる層において、土坑2基(9号・10号土坑)と集石遺構1基を検出した。遺物の出土量は晩期に比べると著しく減少するが、わずかながら磨石などが出土している。

(2) E調査区(図7～図10)

台地上に位置する調査区で、調査区内の高低差は遺構検出面である5b層付近で50～60cm程度と水平に近い状態である。今回の調査で最も多くの遺構



福岡県水原と考えられる下位大山成帯の出土範囲

図9 E調査区遺構配置図3 (S=1/200)

を検出している。1次から3次調査を通してみると、E調査区周辺の遺構密度が高く、このあたりが古墳時代集落の主要な部分であったと考えられる。また、遺構の分布をみると、竪穴建物はさらに西側に広がっていたと考えられる。ただし、南側のF調査区付近までこの水平堆積が続いている状況からすると、集落の中心は台地平坦面の北側に寄っているといえることができる。

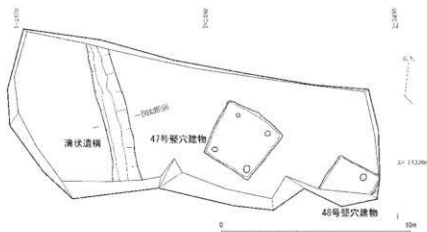


図10 E調査区遺構配置図4 (S=1/200)

遺構は調査区の西側を中心として古墳時代に属する16軒の竪穴建物跡（1次調査分を含む）のほか、縄文時代の土坑（11号土坑）や、古代以降の道路状遺構・土坑などを検出した。このうち、38号～40号竪穴建物跡は、1次から3次にわたる3回の調査では初めて見つかった切り合いのある竪穴建物跡である。これらの遺構のほか、F13GrとF16Grの2カ所において、倒木痕と考えられる、上層にまきあげられた鬼界アカホヤ火山灰を検出している。ところで、2カ所の倒木痕のちょうど中間に位置する43号竪穴建物付近においても、遺構検出面において下位火山灰層がみられる部分がある。当初地形的に高くなっていると考えたが、点的であるため、倒木痕の可能性が高いと考えられる。ただし、この部分については、鬼界アカホヤ火山灰ではなく、霧島御池軽石が検出されている（巻頭図版1の43号竪穴建物周辺の濃い黄色の部分）。F12GrからF16Grの間は、43号竪穴建物跡を除くと、遺構が希薄な空間となっている。1次調査においてもG11GrからG16Gr（1次調査時のGrではL7GrからL7Gr）でも遺構が少ないことから、倒木の時期と要因は明らかでないが、樹木が存在したとすれば、この空間が特別な意味をもっていた可能性がある。弥生時代終わりから古墳時代の初め頃とやや時期は古くなるものの、F12Grの倒木痕の付近から、半分に割られ甕の上に壺が乗った状態で出土しており（図版13-7・8）、特別な意味を感じさせる。

縄文・弥生時代の遺構は、11号土坑1基のみである。1次調査時に現市道部付近で縄文時代の土坑が検出されており、一連のものであると考えられる。

古代以降においては、1次調査で検出した溝状遺構や道路状遺構につながる遺構のほか、土坑などを検出した。1次調査時で幅2.5～4.8mの道路状遺構や、東西南北にのびる溝状遺構や土坑や竪穴跡を検出しており、一帯が広く利用されていたことをうかがうことができる。このほか、平面的な確認はできなかったが、調査区北側および西側壁面において、1471（文明3）年に噴出したとされる桜島3テフラ（桜島文明軽石）に覆われた畝状の凹凸（図版14-8）を確認している。当該時期の遺物はごくわずかであるが、15世紀頃には一帯が畑地として利用されていたと考えられる。

### (3) F調査区 (図11)

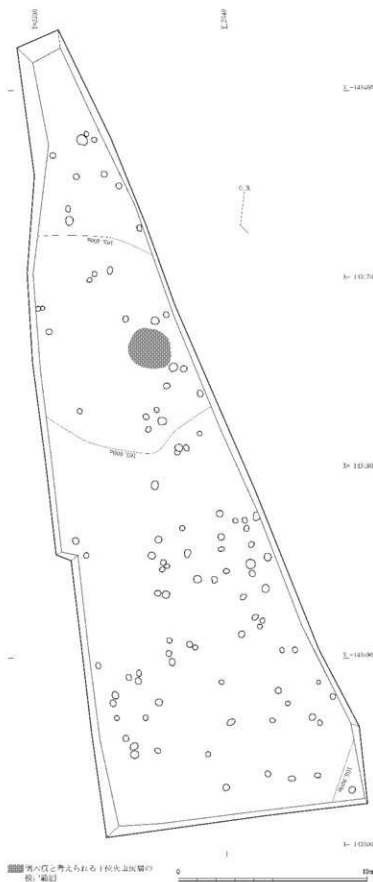


図11 F調査区遺構配置図 (S=1/200)

台地の南側に位置する調査区であり、E調査区と同様に土層の堆積状況はほぼ水平であるが、ピット以外目立った遺構はみつからない。1次から3次調査を通してみても、この周辺に存在する竪穴建物は23号・24号竪穴建物跡の2軒と少ない。また、他の調査区で出土している縄文・弥生時代の遺物も少なく、古墳時代以前は生活圏に含まれていないようである。一方で、E調査区と同様に調査区壁面において桜島3テフラ（桜島文明軽石）に覆われた畝状の凹凸を確認しており、15世紀頃にはこのあたりまで広く畑地として利用されていたことを示している。中世の溝状遺構も南側の調査区外まで延びており、古代以降は、それまで利用が少なかった台地南側部分が次第に利用されるようになっていったと考えられる。

なお、E調査区と同様に、N22Grにおいても風倒木痕と考えられる上層にまきあげられた霧島御池軽石を検出している。

## 第2節 縄文・弥生時代の遺構

### (1) 集石遺構 (図12)

D調査区北側深掘り区の基本土層11層上層（標高約159.7m）で検出した集石遺構で、土坑内に長さ10cm前後の礫を20個程度不規則に配している。掘形となる土坑は東西方向に長い不整楕円形を呈しており、底面は平坦に近い。検出

面で東西長91cm・南北幅63cm、底面で東西長84cm・南北幅55cmの大きさである。検出面からの深さは7cmと浅い。土坑検出時点では高い位置にある北東部の礫がわずかにみえていた。礫は周辺土層に多く含まれる輝石安山岩で主に構成されている。これらの礫は西側に集中しているが、このうち西側の3個の礫は、相対する面が被熱により淡い赤色に変色しており、火を使用した痕跡であると考えられる。埋土に炭化物が含まれるものの、その量は少ない。なお、東側の礫については西側よりも高い位置にあるため、重複した別の遺構である可能性も考慮したが、土層断面および掘形において区別できなかったため、同一遺構であると判断した。

遺物は出土していないが、基本土層11層上部、板島薩摩テフラ（約11,000年前）と板島11テフラ（約7,500年前）の間で検出しているため、時期は縄文時代草創期後半～早期前半と考えられる。

## (2) 土坑 (図13)

縄文時代に属する土坑を、D調査区で3基（9号・10号・12号土坑）、E調査区で1基（11号土坑）、計4基検出している<sup>(1)</sup>。D調査区で検出した9号・10号土坑の2基は北側の下層確認の深掘り区内に位置している。

### 9号土坑

D調査区北側の基本土層11層上層（標高約159.5m付近）で検出した土坑である。平面形は東西に長い楕円形で、検出面で長さ（北西-南東）63cm、幅（北東-南西）長42～51cm、底面で長さ49cm、幅38cmの大きさである。埋土は赤みを帯びた土であるが、北西端の検出面付近には長さ約33cm、幅8～9cm、深さ6～8cmの範囲で、一見すると灰状の、粒子が細かい灰色の土が堆積していた。この部分は平面長楕円形、横断面半円状を呈する。その他の埋土は赤みを帯びた土であるが、焼土のような被熱した状況はみられず、灰状にみえる土の堆積要因はあきらかでない。また、中央付近には縦方向に黒みを帯びた土が堆積しているが、この黒みを帯びた土は断面観察でわずかに確認できるものの、平面的な掘削で認識できるほどの色調の違いはない。土坑の性格は明らかでない。

遺物は出土していないが、集石遺構と同様に基本土層11層上層で検出しており、縄文時代草創期後半～早期前半の時期が考えられる。

### 10号土坑

D調査区北側深掘り区の基本土層10層中（標高約160.0m）で検出した土坑である。平面形は三角形を呈する。検出面で長さ（南北）46cm、幅（東西）46cm、底面で長さ55cm、幅51cmの大きさで、袋状に下部が広がっている。深さは検出面から35～40cmで、底面に段を有しており南側が低くなっている。なお、土坑埋土は赤みを帯び

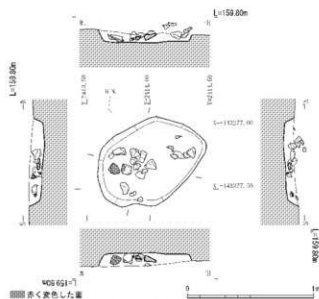


図12 集石遺構実測図 (S=1/30)





埋土上層より縄文土器（1）と石鎌（15）が出土している。時期は出土した土器から縄文時代晩期と考えられる。

#### 12号土坑

D調査区南側の基本土層5層中で検出した土坑で、検出面で長さ（北西-南東）99cm、幅（北東-南西）80cm程、底面で長さ55cm程度、幅44cm、検出面からの深さ42cmの大きさである。平面形は長楕円形、断面形は緩やかな「V」字状を呈する。底面には柱状のビットが掘り込まれているが、埋土内での区別が難しいことから、ビットがこの土坑に伴うかどうかは明らかでない。

遺物は検出面付近で弥生土器（図版34-334）と鉄鎌と考えられる鉄器（図69-301）が出土しているが、底面から遺物は出土していない。検出面の遺物は弥生時代であるが、土層の堆積状況から縄文時代の土坑であると考えられる。

### 第3節 古墳時代の遺構

#### （1）竪穴建物跡

遺跡の中心的な遺構で、3次調査では17軒の竪穴建物跡を検出している。なお、1次調査分についても合わせて報告を行っているが、調査資料が十分そろっておらず、詳細が明らかでない部分が多い。出土土器からは、主に5世紀後半～6世紀中葉頃の建物跡であると考えられる<sup>25</sup>。

#### 32号竪穴建物跡（図14）

D調査区北端、C2 Grにおいて検出した、床面積約21.3㎡の中型の竪穴建物跡である。1次調査の際に調査を行っているが、南西部が一部調査区外に位置していたため、3次調査ではその未調査部について調査を行った。1次から3次調査を通して、最も北側に位置する建物跡である。主軸はほぼ南北軸に沿っている。掘形の規模は、検出面で南北約5.2m、東西約4.3m、床面で南北約5.0m、東西約4.1mである。床面レベルは約160.75mで、3次調査における検出面からの深さは約50cmである。平面形は方形を基調とするが、南辺には南北約0.5m、東西約1.0mの張出部を有し、この張出部は床面よりも若干高くなっている。3次調査時には、調査区際に工事用道路が設置されており、それに伴って周辺が削平されていたこともあり、この張出部については1次調査に続く形で明確に確認することはできなかった。建物跡は一度基本土層7層の黒色土まで掘り下げた後、黒色土と霧島御池軽石と考えられる黄色軽石を混ぜた土で貼床を施しているが、中央部分についてはやや浅く掘り残しており、貼床の厚さは薄くなっている。柱については、対角線上に4基のビットがあり、4本柱であったと考えられる。硬化面は4本の柱に囲まれた建物の中央付近から南側にかけて存在し、張出部にも硬化面が形成されている。硬化面は人の行き来によって形成されると考えられるので、南側張出部を出入り口として利用していた可能性が考えられる。建物跡の中央付近には灰跡と考えられる焼土を含む土坑が存在する。

出土遺物（図15）には土師器（壺・甕・鉢・高坏）のほか、剥片などがあるが、図示した以外にも遺物が出土している。壺は胴部が張った小型のものが出土しており、二重口縁壺はみられない。225の口縁部は大半が欠失しているが、折れて割れたような状態ではなく、石器の剥離面のような剥離の単位が観察されるため、意図的に打ち欠いている可能性がある。なお、剥片（8）には鉄銹が付着しているが、遺跡の中でみられるような鍛冶作業中に付着したのではなく、土中環境に由

来するものと考えられる<sup>(3)</sup>。3次調査の範囲が少ないため、これらの遺物の全体的な出土状況はあきらかではない。特に1次調査時における検出面以下における遺物出土状況が明らかでないが、床面付近では主に南側からの遺物の出土がやや多い。北西部の柱穴に近いピットから、壺(59)が完形に近い状態で出土している。甕の突帯よりも上部が内湾することや、高帯の底部と口縁部の境界が不明瞭なことから、6世紀前葉～中葉頃の時期が考えられる。

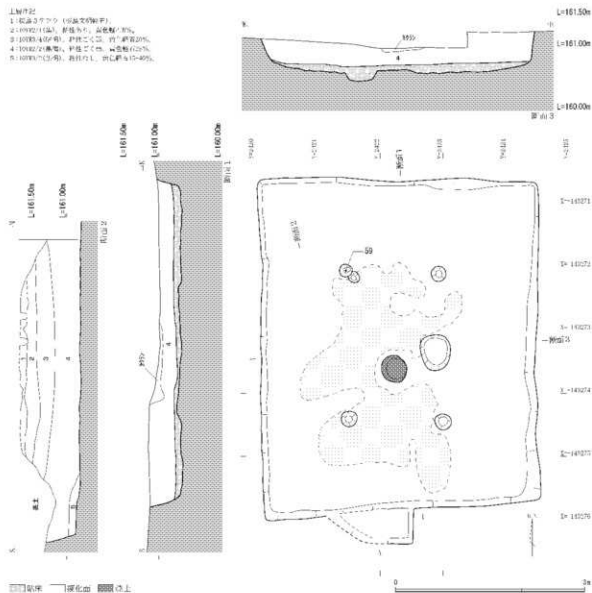


図14 32号竪穴建物跡実測図 (S=1/60)

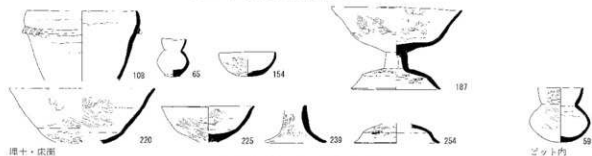


図15 32号竪穴建物跡出土遺物 (土器S=1/8)



- 平面図記  
 1: 基壇上段の厚さ(約4m) 2: 基壇上段4階分(1)  
 3: 100%の(1)と、L2とL3の間、柱の痕、溝の跡(47%)  
 4: 100%の(1)と、L2とL3の間、柱の中心線、溝の跡(36%)  
 5: 100%の(1)と、L2とL3の間、柱の中心線、溝の跡(25%)  
 6: 100%の(1)と、L2とL3の間、柱の中心線、溝の跡(15%)  
 7: 100%の(1)と、L2とL3の間、溝の中心線、溝の跡(12%)  
 8: 100%の(1)と、L2とL3の間、柱の中心線、溝の跡(10%)  
 9: 100%の(1)と、L2とL3の間、柱の中心線、溝の跡(8%)  
 10: 100%の(1)と、L2とL3の間、柱の中心線、溝の跡(6%)  
 11: 100%の(1)と、L2とL3の間、柱の中心線、溝の跡(4%)  
 12: 100%の(1)と、L2とL3の間、柱の中心線、溝の跡(2%)

- 13: 100%の(1)と、L2とL3の間、柱の中心線、溝の跡(1%)  
 14: 100%の(1)と、L2とL3の間、柱の中心線、溝の跡(0.5%)  
 15: 100%の(1)と、L2とL3の間、柱の中心線、溝の跡(0.2%)  
 16: 100%の(1)と、L2とL3の間、柱の中心線、溝の跡(0.1%)  
 17: 100%の(1)と、L2とL3の間、柱の中心線、溝の跡(0.05%)  
 18: 100%の(1)と、L2とL3の間、柱の中心線、溝の跡(0.02%)  
 19: 100%の(1)と、L2とL3の間、柱の中心線、溝の跡(0.01%)



図17 34号竪穴建物跡実測図 (S=1/60)

### 33号竪穴建物跡 (図16)

E調査区北側の市道部分のC10Grにおいて検出した、床面積約27.8㎡の大型の竪穴建物跡である。市道造成の際に上部が削平を受けているほか、側溝の設置により遺構の一部が床面付近まで削平を受けている。平面形は方形を基調とするが、北辺はやや短くなっている。主軸はやや西に傾いており、大きさは検出面で南北約5.7m、床面で南北5.4m、東西5.3mである。床面レベルは約165.20mで、検出面からの深さは約30cmである。南辺部には検出面付近に浅い張出状の部分が認められるが、住居に付属する施設であるかどうかは明らかでない。建物跡は基本土層7層の黒色土まで掘り下げたのち、黒色土と霧島御池軽石と考えられる黄色軽石を混ぜた土で貼床を施している。床面中央付近を中心に硬化面が形成されている。床面にピットがみられるものの、柱穴は判然としない。また、建物床面の中央付近に灰跡と考えられる焼土層を確認している。

出土遺物には、須恵器 (260)、砥石 (267)、緑色凝灰岩製有孔円板 (291)・刀子 (304)、図示できなかった土師器 (壺・甕・鉢・高坏) などがある。これらの遺物は南東部の床面付近を中心に出土している以外は、南東方向から流れ込んだ状況を示している。出土須恵器から5世紀後半と考えられる。

### 34号竪穴建物跡 (図17)

E調査区北側の市道部分 (F10Gr) において検出した、推定床面積約33.9㎡の大型の竪穴建物跡である。1次調査の際に調査が行われた遺構であるが、一部調査区外に位置していたため、3次調査ではその未調査部分の調査を行った。33号竪穴建物と同様に、市道部にかかる部分の上部は削平を受けているほか、電柱の設置により北西部が削平を受けている。

平面形は南北に長い長方形で、主軸はやや西に傾いている。大きさは検出面で南北約6.9m、東西約5.4mで、床面では南北約6.7m、東西約5.1mである。3次調査の床面レベルは約164.80mであるが、1次調査部分では北側に向かって約20cm傾斜している。3次調査の検出面からの深さは約45cmである。建物は一度基本土層7層の黒色土まで掘り下げた後、その黒色土と霧島御池軽石と考えられる黄色軽石を混ぜた土で貼床を施している。貼床は全体的に薄い。床面には南北に広い範囲で硬化面を形成しており、中央やや南側に灰跡と考えられる被熱した土層が存在する。また、南辺の

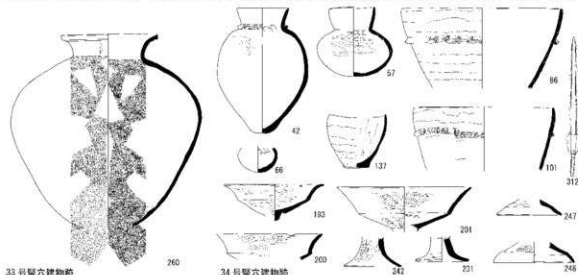


図18 34号竪穴建物跡出土遺物 (土器S=1/8、鉄器S=1/4)

表1 34号竪穴建物跡ベルト内鍛造剥片等分布状況1

土採取位置	採取土重量 (kg)	回収鉄滓等重量 (g)	含有比率 (g/kg)
b1	11.85	4.2	0.35
b2	11.45	3.6	0.31
b3	12.05	4.4	0.37
b4	17.45	3.5	0.20
c1	8.15	5.1	0.66
c2	17.20	7.3	0.42
c3	15.05	2.1	0.14
c4	9.65	0.7	0.07
d1	9.30	7.3	0.78
e2	7.75	5.0	0.65
e3	13.95	1.1	0.08
e4	12.05	0.9	0.07
e1	-	-	-
e2	10.45	1.7	0.16
a3	8.25	0.6	0.07
e4	9.90	0.7	0.07

表2 34号竪穴建物跡ベルト内鍛造剥片等分布状況2

土採取位置	b	c	d	e
1	0.35	0.66	0.78	
2	0.31	0.42	0.63	0.16
3	0.37	0.14	0.08	0.07
4	0.20	0.07	0.07	0.07

(g/kg)

中央付近にはステップ状の高まりが設けられている。この部分は基本土層7層に類似する黒色土と貼床に類似した土で構成されている。他の建物跡にはみられないが、入口部の段として機能していた可能性がある。4本柱と考えられる。

1次調査時の状況については不明であるが、3次調査において鍛造剥片・粒状滓および碗形滓が出土している。ただし、鍛造剥片と粒状滓については、検出面付近から確認しており、その出土状況から床面よりも遺構外に由来する可能性が考えられた。そのため、幅約30cmの土層観察用のベルトを図17のように南北50cm、厚さ10cm程度の単位で区分して採取した後、篩選別を行って粒状滓や鍛造剥片の含有状況の検討を試みた。その結果、表1・2のように、検出面付近の土採取位置d1において鍛造剥片・粒状滓が含まれる量が多く、建物跡中心側（北側）（土採取位置b側）へ向かうにつれてその重量比は減少している。また、垂直軸ではレベルが下がるにつれて含まれる鉄滓類の量が減少している状態を読み取ることができる。また、小型の鉄滓がb4から出土しているが、これ以外では、c3・b2からも鉄滓が出土している。これらの状況から、少なくとも3次

調査の範囲内においては、南側から建物内に流れ込んだ状況を想定することができる。ところで、埋土下層では鉄滓類の含有量が著しく減少している状況を考慮すると、鉄滓類が流れ込む以前に、建物内には既に土砂がある程度堆積していたことが考えられる。その他の遺物の出土状況からすると、西側から流れこんだ状況を想定することができる。

出土遺物（図18）には、土師器（壺・甕・鉢・高坏）のほか、細い鑿状の鉄器（312）などが出土している。このほか小片であるが、高坏脚部を転用した羽口とともに専用羽口と考えられるものが出土している。また、鉄滓が付着した土器の口縁も出土しており、鍛冶作業に関連した施設であった可能性がある。鍛冶に関連するかは明らかでないが、口縁部が被熱により変色した壺（巻頭図版8-1）もみられる。これらの遺物の出土状況は、3次調査の範囲内では、東西方向では西側から流れ込んだような状況を呈している。なお、鑿状の鉄器は床面付近から出土している。時期は、出土遺物を総合的に判断すると、6世紀前葉～中葉頃と考えられる。

### 35号竪穴建物跡（図19）

E調査区北側のD11Grで検出した、床面積約12.2m<sup>2</sup>の小型の竪穴建物跡である。平面形は方形で、主軸は西にやや傾いている。大きさは検出面で南北約3.8m、東西約3.5m、床面で南北約3.7

m、東西約3.3mである。床面レベルは165.35mで、検出面からの深さは約45cmである。建物跡は基本土層7層まで掘削を行った後、黒色土と霧島御池軽石と考えられる黄色軽石を混ぜた土で貼床を施している。

当建物跡については、検出面付近において多くの遺物を検出している。また、検出面だけでなく埋土内からも遺物が出土しているが、レベルが低くなるにつれて遺物は少なくなり、床面付近の出土遺物は少ない。土層の観察では埋土を分層することは困難であったが、これらの遺物の出土状況をみる限りでは、検出面付近の一群と、南側から流れ込むような位置にある埋土中の一群に分けることが可能である。建物を埋める工程に対応していると考えられる。以上のような状況から、本建物跡は、廃絶に伴って、南側から埋める→土器投棄→北側から埋める→土器投棄のような行為の流れを想定することができる。

出土遺物には、土師器（壺・甕・鉢・高坏）、金床石の破片と考えられる石器などがあるが、他の建物跡に比べると鉢は少ない。甕の口縁はキャリパー状に内湾するものや外側に開くものがみられるが、高坏は全体に底部と口縁部の境の稜がしっかりしていることから、5世紀後半頃と考えられる。

#### 36号竪穴建物跡（図21）

E調査区の北側のE・F11Grで検出した、床面積約26.8㎡の中型の竪穴建物跡である。37号住居に隣接している。掘形の規模は検出面で南北約5.9m、東西約5.1mで、床面で南北約5.6m、東西約4.8mである。床面レベルは165.05mで、検出面からの深さは約50cmである。平面形は方形で、主軸はほぼ南北軸に沿っている。主柱穴は対角線上に4つを確認しているが、さらに地床炉を扶んで南北に1本ずつピットを検出しており、柱は6本用いられたと考えられる。本建物跡は基本土層7層の黒色土まで掘り込んだ後、黒色土と霧島御池軽石と考えられる黄色軽石を混ぜた土で貼床を施している。床面の中央付近には炉跡と考えられる焼土を伴った土坑がある。床面付近には硬化面が形成されているが、硬化面の南側で、一部周辺よりもしまりが弱い範囲が存在する。土坑の可能性を考えたが、掘形は確認できなかった。

なお、東西の土層断面軸がやや北寄りとなっているのは、検出面付近では図の住居北端よりも1mほど北側の所まで埋土に類似した黒色土が広がっており、当初その範囲を住居の範囲と考えていたためである。この黒色土は厚さ数cm程度であり、土層観察とその他の住居の様相から本遺構に伴うものではないと判断した。

出土遺物（図22）には土師器（壺・甕・鉢・模倣坏・高坏）、石器・石製品、鉄器がある。ほかの竪穴建物跡ではみられない模倣坏や仕切角鉢など様々な器種がみられる。また、高坏の数量が多く、中には脚部を羽口に転用したものが含まれている。これらの遺物は35号竪穴建物跡と同様に、検出面付近から埋土1層において非常に多く出土しており、床面付近では少ない。遺物や土層の堆積状況からは、北東-南西方向の建物対角線方向でレンズ状に遺物が堆積していることがわかる。自然堆積による周辺からの流れ込みというよりも、意図的に投棄された可能性が高い。なお、刀子状の鉄器（308）は床面付近から出土しており、滑石製白玉2点と蛇紋岩製白玉1点は、炉と考えられる中央の土坑内埋土を篩選別にかけた際に出土している。甕および高坏の形態は多様であり、時期の特定は難しいが、5世紀後半～6世紀前半頃の時期が考えられる。



### 37号竪穴建物跡 (図23)

E調査区北側のF・G11Grで検出した、床面積約25.9㎡の中型の竪穴建物跡で、方形を基調とするが、北東部に床面で長さ(南北)約0.80m、幅(東西)約2.10mの大きさの張出部を有する。掘形の規模は張出部を含めて、検出面で南北約6.0m、東西約5.8m、床面で南北約4.8m、東西約4.9mである。床面のレベルは約165.00mで、検出面からの深さは約50cmである。主軸は若干西に振れるもののほぼ南北軸に沿っており、36号建物跡とは平行に近い関係にある。本建物は基本土層7層の黒色土まで一度掘り下げた後、黒色土と霧島御池軽石と考えられる黄色軽石を混ぜた土で貼床を行っている。掘形から、黒色土の掘削は、壁沿い1m付近を10cm程度深く掘り込んでいる。中央付近の高い箇所は硬化面の範囲に近いので、意図的に中央を高く残している可能性がある。床面の中央やや南寄りに炉を設ける。対角線上に4本の柱穴をもつ。

なお、検出段階では、張出部の北辺と同じ範囲まで北西部にも黒色土が堆積していた。この黒色土は36号竪穴建物跡と同様に検出面からの深さが数cm程度であり、観察から本遺構に伴うものではないと判断した。

出土遺物(図24)には、土器(甕・壺・高坏)、石器などがある。このほか、専用羽口の可能性がある羽口や、透かし孔をもつ器台と考えられる土器片(図版34-348)、軽石製品が出土している。

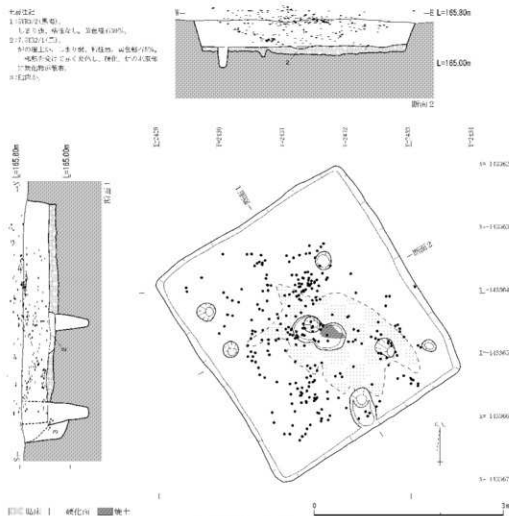


図19 35号竪穴建物跡実測図 (S=1/60)

る。専用と考えられる羽口の内面には、鉄分が付着して赤色顔料様に濃い赤色に変色した部分が見られる。なお、179は坏部が検出面、脚部は床面から出土している。これらの遺物は、他の竪穴建物跡に比べると床面付近出土の比率が高く、埋土出土の遺物量は少ない。調査時においても、隣接する36号竪穴建物跡から出土する遺物の量とは著しい差を認めることができた。また、本建物跡出土土器と36号竪穴建物跡出土土器が接合した例が散見される。甕の形態は床面出土のものは外側に開く形態であるが、検出面付近から出土しているものは全体に内湾した新しい形態となっている。高坏は底部と口縁部の稜が比較的明瞭なものから不明瞭なものを含んでいる。全体としては6世紀前葉～中葉頃と考えられる。36号竪穴建物跡の出土遺物との接合関係からは、本建物跡の方が新しいと考えられるが、併存していた可能性がある。

### 38号竪穴建物跡 (図25)

E調査区北側のD12Grで検出した、調査部床面積約15.1㎡の中型の竪穴建物跡である。建物跡のおよそ半分は調査区外に位置しているが、平面形は方形であると考えられる。主軸は西側に傾いている。掘形の規模は、東西方向は不明であるが、南北方向では検出面で約4.9m、床面で4.8mである。床面レベルは約165.50mで、検出面からの深さは約30cmである。他の建物跡に比べると床面のレベルがやや高い。竪穴建物跡は基本土層7層の黒色土まで掘り下げた後、その黒色土と霧島御池軽石と考えられる黄色軽石を混ぜた土で貼床を施している。貼床の厚さは、凹凸があるものの比較的均一である。床面は北よりに硬化面を形成しており、中央や南よりに炉跡と考えられる焼土を伴う土坑が存在する。柱穴は判然としない。平峰遺跡では数少ない切りあいを持った遺構で、40号竪穴建物跡と一部重複している。埋土中での切りあ関係の確認は困難であったが、床面において本建物跡が40号竪穴建物跡を切っているのを確認した。

出土遺物 (図28) には、土師器 (甕・鉢・高坏) のほか、刃物痕や研磨痕が残る44cm程度の大形の軽石製品が出土している。これらの遺物は、検出面付近出土と床面付近出土とに分かれ、途中の埋土からの出土は少ない。出土遺物は少ないが、6世紀前葉～中葉頃の時期が考えられる。

### 39号竪穴建物跡 (図26・図27)

E調査区北側のD・E12Grで検出した、床面積約15.1㎡の中型の竪穴建物跡である。平面形は方

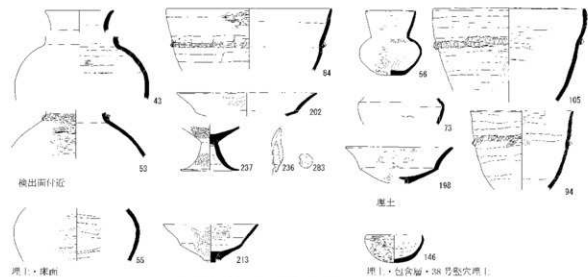


図20 35号竪穴建物跡出土遺物 (土器S=1/8、ほか縮尺不同)

形で、主軸は西側にやや傾く。掘形の大きさは、検出面では明らかでないが、床面では南北約4.1m、東西約3.4mである。床面レベルは約165.25mで、検出面からの深さは約40cmである。建物跡は一度基本土層7層の黒色土まで掘り下げた後、黒色土と霧島御池軽石と考えられる黄色軽石を混ぜた土で貼床を施している。中央付近から南側にかけて硬化面を形成している。炉跡と考えられるような焼土を伴う土坑は確認できなかったが、硬化面の中央付近には硬化していない部分が存在するため、炉に類似するような施設が存在した可能性がある。このほか、北半部では、南側の貼床よりも高いレベルでスロープ状に南側に傾斜した硬化面を検出しており、二次床面と考えられる。土層断面では、二次床と考ええる部分の壁面が小さな段状を呈するほか、外側へやや広がっている部分が存在することから、床面を張り直す際に壁面を若干掘り直している可能性が考えられる。柱穴は判然としないが、4本であろうか。

また、本建物跡は40号堅穴建物跡と切りあっているが、38号堅穴建物跡と同様に埋土での切り合い関係の把握は困難であった。両遺構の切り合いは貼床部分で確認できたのみであるが、本建物跡

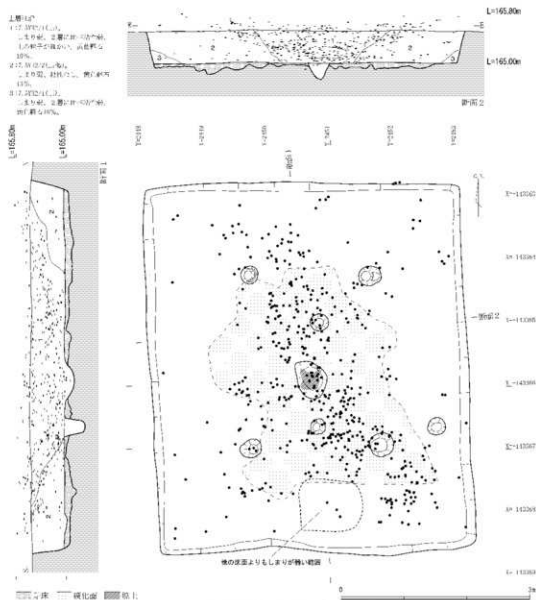


図21 36号堅穴建物跡実測図 (S=1/60)

が40号竪穴建物跡を切っている。

出土遺物(図28)には、土師器(壺・甕・鉢・高坏)、石器、鉄器などがある。これらの遺物は遺構検出面付近の出土量が非常に多く、レンズ状態に堆積している状況を読み取ることができる。一括して投棄された可能性がある。検出面よりも下位では出土量が減少し、二次床面から一次床面付近で再び多くなるが、二次床面の下からの出土は少ない。なお、埋土中から滑石製有孔円板が出土している。甕の口縁は外側に開くものが多く、内湾するものはみられない。5世紀後半～6世紀前半頃と考えられる。

#### 40号竪穴建物跡(図26・図27)

E調査区D・E12GrおよびD・E13Grで検出した、推定床面積35.6㎡の大型の竪穴建物跡であ

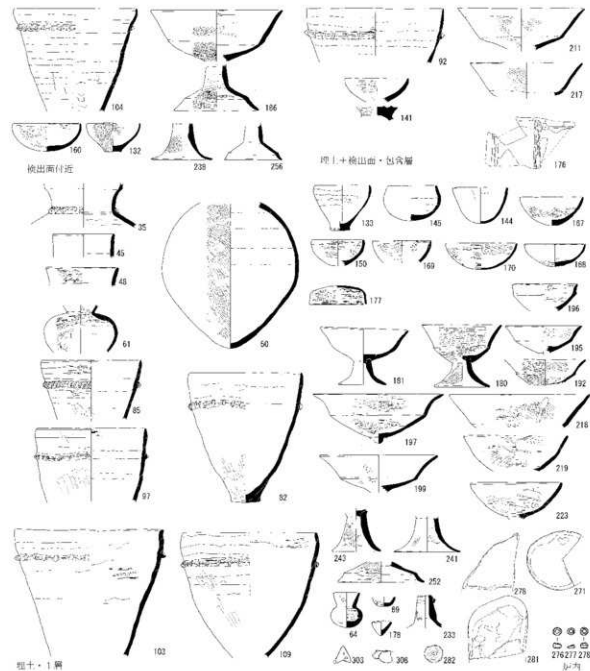
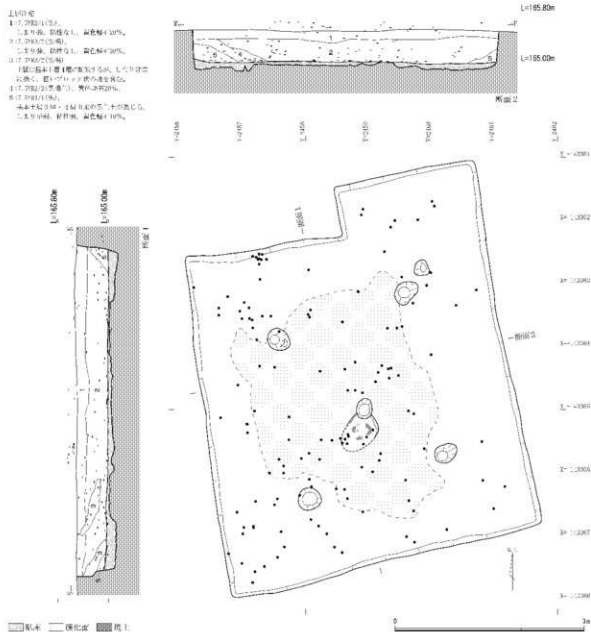


図22 36号竪穴建物跡出土遺物(土器S=1/8、ほか縮尺不同)

る。平面形は南北に長い長方形である。主軸はほぼ南北軸に沿っている。掘形の大きさは、検出面で南北約7.0m、東西約5.6mで、床面で南北約6.7m、東西約5.3mである。床面レベルは約165.30mで、検出面からの深さは約45cmである。建物は一度基本土層7層の黒色土まで掘り下げた後、南半分については、黒色土と霧島御池軽石と考えられる黄色軽石を混ぜた土で貼床を施している。北半分については、床面の表面には黄色軽石と黒色土が混ざった土を観察することができるが、貼床というよりは人々の行き来に伴って黄色軽石が混じったものと考えられる。床面には硬化面を形成するが、他の建物跡に比べると硬化面の範囲が狭い。硬化面を形成する土の多くは、貼床の中でも黄色軽石をブロック状に多く含む部分であるため、貼床が少ないことに起因する可能性がある、また、床面の中心付近では、黄色軽石が少ないため黒みが強く、また硬化していない部分が認められる。床面検出段階では、土坑などの掘り込みが存在する可能性を考えて断ち割りを行ったが、掘り



込みは確認できなかった。そのため、単純に硬化していない床面（基本土層7層）であると考えられる。他の建物跡では炉跡が位置する部分にあたることから、類似する施設が存在したため、人々の行き来が希薄であり、黄色軽石が混じりにくい状況であったと考えられる。ただし、炉跡と考えられるような焼土面は確認されていない。また、鍛冶作業に伴う金床石や台石と考えられる強く被熱したり、鉄錆がついた石器が出土しているが、鍛冶炉などの鍛冶に関連した遺構も確認できなかった。柱穴は長軸に並ぶように東西で検出している。東西で対応する位置にあるものは少ないが、6本の可能性が高い。

すでに述べたように、本建物跡は38号・39号竪穴建物跡と切り合い関係にあり、両者に切られており、2軒よりも古いと考えられる。

出土遺物（図29）には、土師器（壺・甕・鉢・高坏）、須恵器（短頸壺）、石器などがある。土師器は北西部の床面からやや浮いた位置からの出土が多く、甕や鉢などがまとめて出土している。そのほかの遺物については、周辺から緩やかに流れ込んだ状況を呈している。また、埋土中でガラス小玉1点が出土しているほか、赤色顔料の粒を床面の数カ所で確認している。ガラス小玉が出土した周辺の土を篩選別にかけたが、他には出土していない。甕には107のように、一部口縁が内湾するものを含んでいるが、高坏坏部の底部と口縁部の境は比較的明瞭なものが多い。切り合いから、39号建物跡よりも古いと考えられ、5世紀後半頃と考えられる。

#### 41号竪穴建物跡（図30）

E調査区のD・E13Grで検出した、床面積約10.5㎡の小型の竪穴建物跡である。平面形は方形であるが、主軸は他の建物跡と異なり東側に傾いている。掘形の規模は、検出面で南北約3.4m、東西約3.5m、床面で南北約3.3m、東西約3.4mである。床面レベルは165.35mで、検出面からの深さ約45cmである。基本土層7層の黒色土まで一度掘り下げた後、黒色土と霧島御池軽石と考えられる黄色軽石を混ぜた土で貼床を施している<sup>(4)</sup>。北西部には床面まで達する掘り込みがみられるが、土層の観察から本建物跡には伴わないと判断した。柱穴は判然としない。

出土遺物（図31）には、土師器（壺・甕・鉢・高坏）、石器・石製品などがある。これらの遺物は床面付近で出土しているほか、埋土上層の2層で出土している。なお、滑石製管玉も埋土中から

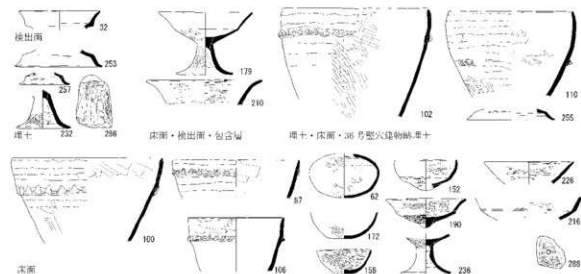


図24 37号竪穴建物跡出土遺物（土器S=1/8、石器S=1/12）



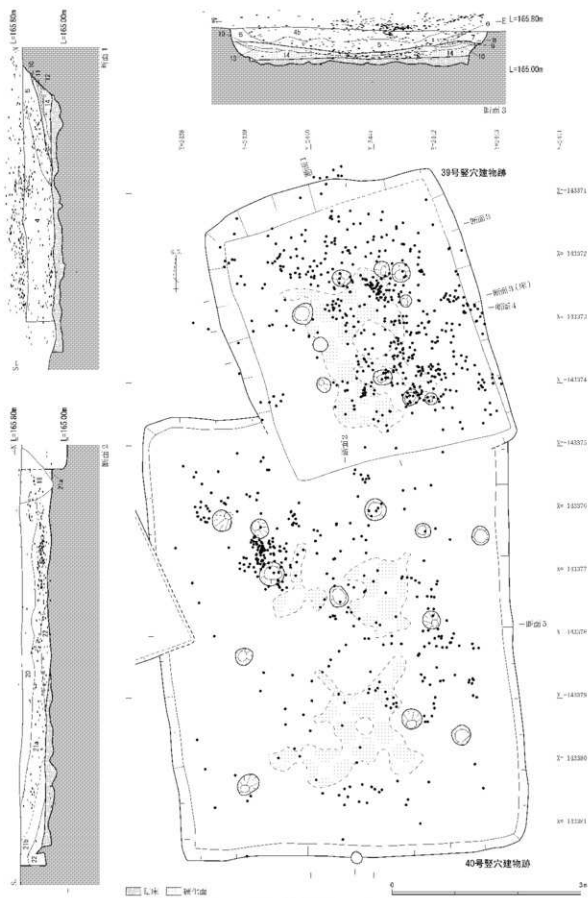


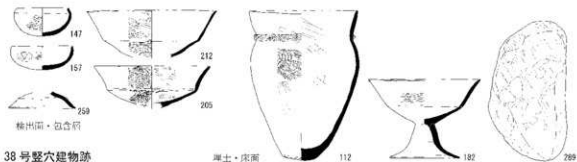
图27 39号·40号竖建物跡实测图 (S=1/60)



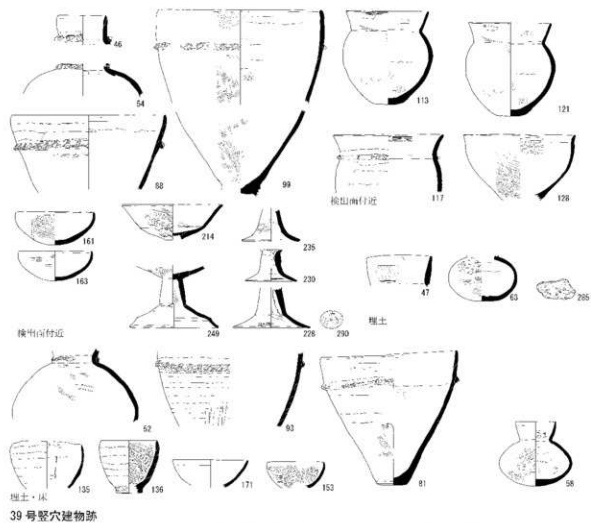
の出土である。このほか、埋土や床面付近において灰色粘土の塊を検出している。甕は直線的に外側に開くが、高坏は全体に稜が不明瞭である。6世紀前葉～中葉頃と考えられる。

#### 42号竪穴建物跡 (図32)

E調査区E14Grで検出した、床面積約13.0m<sup>2</sup>の小型の竪穴建物跡である。平面形は方形を基調とするが、北東辺は中央が若干突出している。主軸が東西のどちらに傾いているのか判断は難しいが、南北の対角のズレや、炉跡と考えられる土坑の位置を考慮すれば、西側に傾いていると考えられる。掘形の規模は、検出面で南北約3.9m、東西約3.9m、床面で南北約3.8m、東西約3.8mであ



38号竪穴建物跡



39号竪穴建物跡

図28 38号・39号竪穴建物跡出土遺物 (土器S=1/8、ほか縮尺不同)

る。床面レベルは165.25mで、検出面からの深さ約30cmである。建物は一度基本土層7層の黒色土まで掘り下げた後、黒色土と霧島御池軽石と考えられる黄色軽石を混ぜた土で貼床を施している。床面の範囲に対して比較的広い範囲で硬化面を形成しており、中央には炉跡と考えられる焼土を伴う土坑が位置している。また、炉跡を切る形で土坑が掘削されているが、この土坑からは甕が出土しており、本建物に伴う遺構である。

出土遺物(図33)には、土師器(壺・甕・鉢・高坏)、石器・石製品などがある。これらの遺物は、出土状況から、床面からやや高い埋土3層の上面と、埋土2層の上半でレンズ状態に堆積している様子を読み取ることができる。検出面付近で頁岩製管玉が出土している。甕は外側へややく形態であるが、高坏は口縁部の外反が強く、稜は明瞭である。5世紀後半頃の時期と考えられる。

#### 43号竪穴建物跡(図34)

E調査区のF14Grで検出した、床面積約18.2m<sup>2</sup>の中型の竪穴建物跡である。平面形は方形を基調とするが、北西辺に張出部をもつ。主軸の傾きの判断は難しいが、南北の対角のズレから、東側に傾いていると考えられる。張出部を含む掘形の大きさは、床面で北東-南西軸で約3.8m、北西-南東軸で5.8mである。床面レベルは約165.05mで、検出面からの深さ45cmである。張出部の床面レベルが約165.10mでわずかに高い。建物は一度基本土層7層の黒色土まで掘り下げた後、黒色土と霧

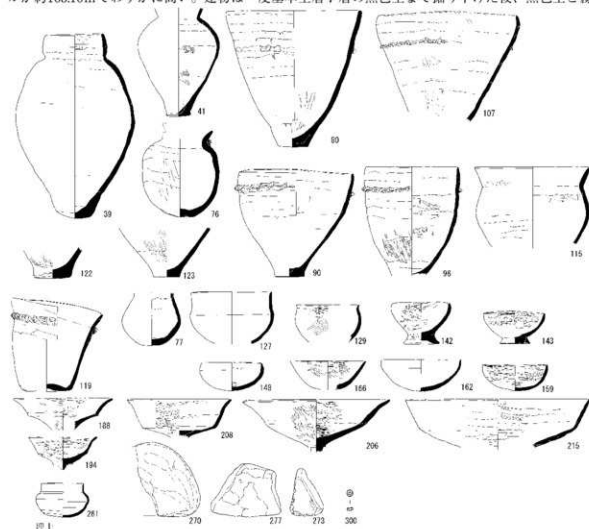


図29 40号竪穴建物跡出土遺物(土器S=1/8、ほか縮尺不同)

鳥御池軽石と考えられる黄色軽石を混ぜた土で貼床を施している。北西の張出部のみは貼床を施さず基本土層7層の黒色土を床面としている。ほかの建物と同様に貼床を施すものの、床面に明瞭な硬化面を形成していない。また、床面検出段階だけでなく、掘形底面の検出段階でも柱穴と考えられる遺構を検出できなかった。そのため、掘形の記録を取ったのち、基本土層8層の鬼界アカホヤ火山灰上面まで掘り下げたところ、中央付近で4基のピットを検出した。ただし、これらは埋土

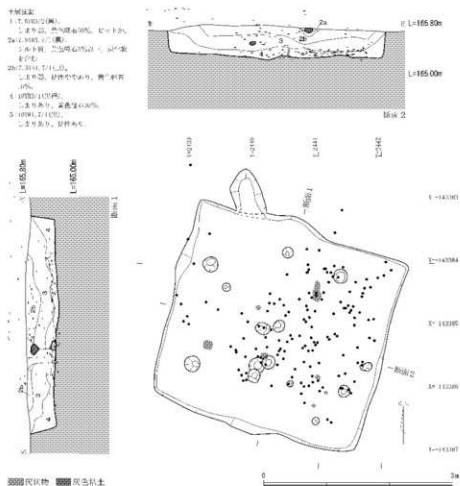


図30 41号竪穴建物跡実測図 (S=1/60)

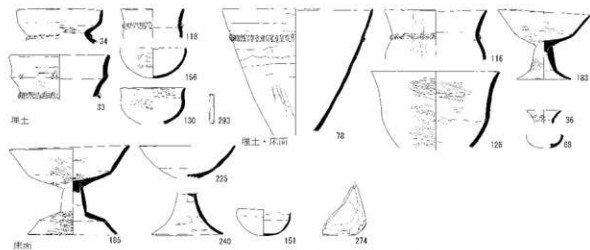


図31 41号竪穴建物跡出土遺物 (土器S=1/8、ほか縮尺不同)

- 1層下位  
 1. 厚さ約2cmの灰土層。  
 土質は、硬質、黄砂3割程度、  
 基本土層と同質。  
 2. 厚さ約1cmの灰土層。  
 土質あり、灰土層、黄砂層1割、  
 3割程度、黄砂層1割、黄砂層1割、  
 4. 厚さ約1cmの灰土層、黄砂層1割、  
 黄砂層1割程度、黄砂層1割、  
 5. 厚さ約1cmの灰土層、黄砂層1割、  
 黄砂層1割程度、黄砂層1割、  
 6. 厚さ約1cmの灰土層、黄砂層1割、  
 黄砂層1割程度、黄砂層1割、

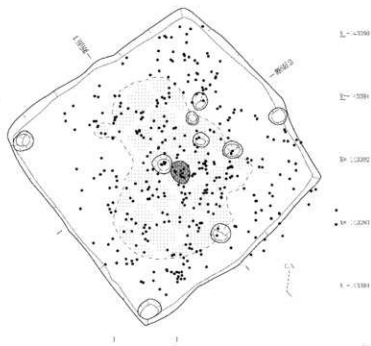
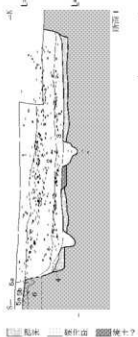
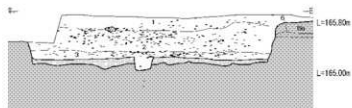


図32 42号竪穴建物跡実測図 (S=1/60)

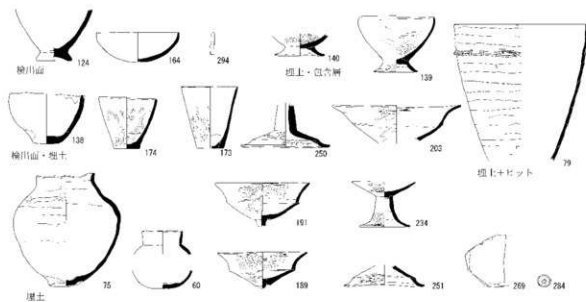


図33 42号竪穴建物跡出土遺物 (土器S=1/8、ほか縮尺不同)



の土層断面にかかっており、土層断面図を見直したところ、1基は埋土中にその痕跡を確認することができた。ほかの2基は埋土では確認できなかったため、本遺構に伴うか、あるいはそれ以前の遺構であると考えられる。

このほか、硬化面は確認されていないが、39号竪穴建物跡と同様に床面を張り直したと考えられる層が確認されている。39号竪穴建物跡と同様に黄色軽石を多く含む層と含まない層が互層状に堆積している。壁面形状や土層断面から、二次床面形成時に若干壁面が掘り直されている可能性が高く、若干高い張出部分もこの際に拡張された可能性がある。

埋土の土層は、南東側から土が流れ込んだ状況を示しているが、西半分では、埋土2層・3層が「V」字状に堆積している。土層の堆積状況から、埋土の3層下面で掘り込まれている可能性が考えられる。あるいは36号竪穴建物跡のように、埋める段階で溝状に残っていたことも考えられる。

出土遺物(図35)には、土器(壺・甕・鉢・高坏)、石器、鉄器などがある。また、特筆すべき点として、検出面から埋土にかけて多量の土器片が出土しているが、他の建物跡ではみられない形態の土器が含まれている点を挙げる事ができる。51は他地域産と考えられる雲母を多く含む壺の胴部である。72は壺の胴部下半と考えられるが、外面には、判断が難しいが、細かな刺突あるいは何らかの種子痕のような細かな凹凸がみられる。125は内面下半にコゲ状の付着物がみられるため、煮炊き具の底部であると考えられるが、底部外縁に高台状の断面三角形の突出部がめぐって

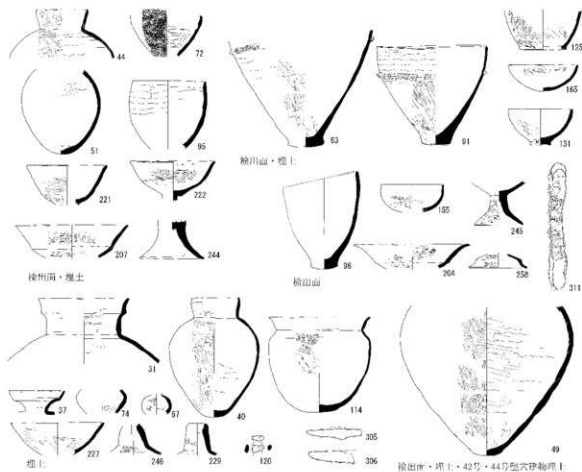


図35 43号竪穴建物跡出土遺物(土器S=1/8、鉄器S=1/4)

る。37は、甕の口縁部に類似した口縁である。120は、把手状の形態を呈する土製品で、瓶のミニチュア品の可能性がある。295は土玉であるが、通常みられる中央の孔以外に、側面上方から中央下方に向かってほぼ等間隔で3カ所に孔が開けられている。以上の遺物のほか、埋土中から、41号竪穴建物跡でもみられたような灰色粘土の塊が出土している。また、埋土中には炭化したモモの核や子葉が含まれていた。

これらの遺物は、検出面付近での遺物の出土量が多いが、検出面から検出面下40cm前後まで、広い範囲のレベルで土器が接合している。この背景には埋土2層・3層にみる溝状堆積が関係してい

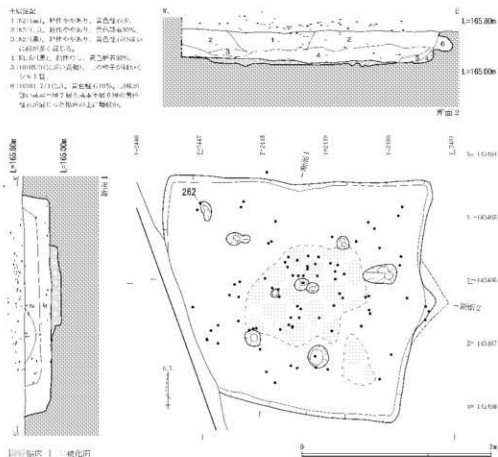


図36 44号竪穴建物跡実測図 (S=1/60)

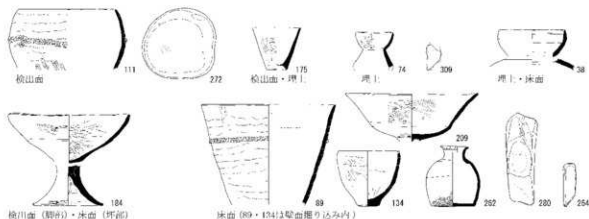


図37 44号竪穴建物跡出土遺物 (土器S=1/8、ほか縮尺不同)

ると考えられる。また、北西の張出部では遺物の出土量が著しく少なくなっている。

遺構の位置や構造だけでなく、出土遺物も本竪穴建物の特殊な性格をうかがわせる。

甕は内湾する形態はみられない。高坏は底部と口縁部の境が不明瞭なものがみられるが、5世紀後葉～6世紀前葉頃の時期と考えられる。

#### 44号竪穴建物跡（図36）

E調査区E15Grで検出した、小型と考えられる調査部床面積約12.8㎡の竪穴建物跡で、南西隅の一部が調査区外に広がっている。主軸はほぼ南北軸に沿っている。掘形の規模は、検出面で南北約3.8m、東西約4.1mで、床面で南北約3.6m、東西約4.0mである。床面レベルは165.25mで検出面からの深さは45cmである。建物跡は一度基本土層7層の黒色土まで掘り下げた後、黒色土と霧島御池軽石と考えられる黄色軽石を混ぜた土で貼床を施しており、硬化面が認められる。建物跡の平面形は方形を基調としているが、東辺には平面三角形を呈する掘り込みが壁面に認められる。検出時点で東辺の掘り込みが確認できないことと、土層の観察（図版12-5）から、遺構掘削面から張出状に掘り込んだものではなく、壁面の途中を掘り込んだものであることがわかる。この掘り込みの前面、やや南へずれた所には灰色粘土が設置されている（図版12-6）。粘土やその周辺が被熱した状況を観察できないことや、掘り込みが建物外へ貫通していないことから、竈や煙道などの可能性は低い。なお、掘り込み内からは壺の底部片、甕（89）の口縁部破片のほか、伏せた状態で鉢（134）が出土している。掘込の埋土は黒みがつよい土に黄色軽石が混じっており、基本土層7層と黄色軽石が混じった貼床に類似している。意図的に埋めている可能性がある。

出土遺物（図37）には、土師器（壺・甕・鉢・高坏）、須恵器、石器、鉄器などがある。須恵器は百済系の平底瓶と考えられる資料で、床面の北東部から出土している。口縁部を3カ所連続して打ち欠いている以外は、欠損した箇所は認められない。遺跡内からは古代の遺物も出土しているため、当初、古代の遺物である可能性を考えたが、周辺が土坑などの攪乱を受けた状況を認められないことと、畿内などに同様な資料が存在することから、本建物跡に伴う遺物であると判断した。遺物は検出面付近、床面付近、掘り込み内から出土している。床面付近では、高坏坏部と石器がそれぞれ近接して出土している。また、高坏（184）は、脚部が検出面、坏部が床面から出土している。同様に、脚部と坏部が明らかに離れて出土している例は、37号竪穴建物でもみられる。209号坏部のみが床面から出土しており、坏部と脚部を意図的に分離して持ち出している可能性が高い。砥石（279）も割れた状態で離れた位置から出土している。掘り込み内に納められた土器などとおわせて、一つのモノを分離させる行為が存在したと考えられる。89の甕は直線的に外へ開くが、出土している高坏は全体的に底部と口縁部の境が不明瞭である。須恵器および遺物の総合的状況から5世紀後葉～6世紀前葉頃の時期が考えられる。

#### 45号竪穴建物跡（図38・図39）

E調査区F17Grで検出した調査部床面積約45.0㎡の大型の竪穴建物である。古代の道路状遺構や土坑などに切られている。1次調査でみつまっている30号・31号竪穴建物跡と同じく平面形が五角形を呈し、北側に一辺、南側に角を配する向きも共通している。掘形の規模は、床面で一辺が5.2m前後で、北辺から南角までの距離は床面で約8.6mである。床面レベルは165.40mで、検出面からの深さ40cmである。各頂点对応すると考えられる柱穴も検出している。南東辺に一部張出状の部



分の黒色土を確認しているが、本遺構に伴うかは明らかでない。なお、平面形が五角形を呈する3基の竪穴建物跡の中でもっとも規模が大きい。建物跡は他の建物と同様に、一度基本土層7層の黒色土まで掘削した後に、黒色土と霧島御池軽石と考えられる黄色軽石を混ぜた土で貼床を施している。床面はやや南よりに硬化面を形成しているが、中央付近は硬化していない。なお、中央の土坑内のピットからは古代の埴が出土しており（図版40）、古代の遺構と考えられる。

出土遺物には、土器（壺・甕・鉢・高坏）、石器、鉄器などがある。また、後世の道路状遺構および14号・15号土坑に切られているため、検出面や埋土内には古代の遺物が含まれる。他の建物跡に比べると遺物の出土数は少ない。甕はキャリバー状に口縁が内湾するものから、全体に内湾するものが中心であることから、6世紀前葉～中葉頃の時期が考えられる。

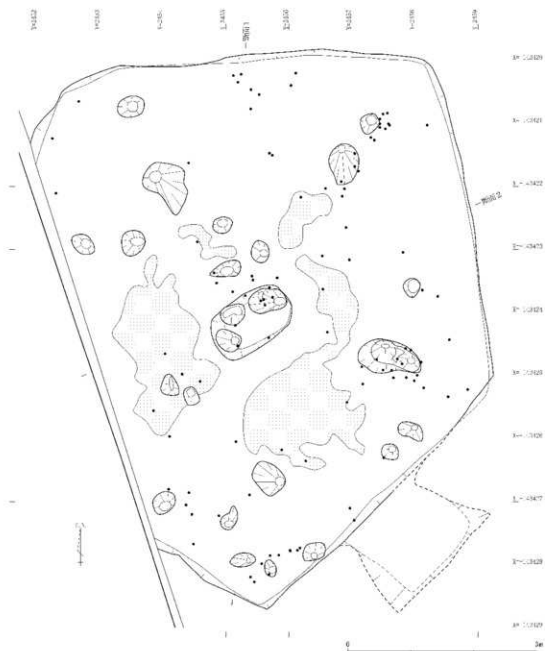


図38 45号竪穴建物跡実測図 (S=1/60)

#### 46号竪穴建物跡 (図40)

E調査区南端付近のF・G18Grで検出した、推定床面積約18.5㎡の中型の竪穴建物跡である。3次調査では1次調査時の調査範囲外に位置する部分の調査を行った。1次調査範囲の大部分が南北にはしる溝状遺構と、それに接続するような道路状遺構に切られており、東側の形状ははっきりしないが、平面形は方形である。主軸はやや西側に傾いている。掘形の規模は、検出面で南北推定約5.0m、東西約4.2m、床面で南北約4.8m、東西約4.0mである。床面レベルは約165.40mで、検出面からの深さ30cmである。3次調査では掘形の底面は基本土層7層で、その上に貼床を行っている状況を確認しているが、一次調査の資料をみる限りでは貼床は認められない。3次調査では、貼床内に霧島御池軽石が鳥状に残った状況(図版13-5)を確認している。竪穴の掘削段階で、おそらく基本土層6層の霧島御池軽石を掘り残したものと考えられる。床面には北側に一部硬化面が認められるほか、推定径1.30m、深さ0.55m程度の土坑を検出している。土坑は貼床を切っているが、建物内に埋土が堆積する以前には埋まっているため、本建物跡に伴う遺構であると考えられるが、遺物は出土していない。このほか、1次調査の土層断面(断面1)では、中央付近に硬化部分(埋土8~10)を認めることができ、何かしらの遺構が存在した可能性があるが、詳細は明らかでない。以上のほか、1次調査時には、ビット以外に土坑の細長い掘り込みが記録されている。その性格は明らかでないが、道路状遺構に伴うなど後世のものである可能性がある。

遺物は壺のミニチュア品と考えられるもの(図49-70)と、鉢(図58-149)が出土しているが、他に図示できるような遺物は出土しておらず、他の建物跡に比べると著しく遺物の出土量が少ない。遺物の出土量が少ないため時期の判断は難しい。他の建物跡の状況等から6世紀前葉~中葉の時期に収まると考えられる。

#### 47号竪穴建物跡 (図41)

E調査区市道部東側のI10Grで検出した床面積約8.9㎡の小型の竪穴建物跡で、今回調査を行った

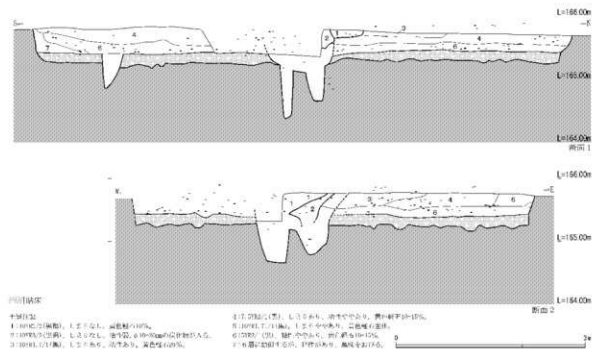


図39 45号竪穴建物跡土層断面実測図 (S=1/60)







70cmであるが多くは68～70cmの間に収まる。また、凹み底面は硬化が著しいほか、鉄分により赤く変色している。この凹みは「波板状凹凸面」とされ、その性格は牛馬歩行痕などの説（東2002・2003）が知られている。1次調査の資料では確認できず、加えて、45号竪穴建物跡と重なる狭い範囲でしか確認していないため、建物跡の埋土のしまりが弱かった事が形成要因と考えることができる。

遺構の年代を示す遺物はほとんど出土していない。土層の観察から9～10世紀頃と考えられる15号土坑を切るとともに、桜島3テフラ（桜島文明軽石）層堆積時にはすでに埋没していることがわかる。また、区画溝とされる東側の溝状遺構に接続すると考えられる、中世に属する可能性が高い。

#### 溝状遺構 (H10Gr)

E調査区市道部東側のH10Grで検出した溝状遺構で、南北へと延びており1次調査の溝状遺構の延長線状に位置しており、一連の遺構と考えられる。基本土層7層である霧島御池軽石層を底面としている。出土遺物はないが、1次調査の成果から中世の区画溝であると考えられる。

## (2) 土坑

### 13号土坑 (図42)

F調査区F・G14Grの境界付近に位置する土坑である。遺物の出土状況から遺構の存在を想定して、形状把握のためのトレンチを入れたが、5層の堆積土と埋土の区別は困難であった。精査を繰り返しながら掘り下げた結果、底面と思われる土を確認し土坑と判断することができた。底面は橙色の霧島御池軽石に類似した土を薄くレンズ状態に張っており、硬化面状に強くしまりがあがるが、上面には細かな凹凸がみられる。遺構本来の大きさと形状はあきらかにできなかった。また、遺構の性格も不明である。

出土遺物は、黒色土器や土師質土器の坏などが出土している。遺構の範囲が明らかでないが、遺構の埋土と考えられる範囲内から比較的多く出土している。9～10世紀頃の時期が考えられる。

### 14号土坑

F調査区の45号竪穴建物跡埋土内に掘りこまれた土坑である。45号竪穴建物埋土の埋土内での両遺構の判別は困難であり、建物跡の埋土掘削段階で底面のみを検出した。13号土坑と同様に、不整楕円形の底面に、橙色の霧島御池軽石に類似した土を張っている。底面の規模は、東西約1.2m、南北約0.9mである。底面レベルは約165.53cmである。

### 15号土坑

F調査区14号土坑と同様に45号竪穴建物跡に重複した土坑である。土層観察から建物跡の埋土を掘り込んでいる状況が確認できる。土坑は平面形長楕円形で、内部にはビット状の掘り込みがみられ、その中の一つから土師質土器の坏が落ち込むような状態で出土している（図版14-3）。土坑掘削形の底面レベルは約165.2mで、遺構掘削面のレベルが14号土坑と同程度と想定すると、深さは30cm程度深い。ビットの底面はさらに深くなる。13号・14号土坑の底面には橙色の霧島御池軽石類似の土を貼り付けているが、本土坑ではその土はみられない。

ビット内の出土遺物から、9～10世紀頃の時期が考えられる。

### (3) 畦状遺構

F・F調査区壁面の土層観察によって、桜島3テフラ（桜島文明軽石）が波状に凸凹した状態で堆積している（巻頭図版4、図版14-8）のを確認している。その形状から畦状遺構であると考えられ、15世紀代の畑が存在していたことを示唆している。また、下の土が巻き上がって桜島3テフラと混じったような状況を呈する部分が見られるため、火山灰降下後に畝を作り直そうとした可能性がある。なお、当該時期の遺物は、調査の表土掘削時においてほとんど出土していない。

### 註

- (1) 本文中の各遺構の報告番号は、1次・2次調査から連続した番号となっている。なお、1～8号土坑、1～31号竪穴建物跡については、1次・2次調査の発掘調査報告書（宮崎県埋蔵文化財センター2012）の中で報告を行っている。ただし、遺物等の注記は整理作業時の変更による誤記と混乱を避けるため、付表2のように調査時の略号をそのまま使用している。
- (2) 土師器の編年については、主に中村1987および中村2002文献を参考とした。
- (3) 鹿児島県曾於市末吉町所在の関川遺跡においても、同様に鉄錆が付着した縄文時代晩期の石器（図版17-312）が出土している（鹿児島県立埋蔵文化財センター2008）。
- (4) 担当者の不注意で貼床および掘形底面に関する図面を取り忘れたため、貼床の範囲については図示できなかった。なお、図は床面検出段階を示す。

### 引用・参考文献

- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008『関川遺跡 鳥居川遺跡 チシャノ木遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（125）
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997『白井遺跡群-古墳時代編-（白井二位塚遺跡・白井南中道遺跡・白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡）』建設省・群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 中村直子 1987『成川式土器再考』『龐大考古』第6号 鹿児島大学法文学部考古学研究室、57-76頁
- 中村直子 2002『薩摩・大隅』『第5回九州前方後円墳研究会 古墳時代中・後期の土師器-その編年と地域性- 発表要旨集』九州前方後円墳研究会、175-200頁
- 東 和幸 2002『波板状凹凸面に関する第三の見解』『犬飼徹夫先生古稀記念論集 四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古稀記念論文集刊行会
- 東 和幸 2003『波板状凹凸面牛馬歩行痕説再論』『研究紀要 縄文の杜から』創刊号 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 郡城市教育委員会 2002『横市地区遺跡群』郡城市文化財調査報告書第58集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2005『湯牟田遺跡（一次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第107集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011『働女木遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第205集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012『平峰遺跡（1次・2次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第211集

### 第3章 出土遺物

#### 第1節 縄文・弥生時代の遺物

##### (1) 土器

縄文土器および弥生土器は、小片および細片が包含層から出土しており、遺構に伴うものは11号土坑出土の縄文土器深鉢(1)のみである。12号土坑の検出面から弥生土器が出土しているが、遺構に伴う物ではないと考えられる。

1は縄文時代晩期の黒川式と考えられる土器で、11号土坑出土である。土坑内から細片となって出土し、胴部の下部を欠くものの、全形をうかがうことができる。形態的には胴部の上半で内側へ屈曲した後、口縁部が外側へ向かって直線的に開いている。調整は、口縁部から胴部は内外面ともに粗い条痕を残すが、底部付近はナデが中心である。このほか、同じ縄文時代晩期黒川式と考えられるような口縁部のリボン状突起や黒色磨研の浅鉢と考えられるような小片がみられる。1次・2次調査で確認された資料も同様の資料が多いため、縄文土器の多くは縄文時代晩期に属すると考えられる。

一方、弥生土器の多くは、図示していないが、口縁部に断面三角形あるいは台形状の突帯を水平に貼り付けた、逆「L」字状の口縁をもつ甕が中心であるが、口縁が下方へさがるものや、逆に口縁が上方へあがるものがわずかに存在する。また、胴部片では突帯を数条貼り付けたものがみられる。これらの土器は弥生時代中期中頃を中心とした時期のものであると考えられる。隣接する働女木遺跡(宮崎県埋蔵文化財センター2011)では、口縁部は「く」字状に上方へあがるものが多い

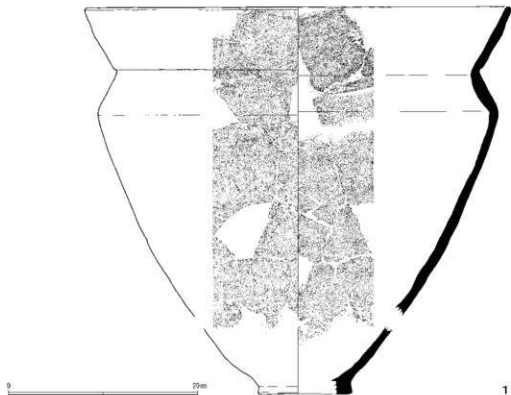


図43 縄文土器実測図 (S=1/4)



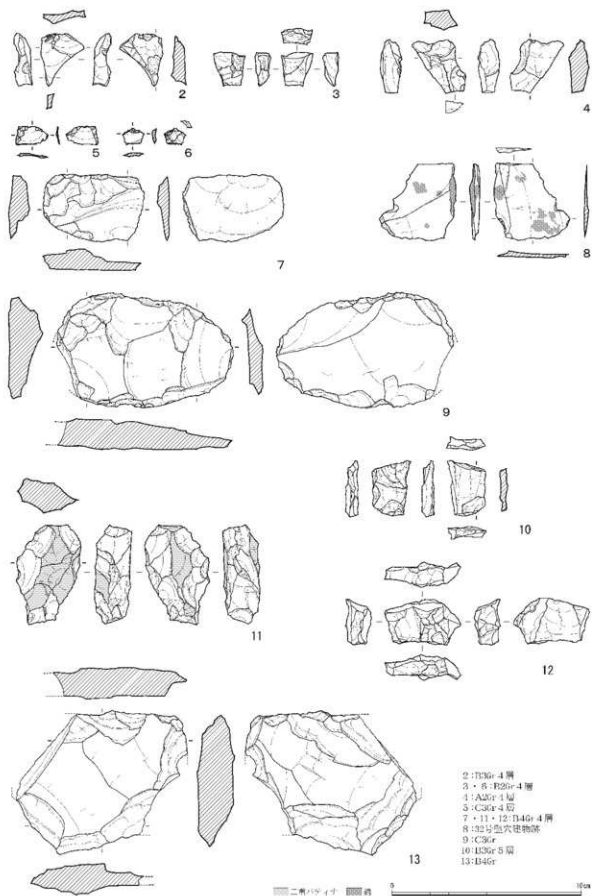


図44 縄文・弥生時代石器実測図1 (S=1/2)

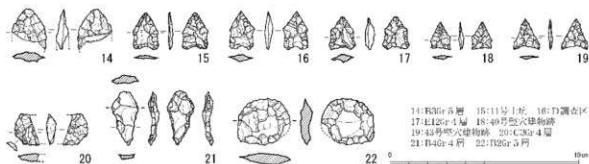


図45 縄文・弥生時代石器実測図2 (S=1/2)

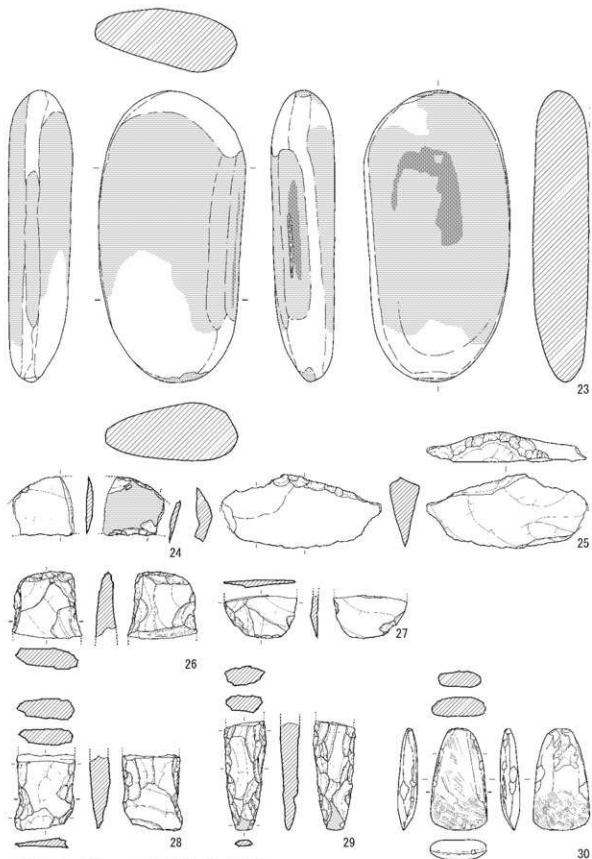
ため、平峰遺跡出土資料はその前段階に位置づけることができる。このような弥生時代中期の土器のほか、弥生時代後期後半～古墳時代の初め頃の土器と考えられる甕と壺（図版36～360・図版37～372）が出土している。これらはE調査区の北側で、割った甕の上に壺を載せた状態で出土している（図版13～7・8）。甕は、胴部の上方が広く、口縁部はゆるく「く」字状に湾曲している。口縁部は胴部に比べて若干薄くなり、底部はやや凹んでいる。壺は扁平球状で、算盤状に胴部が張る。底部は尖底に近いがわずかに平坦部をもつ。長頸壺の可能性はあるが、口縁部は欠失しており、不明である。頸部付近も大半が欠失するが、推定される頸部の径は3～4cmと小さい。

## (2) 石器 (図44～図46)

D調査区の包含層を中心として石器が出土しており、図示した遺物の多くが包含層出土である。少数ながら竪穴建物跡から出土しているものもあるが、これらは包含層からの流れ込みであると考えられる。この中でわずかに15のみが遺構に伴っている可能性が高く、1の縄文土器とともに11号土坑から出土している。

2～13は剥片・石核類と考えられる石器で、2が玉髓製、3～5・10・12がチャート製、6が黒曜石製、7・9・13が頁岩源ホルンフェルス製、8が頁岩製、11が流紋岩製である。8は32号竪穴建物跡から出土しており表面に鉄錆が付着しているため、鍛冶に関連して鉄分が付着した可能性を考えたが、前章でも述べたように鍛冶とは関係のない遺跡でも類例があるため、土中環境により鉄分が析出して錆びたものであると考えられる。また、1次調査時に34号竪穴建物跡から出土した、頁岩と思われる13に類似した板状の石器が出土しているが、この表面にも鉄錆が付着している。7・9は図46でみられるような同じ頁岩源ホルンフェルス製品の素材剥片と考えられる。9や13などは、比較的製品に近い大きさなので、7も含めて、13のような方形板状の素材として流通していたのかもしれない。

14～22は石鏃を中心とした小型の石器類である。石器はD調査区出土が多い中、16を除くと石鏃はE調査区から出土しており、他の石器とは出土する区域が異なっている。石材は15・20が黒曜石製である以外はすべてチャート製である。14は大型の石鏃の破片の可能性もあるが、大きさだけでなく、調整剥離の様子が他の石鏃とは異なるため、有茎尖頭器などの破片である可能性もある。15～18は平面形が五角形に近い凹基式の石鏃で、19のみが三角形と形態が異なる。20～22は器種が明らかでないが、21は石鏃の失敗品の可能性がある。21は図下方に向かって幅が狭くなるように調整剥離が行われており、石鏃などの可能性が考えられる。22は平面形が円形になるように加工され



■ 打痕面・磨面    ■ 打痕面・磨面    ■ 打痕面・磨面    ■ 打痕面・磨面  
 23: F46r-4層    24: 29:C46r-4層    25: F26r-4層    26: F46r-5層    27: F26r-4層    28: F126r  
 30: 土浦市北側

図46 縄文・弥生時代石器実測図3 (S=1/3)

ており、周縁は薄く刃部状に仕上げられている。

23～30はそのほかの製品と考えられる石器である。23は磨・敲・台石、24は石鎌、25はスクレイパーあるいは石応丁素材の可能性のある横長の剥片、26～28は打製石斧、29は打製石鑿、30は磨製石斧と考えられる石器である。23が砂岩製、25が輝石安山岩製、30がホルンフェルス製であるほかは、すべて頁岩源ホルンフェルス製である。23は、磨面のほか、端部や上下両面に敲打痕が認められるため、磨石、敲石、台石など様々な用途に使用されている。また、使用が顕著な側面部にはコーングロス状の光沢が認められる。なお、23は古墳時代の可能性もあるが、D調査区からの出土であることと、ほかの古墳時代石器でみられる鍛冶にともなうと考えられる被熱の痕跡がみられないことから、縄文・弥生時代の石器として扱った。24は鎌状に先端が細くなる形態であるが、図正面は全体が剥離している。25は横長剥片状の剥片であるが、自然面を残し、上面の剥離以外顕著な加工はみられない。26は打製石斧の基部側、27・28は刃部側の破片と考えられる。28は撥状に刃部が開く。29は先端付近には研磨によると思われる平滑な部分が認められるが、研磨面は周辺の剥離よりも古い。何らかの石器の転用品であろうか。30は刃部が開く形状で、片刃状に刃部がやや偏っており、加工斧と考えられる。

### (3) 鉄器

弥生時代の鉄器は、12号土坑の検出面出土土器の下位から出土した鉄鏃(301) 1点のみである。図示した遺物以外にも包含層から出土した鉄器はあるが、弥生時代のものかは明らかでない。多くは古墳時代のものであると考えられる。

301は、錆化とそれにとまなう錆彫れが進むが、平面三角形の凹基式の鉄鏃と考えられる。鋒付近が欠損しているが、欠損は調査時のものではなく、遺棄時点で既に失われていたものである。欠損部は、割れた破面の状態ではなく、製品状に丸みを帯びており、熱間加工において切断された可能性がある。また、図の上辺中央付近はわずかに半円状に凹んでおり、穿孔が施されていたことを示している。伴出した土器から、中期中頃のものと考えられる。

## 第2節 古墳時代の遺物

### (1) 土師器(図47～図62)

土師器は今回の調査の主要な遺物であり、堅穴建物跡埋土を中心として多量の土器が出土している。器種としては壺、甕、鉢、高杯の各器種がみられるほか、須恵器坏蓋を模倣した模倣坏蓋が2点出土している。なお、碗や坏は鉢との分類が曖昧であるため、本報告では鉢として扱い、その中で器形による細分を行っている。また、ほとんどの土師器は胎土中に雲母を含まない点で共通している。

#### 壺(図47～図49)

1～38は二重口縁壺の口縁部片と考えられるもので、頸部が直立気味のもの(31・32・35)と、頸部が直線的あるいは緩やかに外反するもの(33・36～38)がある。この中には、32のように前期まで遡る可能性があるものを含む。両方の形態において、頸部に刻目突帯をもつものがみられる。なお、38は二重口縁壺としては、口縁部の作りがあいまいである。大きさとみると、31～

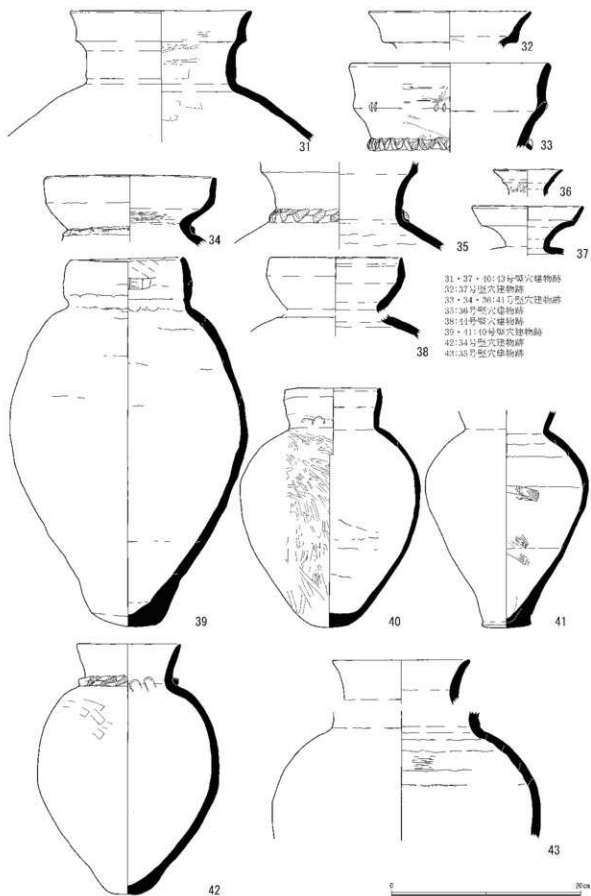
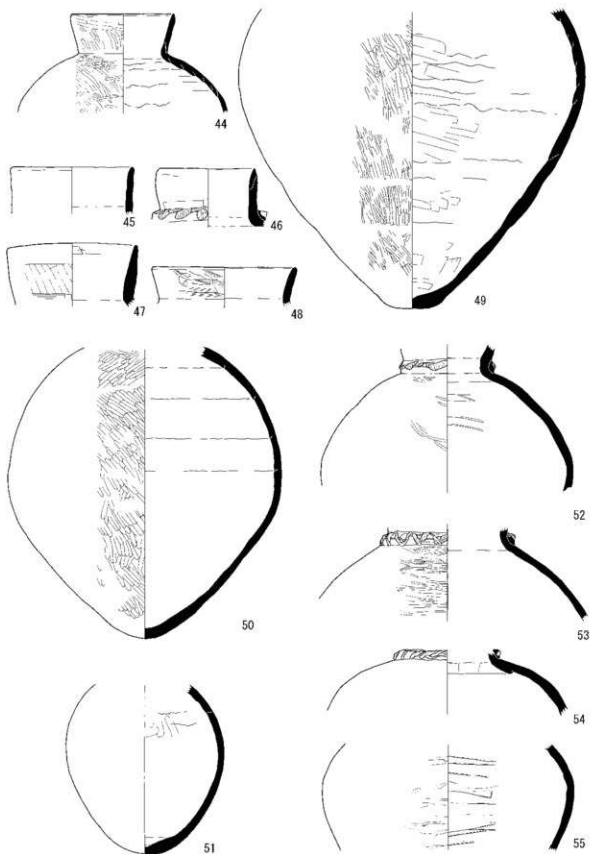


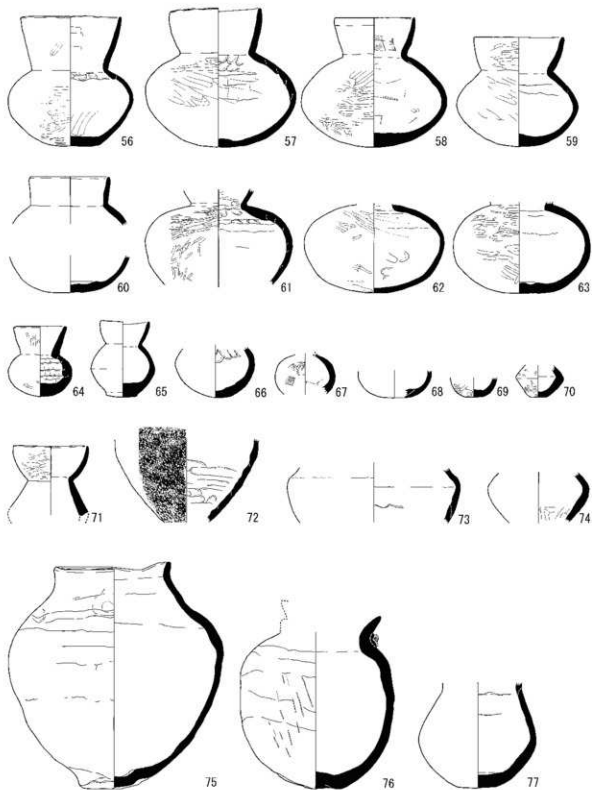
图47 土師器実測図1 壺1 (S=1/4)



44·49·51:43号型穴建物跡 45·48·50:36号型穴建物跡  
46·47·52·54:29号型穴建物跡 53·55:35号型穴建物跡

0 20cm

图48 土器实测图2 壺2 (S=1/4)



56・73:25号罌穴建物跡 57・66:34号罌穴建物跡 58・63:39号罌穴建物跡 59・65:32号罌穴建物跡 60・75:42号罌穴建物跡  
 61・61・69:36号罌穴建物跡 62:37号罌穴建物跡 67・72・71:13号罌穴建物跡 68:41号罌穴建物跡 70:16号罌穴建物跡  
 71:44号罌穴建物跡 76・77:40号罌穴建物跡

図49 土師器実測図3 壺3 (S=1/4)

35・39を大型、36・37を小型に分けることができる。ただし、36はミニチュア、37は壺の可能性がある。土師質の壺は、包含層から別個体の胴部（図版36-359）が出土している。この包含層出土壺の胴部穿孔は内側が広く、外側から穿孔したような突出した痕跡が内面にはみられない。穿孔部は中程で屈曲しており、内面側には工具痕と思われる明瞭な段がみられる。内側あるいは両側からあけられている可能性がある。33は頸部の突帯のほかに、口縁屈曲部に2点1組の刻みを巡らせている。二重口縁壺は、いずれも口縁部の破片で胴部の形状がわかるものはほとんどないが、31は球胴状になる可能性がある。

39～48は大型の直口壺で、39と40がやや内湾する以外は、直線的、あるいは外反気味に伸びている。二重口縁壺と同様に頸部に刻目突帯をもつものもたないものが混在している。39は頸部を連続した指オサエにより凹ませており、突帯を貼り付ける意図があった可能性がある。胴部が残存しているものでは、その多くが倒卵状をなしており、41を除くと、胴部と底部の明瞭な境界はあいまいである。また、頸部以下の内面に粘土紐の接合痕跡を残すものがみられるが、次に述べる胴部片も合わせて、胴部下半まで接合痕跡がみられるものは少ない。

49～55は壺の胴部片で、50を除くと大型品である。これらの口縁部形状は不明であるが、調整や倒卵形に近い形状から、49・50が直口壺、52～53は二重口縁壺の可能性が考えられる。なお、49は胴部内面の中央1段分の粘土表面がやや赤みを帯びている（巻頭図版5-3）。粘土が重なった接合部の観察からその部分のみ異なる色調の粘土を使用している可能性が高いが、粘土内面の色調は他の部分と大きくは変わらない。51はやや小型の壺胴部であるが、胎土に雲母を含むほか、色調や器厚など多くの点でほかの土器とは異なり、一見弥生土器を思わせる質感である。

56～70は小型の直口壺で、64～70はミニチュアの可能性のあるものを含んでいる。口縁部が残存するものでは、60以外はいずれも頸部からやや内湾しながら口縁端にいたる。胴部は幅に対して高さが低く扁平球状を呈しているが、より小型のものでは算盤玉状に胴部中程で屈曲するものがみられる。大型の直口壺でみられたのと同様に、胴部外面はヘラミガキを施すなどして平滑にしているが、胴部内面には粘土紐の接合痕跡を残すため、段を有するとともに、頸部付近に指オサエによる明瞭な指頭圧痕を残すものが多い。また、頸部付近に接合痕跡を残すものは多いが、胴部下半に接合痕跡がみられない点は、大型品と同様である。71は精製された小型の壺で、赤色顔料が塗布されている。胴部下半は欠損しているが、上半～口縁部にかけてはほぼ完存状態で出土している。欠損部は破面ではなく、擬口縁状の粘土接合面であるため、接合面で剝離したものと考えられる。44号竪穴建物跡の埋土から同一個体と思われるその他の破片がみられないため、意図的に分離させた可能性が考えられる。また、調査で出土した土器の中にも接合するような資料をみつけることはできなかった。内外面には鉄錆状の微細な橙褐色の粒子が付着している。

72～77はその他の形状をした、壺と考えられる土器である。72・73は壺の胴部と考えられる破片であるが、胴部下半に粘土紐の接合痕跡を残すものであり、これまで見てきた壺の胴部の上下をほぼ逆転させたような作りとなっている。また、72は外面に長さ2mm、幅1mm程度の細かな刺突、あるいは穀物の圧痕状の凹凸がみられる特異な土器である。これらの細かな凹凸は一定の方向性をもっており、それによりいくつかの単位に分けることが可能である。74は底部内面にしぼり痕跡の縦方向の線がみられる。75・76は粗い作りの壺で、器表面に凹凸がみられるほか、全体的に重なり



状をなしている。壺の中では外面に粘土の接合痕跡を明瞭に残す点でも他のものとは区別される。

#### 甕 (図50～図55)

甕は、底部から口縁部に向かって直線的に開くものや緩やかに湾曲するものが中心である。途中でくびれて、肩部や頸部を形成するものは少数である。これらの甕は底部まで残るものは平底が多く、脚台がつくものは少ない。図化していない底部のみの破片においても、平底が多い。

78～111は、底部から口縁部にかけて直線的で、肩部や頸部を持たない形態の甕である。95・98のような小型のものを除くと、口縁部下に1条の突帯を貼り付けている。この突帯上には刻みを施しているが、刻み部分に布目痕を残すものが多く、少数ながら板状工具の小口痕と思われる条線が残るものもある。また、内面はナデによって平滑になされているものの、外面は粘土紐の接合痕跡を明瞭に残すものが多い。とくに突帯よりも上の部分で顕著であり、突帯よりも下では突帯に近い部分の数条を残し、それ以下は粗いナデにより接合痕跡を消している。

78～98は胴部中程から口縁にかけて直線的な形態のもので、やや外側へ開くものから上方へまっすぐにのびる一群である。78～89が大型品、90～98が小型品である。これらの中には78のように底部から口縁部まで直線的なもの、80～82のように胴部下半で緩やかに湾曲した後、口縁部まで直線的にのびるものが存在する。それ以外の突帯や突帯上の刻目、口縁端部の形状、粘土紐の接合痕跡の様子は、各個体差がみられる。85・95・97には吹きこぼれと考えられる、煤が薄くなった、あるいは消失した部分が観察される。また、80は胴部内面下半の1/3程の範囲に、縦方向の暗文状のヘラミガキがみられる。

99～103は、上で述べた形態に近いものであるが、口縁部がやや内湾する一群である。

104～109は突帯～口縁部にかけて部分が内湾するものである。強く屈曲してキャリバー状に内湾するものは突帯部を境にして傾きが変化しているものが目立つ。

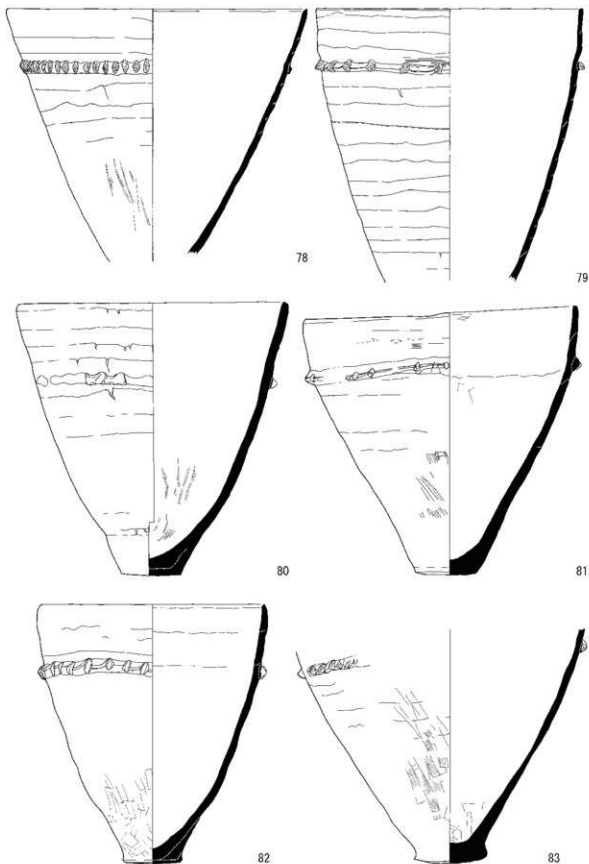
110・111は、胴部から口縁部にかけて全体が緩やかに湾曲するものである。

中村直子氏の研究(中村1987)を参考にすれば、直線状に開くものから全体が緩やかに湾曲して口縁部に至るものへと型式変化していることを予想させるが、出土状況を見ると、各形態が混在している状況である。各個体の差異も大きく、形態における型式学的な概念とは異なる原理が働いているのかもしれない。

112～118は、胴部と口縁部との境でくびれて、明らかな頸部を有する甕で、119のみ小型である。胴部は、下半を欠失するものが多いが、112が倒卵形であるほかは、やや縦につぶれた球状を呈する。口縁部の形態は、112が直線的、113がわずかに内湾しているが、そのほかはやや外反して口縁端部へといたる。これまでみてきたものと同様に、くびれ部に刻目突帯をもつものもたないものが存在する。突帯を有するものは頸部の屈曲は緩やかである。この中で、114は器壁が薄手で、他のものとは全体的に雰囲気異なる。

119はバケツ状の形態を呈するもので、突帯貼り付け部でゆるやかに屈曲して、口縁部が外側へ広がっている。全体的に歪みがみられ、外面には粘土紐の接合痕跡が観察される。鉢としてもよい形態であるが、今回の調査では、突帯をもつ鉢はみられないことと、外面に煤が付着していることから、甕に分類している。

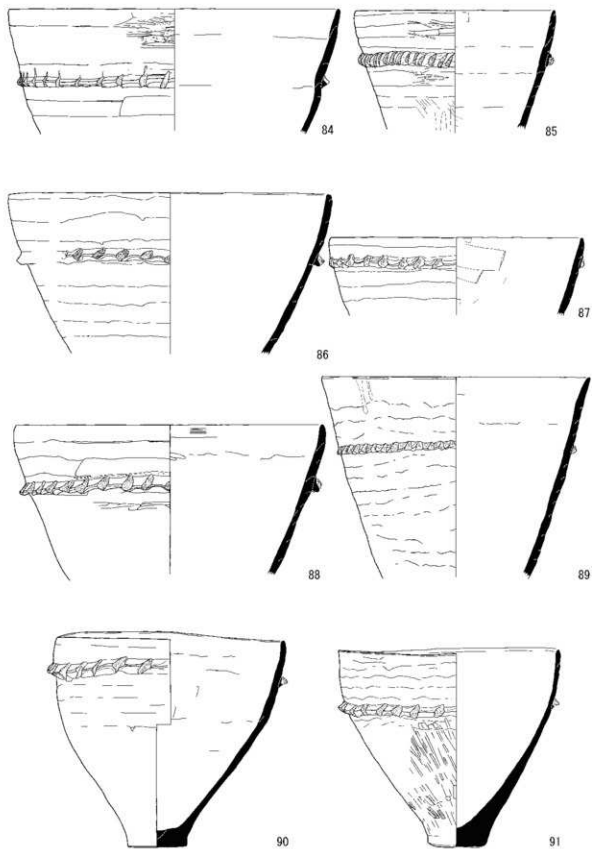
#### 甗 (図55)



78:41号型穴埴物跡 79:42号型穴埴物跡 80:40号型穴埴物跡 81:39号型穴埴物跡  
82:36号型穴埴物跡 83:33号型穴埴物跡

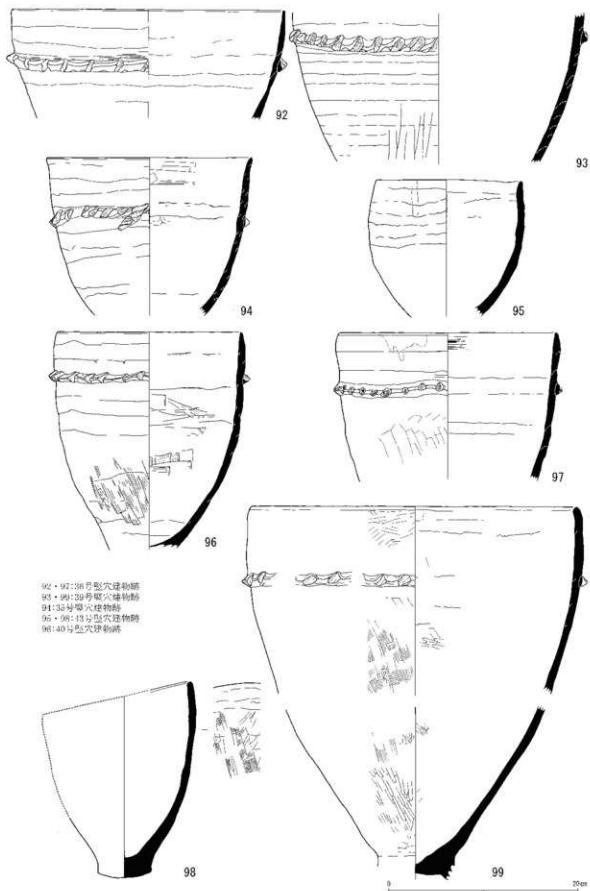
0 20mm

图50 土器实测图4 甕1 (S=1/4)



84:35号罐穴建物跡    85:36号罐穴建物跡    86:34号罐穴建物跡  
 87:37号型穴建物跡    88:39号型穴建物跡    89:44号型穴建物跡  
 90:40号型穴建物跡    91:43号型穴建物跡

图51 土師器実測图5 甕2 (S=1/4)



92・93:38号穴建物跡  
 93・94:39号塚火埴物跡  
 94:35号塚火埴物跡  
 95・96:13号穴建物跡  
 96:40号穴建物跡

図52 土師器実測図6 甕3 (S=1/4)

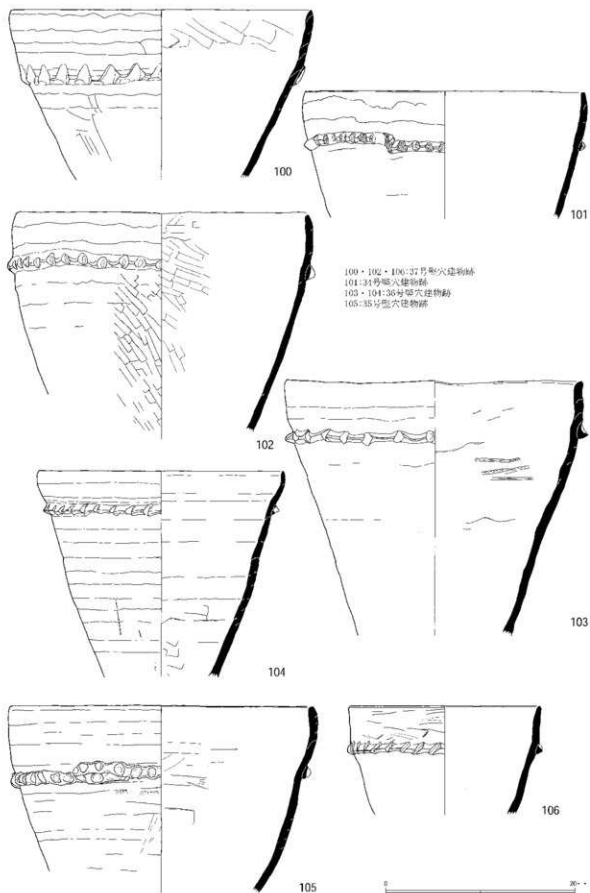


图53 土師器実測图7 甕4 (S=1/4)

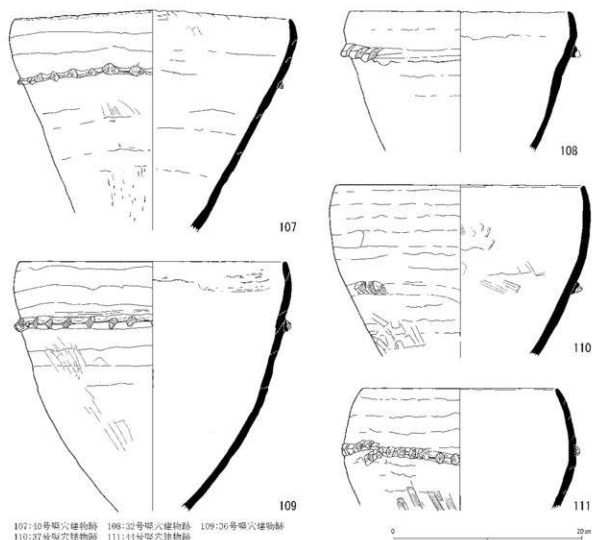
120は、ミニチュアの瓶把手の可能性のある土器あるいは土製品である。ただし、実用・ミニチュアを問わず、調査では瓶に該当するものは確認していない。120は他の竪穴建物跡とは異なる土器が多い43号竪穴建物跡から出土しているため、その可能性を指摘するにとどめておく。

#### 壺・甕の底部 (図56)

121～125は壺あるいは甕の底部である。121～123が平底、124が脚台をもつ底部である。121・123は壺、122・124は甕の底部であると思われる。125は、ほかではみられない特異な形態で、底部の外縁に三角形の低い高台状の突起を貼りつけている。底部の中心側は欠失しているため、明らかでない。管見では類例をみつけることができず、器種・および上下の部位も明らかでないが、図の内面下部にコゲ状の付着物がみられるため、甕などの煮炊き具の一種であると考えられる。形状だけでなく、胎土も精選されており、他の土師器とは異なる。

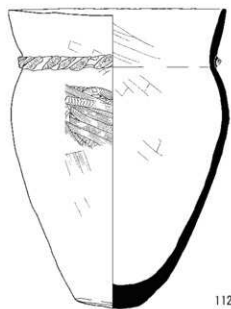
#### 鉢・坏 (図57・図58)

本報告で扱う鉢には、幅広い形態を含んでいる。これは、通有碗や坏に分類されるものが、形態や調整などの製作技法において明確な区分を行うことが難しいことによる。坏としたものは、鉢とは作りが明らかに異なり、須恵器坏蓋を模倣したと考えられるものである。

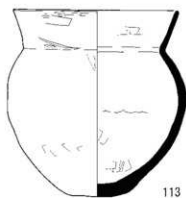


107:10号竪穴建物跡 108:32号竪穴建物跡 109:36号竪穴建物跡  
110:37号竪穴建物跡 111:44号竪穴建物跡

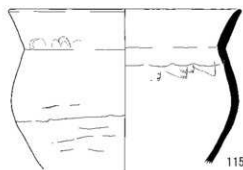
図54 土師器実測図8 甕5 (S=1/4)



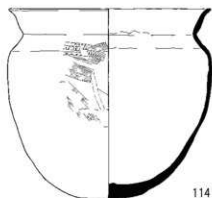
112



113



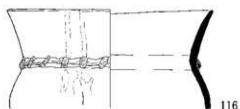
115



114



117



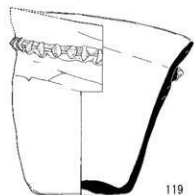
116



118



120



119

112・38号型穴埴物鉢

113・117・39号型穴埴物鉢

114・120・43号型穴埴物鉢

115・119・40号型穴埴物鉢

116・118・41号型穴埴物鉢

0 20cm

図55 土師器実測図9 甕6 (S=1/4)

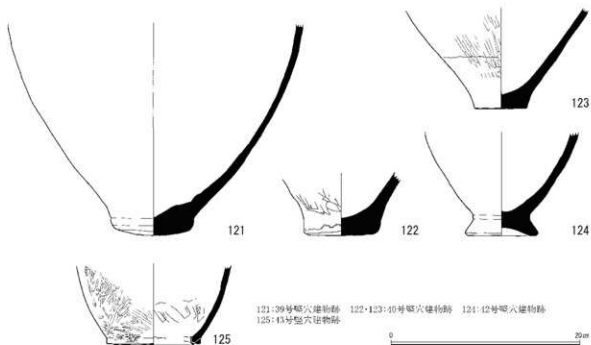


図56 土師器実測図10 壺・甕底部 (S=1/4)

126～130は胴部上半から口縁部にかけて弧状に外反する形態をもつ一群である。大型品（126～128）と小型品（129・130）がある。127は外面にコゲと煤が付着しているため、煮炊き具として用いられた可能性がある。

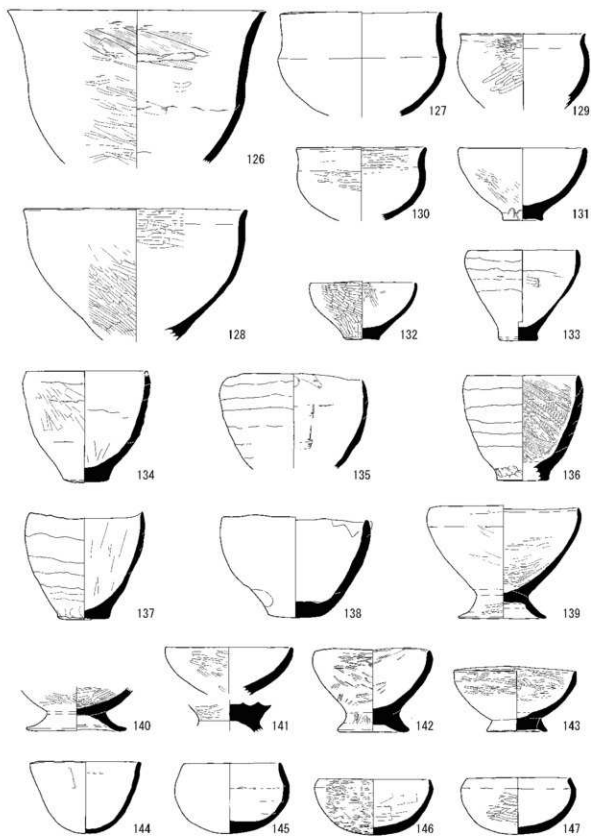
131～138は明瞭な底部を形成する一群であるが、浅い131・132以外は粘土紐の接合痕跡がみられたり、歪むなど粗製のものが多い。その他の鉢がヘラミガキを多用するのに対して、これらはミガキがみられない点でも区別される。

139～143は脚台を有する一群である。脚台の高さに個体差がみられるが、断面が「ハ」字状を呈する点で共通している。139は口縁部外面のミガキを一部ナデ消している。

144～172は半球状に近い形状を呈する一群で、鉢の中ではもっとも数が多い。また、遺存状況では、細片のものもあるが、完形や半分に割れた状態で出土しているものが目立つ。144・145はやや深めで、129や130に近い形状をなす。148～172は浅い椀状の形態であるが、口縁部付近の形状によって、屈曲して内湾するもの（146～151）、内湾せず上方へのびるもの（152～157・160～164）、体部からそのまま外側へ開くもの（158・165～171）に分けることができる。調整は多くが内外面にヘラミガキを施すが、153は内面のミガキが放射状に広がっている。また、高坏と同様に、ミガキをナデ消すもの（152・153・157・164）があり、これらは口唇部外面の一部をナデ消しているが、153は内面もナデ消している。このほか、この一群では、内面や外面が二次被熱により変色したもの（147・156・166・163～165・170）がみられる。

173～175はコップ状の形態をなす一群である。平底の底部から、口縁部まで直線的にのびる。173・174は1次・2次調査の範囲ではみられない器形で、3次調査でも42号・44号堅穴建物跡から出土しているなど、出土遺構に偏りがみられる。174は、口縁部の2カ所に、赤色顔料塗布後の補修痕跡がみられる。このほか、45号堅穴建物跡からも、厚く作りが粗雑であるが、コップ形の鉢が出土している。

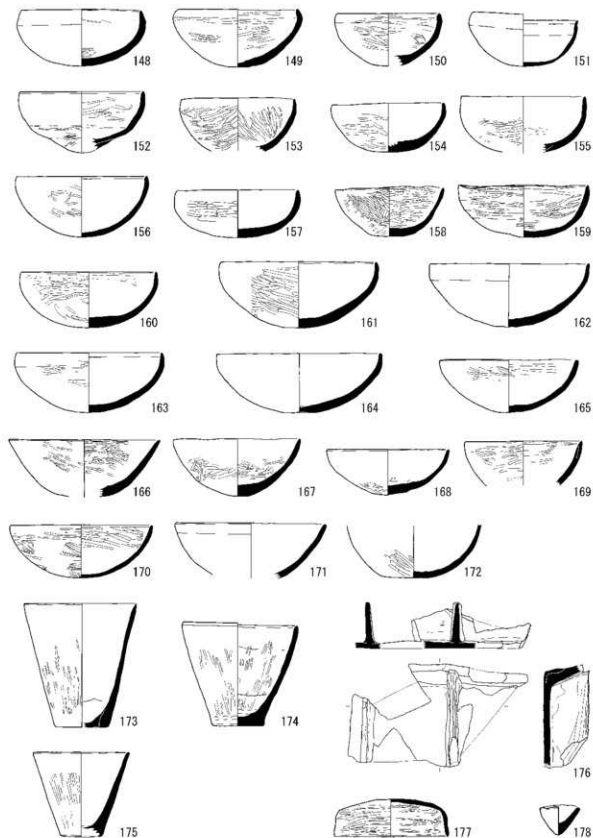




126·130·41号器穴建物跡 127·129·142·143·40号器穴建物跡 128·135·126·39号器穴建物跡 131·43号器穴建物跡  
 132·133·141·144·145·36号器穴建物跡 134·44号器穴建物跡 137·34号器穴建物跡 138~140·42号器穴建物跡  
 146·35号器穴建物跡 147·38号器穴建物跡

0 20cm

图57 土師器実測图11 鉢1 (S=1/4)



148·149·162·166·80号型穴建物跡 149·16号型穴建物跡 150·160·107~170·176~178:36号型穴建物跡  
 151·156:11号型穴建物跡 152·158·172:37号型穴建物跡 153·161·163·171:39号型穴建物跡 154:32号型穴建物跡  
 155·165:43号型穴建物跡 167:38号型穴建物跡 164·173·174:42号型穴建物跡 173:44号型穴建物跡

0

20mm

图58 土師器実測图12 鉢2·模倣环 (S=1/4)

176は、1次・2次調査でも出土している仕切付角鉢である。箱状の体部をもち、内面には仕切りが2つ貼り付けられている。体部はやや外に開くように上方へのび、底部側が厚くなっている。仕切りと周囲の箱状の部分との接合面は擬口縁状を呈しているため、箱状の鉢を作った後に仕切りを取り付けていることがわかる。胎土は精製されており、含まれる砂礫は少ないが、調査で出土している他の土師器でもみられる軟質赤色粒子がわずかであるが認められるため、在地の土で作られている可能性がある。図示した以外にも小片が出土しており、1次・2次調査出土例を含めると、少なくとも3個体以上は出土している。1次調査の16号竪穴建物跡出土の個体は体部の底部側が厚く、やや外側に傾斜している形状や仕切りが2つある点が類似している。一方、同じく1次・2次調査の21号竪穴建物跡から出土している資料は、底部から上方へのびる体部が薄くやや湾曲しており、仕切りが1つのみである点で作りが異なっている。

177は、須臾器環蓋を模倣したと考えられる土器である。天井部外面はケズリを施し、あまり丸みを帯びない。肩部は丸みをおび、口縁部は外側へわずかに開く。

178は鉢のミニチュアと考えられる土器である。同様な形状のものが他にも出土している。

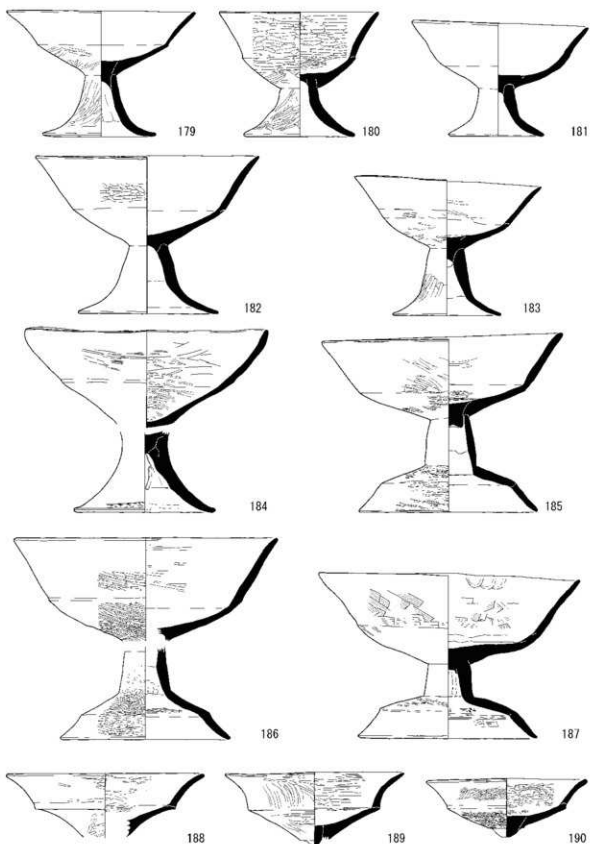
#### 高坏 (図59～図62)

3次調査で最も個体数が多く出土している器種で、図示できなかった破片も多い。坏部、脚部ともに多いが、両者が接合できた個体は少なく、また、脚部の方が多く出土している。

179～187は、全形をうかがうことができる資料である。脚部の形態により、脚柱から裾部まで緩やかに湾曲しながら開くもの(179～184)と、脚柱部と裾部の境が明瞭で、坏部を反転したような形状の裾部を有するもの(185～187)に分けることができる。坏部の形態は底部と口縁部の境が稜を持ち明確に区別されるものから曖昧なものまで幅広いが、脚部形態との対応関係はみられない。調整においてもほとんどのものが脚部内面以外はヘラミガキ、脚部内面は粗いナデで共通している。この中で、187は坏部内面と脚部の裾内面のいずれにも明瞭なハケメが確認され、脚柱が著しく短い点と合わせて特徴的である。このほか、坏底部の充填部脚側の形状は多くが坏側に凹んでいる。これは坏部片の充填部が半球状に突出しているものがみられる状況とは対照的である。なお、185の脚柱内の充填部には爪痕と考えられる半月形の痕跡が、充填部の面を一周するような形で残っている(図76-7)

188～227は坏部、228～259は脚部の破片である。

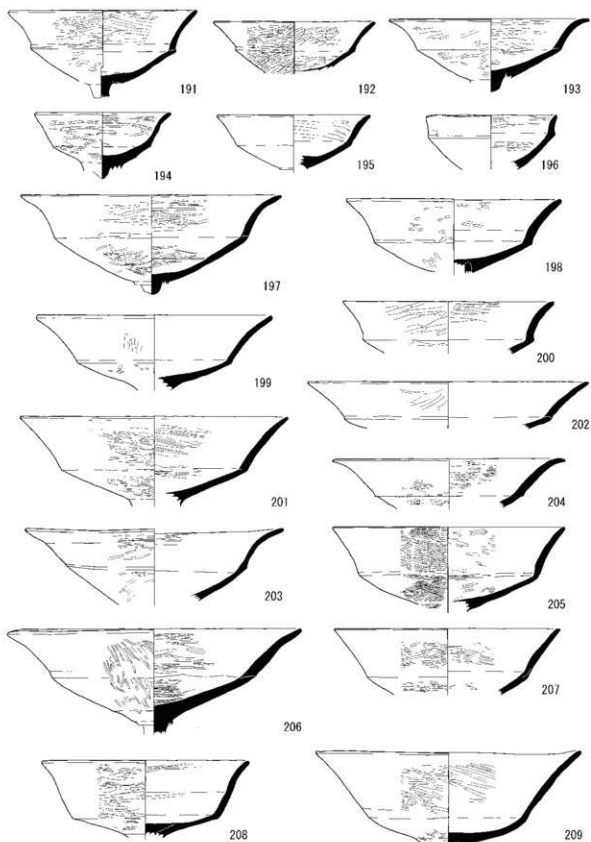
188～210は底部と口縁部の境に稜あるいは段を持ち、両者の区別が明瞭な一群である。188・189の底部がやや外反して口縁部に接続するほかは、いずれも内湾して口縁部へと接続している。また、口縁部と底部の境に段状の屈曲をもつもの(190・191・192)がある。坏部を作る際、底部を作ってしばらく乾燥させた後に口縁部を作るためか、接合面が擬口縁状を呈するものが多く、また、接合痕跡が確認できるものもある。また、この事は、189のように底部内面から底部外面の上部まで赤色顔料を塗布しており、接合面にも顔料の塗布を観察できることから確認することができる。なお、196は形態的に鉢に類似する個体で、底部に対して口縁部が著しく短くなっている。これらの坏部と脚部との関係では、脚部との接合面が擬口縁状を呈するものがあるため、脚部がある程度乾燥した段階で坏部を乗せていることをうかがうことができる。また、図示したものでは坏底部の粘土充填部形状は、半球状に突出したものが多い。



179・190・37号祭穴埴物跡 180・181・186・36号祭穴埴物跡 182・38号祭穴埴物跡 183・185・41号祭穴埴物跡  
 184・44号祭穴埴物跡 187・32号祭穴埴物跡 188・40号祭穴埴物跡 189・42号祭穴埴物跡

0 20cm

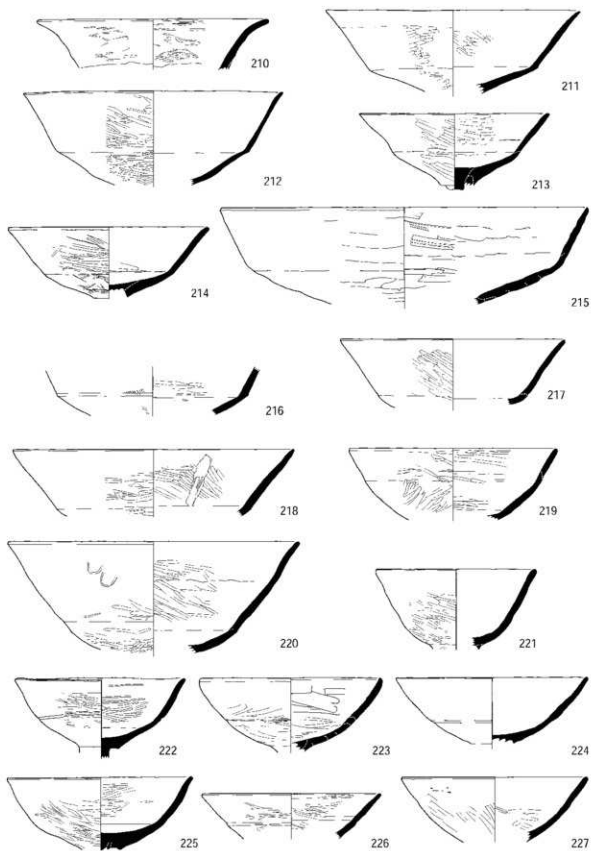
図59 土師器実測図13 高环1 (S=1/4)



191・203: 42号塚穴建物跡 192・195~197・199: 36号塚穴建物跡 193・200・201: 31号塚穴建物跡 194・206・208: 20号塚穴建物跡  
 198・202: 35号塚穴建物跡 204・207: 43号塚穴建物跡 205: 38号塚穴建物跡 209: 41号塚穴建物跡

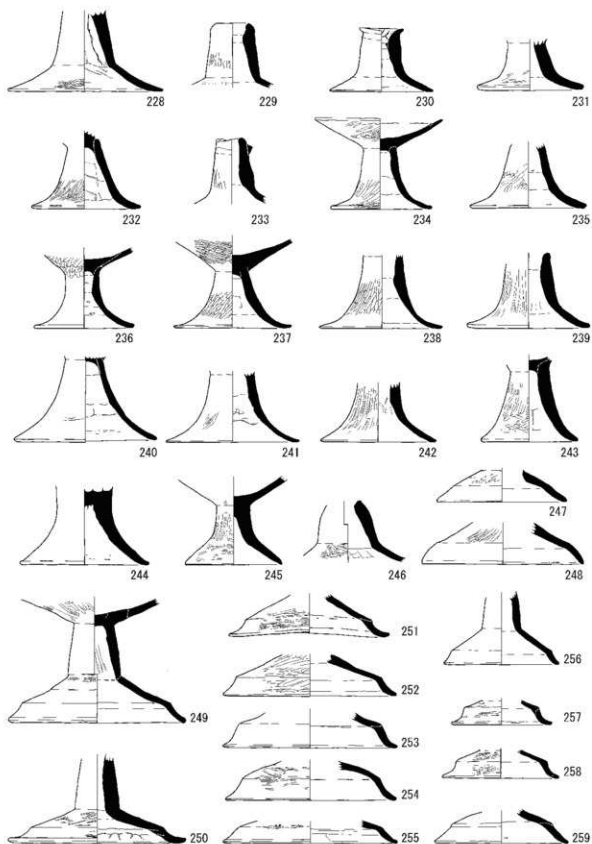
0 20cm

图60 土師器実測图14 高坏2 (S=1/4)



210·216·226:37号型穴建物跡 211·217~219·223:36号型穴建物跡 212:38号型穴建物跡 213:35号型穴建物跡  
 214:39号型穴建物跡 215:40号型穴建物跡 220·225:32号型穴建物跡 221·222·227:43号型穴建物跡 224:41号型穴建物跡

图61 土器器实测图15 高环3 (S=1/4)



228・230・235・249・39号感穴建物跡 229・244・246・258・43号感穴建物跡 231・238・242・247・248・34号感穴建物跡  
 232・236・253・255・257・37号感穴建物跡 233・211・213・232・256・36号感穴建物跡 234・250・251・12号感穴建物跡  
 237・35号感穴建物跡 239・251・32号感穴建物跡 240・11号感穴建物跡 259・38号感穴建物跡

30cm

图62 土師器実測图16 高环4 (S=1/4)

211～216は底部と口縁部の境が稜または屈曲部で区別され、口縁部の外反が弱いあるいは直線的である一群ある。215は、粘土紐の接合痕跡が残っており、全体的な作りも粗雑あり、他の高坏とは著しく様子が異なる。坏底部の粘土充填部形状がわかるものは213のみであるが、これは凹んでいる。

217～221は底部と口縁部の境が不明瞭であるが底部と口縁部の区別が可能で一群である。219の口縁部付近がやや幅広く凹むなど、これまでみてきた形態と、次に述べる形態の過渡的様相を呈する。なお、218は破損部の上から粘土を貼り付けて修復を行っている。

222～227は底部から口縁部が緩やかに湾曲し区別がない一群である。この一群では、横方向のヘラミガキを強く施す事によって、沈線状や沈線よりも幅の広い凹みをつけて底部と口縁部の境を表現するものがある。もっとも簡略化した作り方ということができる。

228～244は脚柱から裾まで緩やかに外反する一群である。坏部と裾部の境が屈曲するもの(228・229)から裾部があまり外反しないもの(243・244)までバリエーションが認められる。調整は外面が基本的に縦方向のヘラミガキで共通している。なお、229と233は羽口に転用したものである。熱により溶融・変形している。このほかにも被熱したのものがある。234は破片の一部が被熱しており、破片となった後に熱を受けている。235は全体が弱く被熱して淡く変色している。238は先端付近のみ被熱しており、大分県萩鶴遺跡(日田市教育委員会1995)でみられるような入れ子状にして羽口として使用された可能性がある。以上の脚部は、脚柱の充填部が残っている分については、ほとんどが凹んでおり、半球状に突出したものはみられない。

246～248は少数のみ確認できた形態である。245は裾部が外反せずに若干内湾気味になっている。247・248は次にのべる形態に近いが、裾端部は外反せずに真直ぐから内湾気味となっている。246は脚柱と裾の境が明瞭であるが、脚柱部が上部に向かってすばまっているものである。また、裾部の内面は板状工具によるナデがみとめられるが、細かく動かしているため、簾状文状を呈している。

249～259は脚柱部と裾部の境が明瞭で、裾部端付近で再び屈曲・外反して端部へといたるものである。大型のもの(249～255)と小型のもの(256～259)が存在する。また、250・251が裾端部の手前で接地し端部がやや上にあがる以外は、裾の端部で設置しており、大きな違いはみられない。これらの脚部は、内面が繊維束状の工具でナデを行っているためか、ケズリ状の粗いナデになっている。脚柱部との接合部を欠失する場合、坏部との見分けが難しい場合があるが、内面の調整によって区別をしている。

なお、高坏の調整技法の中で、ヘラミガキの上下両側などをナデ消す技法が散見される。特に脚柱部で多くみられる(232・234・245・237・238・241)が、坏部でもみることができる(182・186・190・196・198・199・215・218)。この中で、196・197・218は外面ではなく、内面をナデ消している。また、ミガキの光沢を完全にナデ消すものがある一方で、光沢を残したままヘラミガキの工具痕をナデ消すものもある。249では脚柱部に化粧土様の水で溶いたと考えられる粘土を塗布しており、目的は明らかでないが、さまざまな工夫がなされている。

## (2) 土製品 (図68)



土製品は、295の土玉が1点出土している。295は、直径1.8cm程の土玉で、中央に孔があいているが、通常みられるこの孔だけでなく、それとは別に側面上方から下方中心方向にむかっておおよそ等間隔に3カ所に孔があけられている。表面にヒビが入っており、焼成は弱くもろい。

### (3) 須恵器 (図63)

260は甕で口縁部下に断面三角形の突帯を巡らせる。断面の観察では、突帯部を形成した後、二重口縁状に口縁部を形成しているようである。頸部は全体の3/4が残るが、この範囲内では、1ヵ所だけヘラによる縦方向の刺突が施されており、ヘラ記号的なものであると考えられる。外面は、単位は明らかでないが平行叩きを施し、5cm程度の間をあけて横方向のハケメにより部分的に叩きを消している。内面の当て具痕は、浅いため不明瞭であるが、同心円文の間隔が狭く細い。また、一部ナデ消している。

261は短頸壺である。やや扁平な球状の胴部をもち、胴部から湾曲して口縁部にいたる。口縁部はわずかに外反気味に立ち上がる。胴下部～底部にかけて不定方向のヘラケズリの痕跡が確認でき、それよりも上部はヨコナデを施している。

262は平底瓶で、口縁の一部を欠失する以外は、ほぼ完存する資料である。胴部の下部から底部周縁にかけて格子目叩きの痕跡が残る。底部中央付近は、指頭の痕跡が残るほか、布目痕の可能性のある細かな凹凸が観察される。胴部から口縁部はヨコナデで、下半分には一部縦方向のハケメや

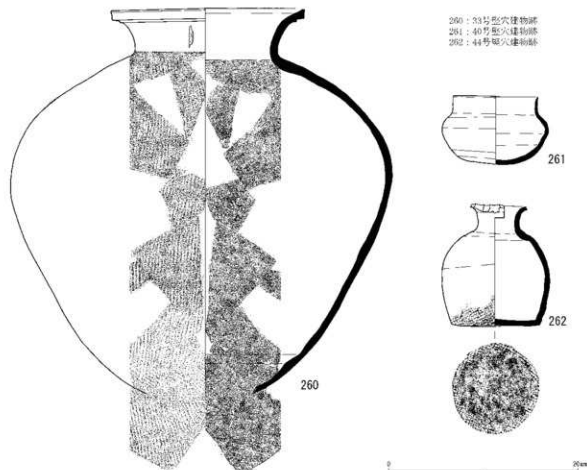


図63 須恵器実測図 (S=1/4)

ナデが観察される。胴部と底部の境界付近には亀裂が巡っている。底部と胴部の作り方に関係していると考えられる。目視では確認できないが、頸部付近の内面は粘土を接合した際の段を形成している。口縁部は外反して外側へ開き、端部はわずかに凹む。なお、口縁部の欠損は、人為的な打ち欠きによるものと思われ、3カ所連続して上方から打ち欠いている。

須恵器は図示した以外にも小片が出土している。

#### (4) 石器 (図64～図67)

263～282は鍛冶に関連すると考えられる、被熱して変色したり、鉄鏽と思われる物質が付着しているものを含んでいる。堅穴建物内から出土したものを中心に図化を行った。多くの石器は敲打痕や磨面をもち、多様な使い方をしている状況が認められるが、遺跡内に存在したと考えられる縄文時代や弥生時代の石器を再利用している可能性もある。石材は砂岩が多く、そのほかに輝石安山岩を使用している。

263～272は主に砥石・台石として使用されたと考えられる石器で、磨面あるいは砥面を形成しているものが多い。263～265は小型の砥石と考えられるものである。263は被熱により一部変色している。264は、鉄分が付着するためか1面が橙褐色に変色している。また、狭い上下両端部には打痕状の凹みがみられる。265は上・下部に割れた面がみられるが、下部の破面の角はやや丸みを帯びており、破損後も使用した可能性がある。また、被熱により変色している。266は砥石と考えられ、正面・裏面と左右の4面に磨面がみられる。砥石として使用する以前に台石あるいは敲石として利用したためか、正面・裏面と上下面の4面には敲打痕状の凹凸がみとめられる。このほか、一部被熱により変色している。267は砥石として主に使用しており、破面以外の全面に擦痕がみとめられる。その他に上端部に顕著な敲打痕がみられる。268は磨石・台石と考えられ、正面・裏面の両面には敲打痕状の凹凸、側面には磨面状の平坦な面が確認できる。一部、被熱によると考えられる変色した部分がみられるほか、点的に赤く変色した部分がある。269は台石と考えられ、鉄分が付着しているためか表面が橙褐色を呈しているが、図正面には使用によってこの橙褐色部が薄く消失している様子が観察される。被熱による変色はみられない。270・271は主に磨石として使用されており、正面・裏面に磨面が観察される。270には一部に敲打痕と鉄鏽状の付着物がみられる。271は縁辺部に擦痕、あるいは打痕と考えられる凹みがみられる。272は砥石・台石と考えられ、表面が全体的に滑らかで、一部に敲打痕状の凹凸と擦痕がみられる。側面が被熱により変色している。

273～281は金床石として使用されたと考えられるもので、272までの石器と同様に複数の使用痕が確認できる。273は金床石の可能性のある石器で、先端部を中心に被熱して黒く変色しているが、変色の程度は弱い。また、打痕などの使用痕も顕著ではない。274は金床石・砥石・敲石(石槌)として使用されたと考えられる石器で、被熱により黒～赤色に変色した部分がみられる。しかし、変色した部分は、研磨および敲打痕状の凹凸により一部消失している。使用痕の観察から、金床石→砥石→敲石として転用されたと考えられる。275・276は金床石の破片と考えられるもので、被熱により黒～赤色に変色している。276には鉄鏽と考えられる橙褐色の付着物がみとめられるほか、側面には磨面状の平滑な面がみられる。277は金床石あるいは台石と考えられ、側面を中心として黒く変色した部分が確認できる。正面・裏面には剥離が認められるが、剥離面の一部も黒

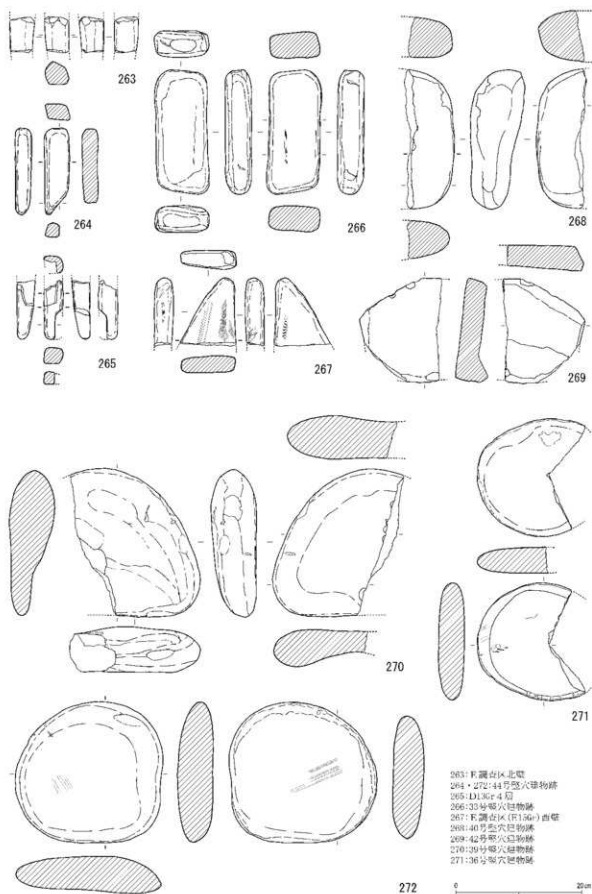
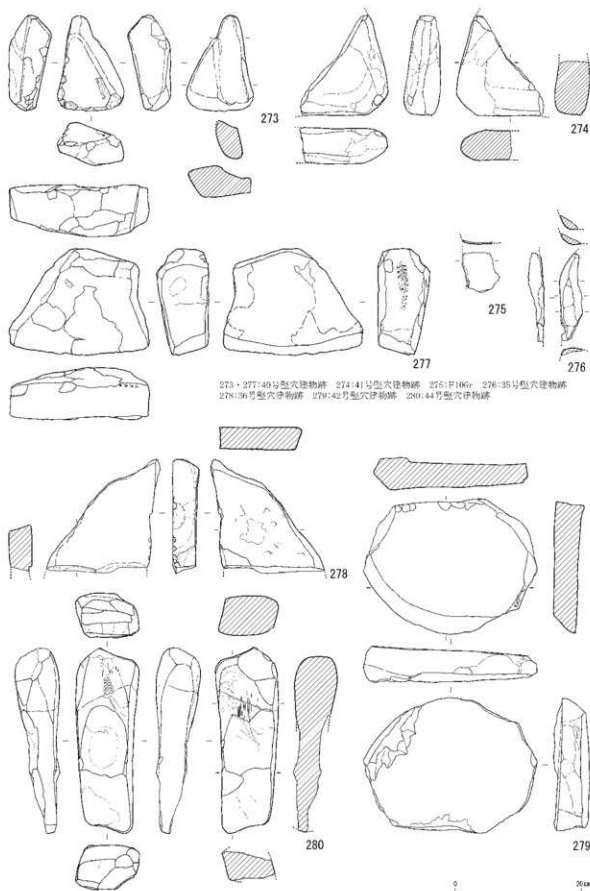


图64 古墳時代石器実測図1 (S=1/6)



273·277:40号型穴建物跡 274:41号型穴建物跡 275:F106r 276:35号型穴建物跡  
278:36号型穴建物跡 279:42号型穴建物跡 280:44号型穴建物跡

图65 古墳時代石器実測図2 (S=1/6)

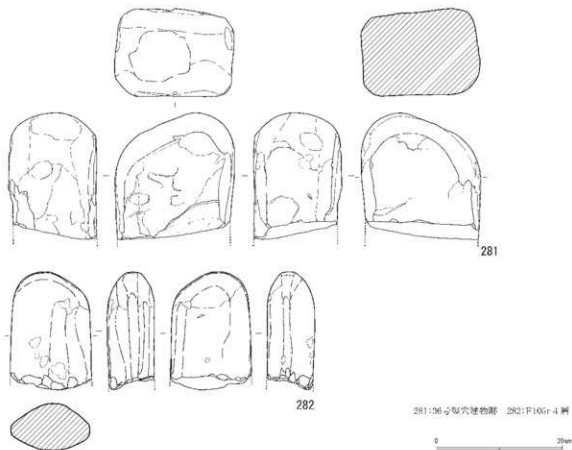
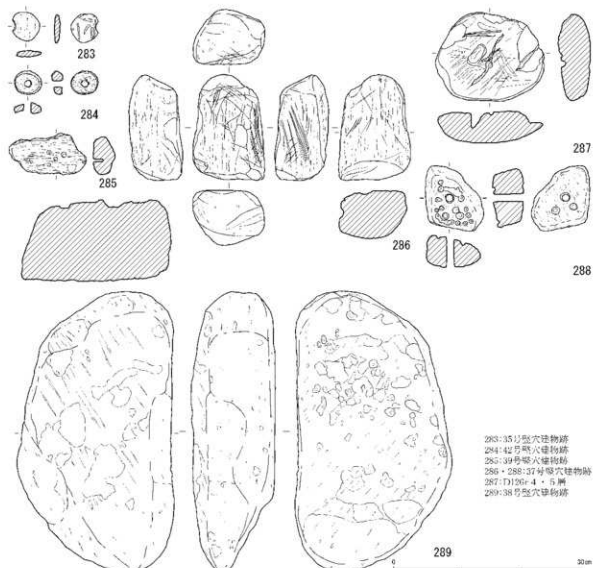


図66 古墳時代石器実測図3 (S=1/6)

く変色している。また、鉄錆と考えられる橙褐色の付着物が観察できる。このほか、側面の一部であるが、擦痕を確認することができる。278は磨石として主に利用されたと考えられるもので、図正面に磨面を形成している。裏面は鉄分によるためか橙褐色を呈しているが、中心部は使用により橙褐色部が消失している。また、鉄分が多いためか点的に赤く変色した部分があるほか、鍛造剥片様の光沢のある物質が付着している。このほか、側面の破面にも一端溶融したと考えられる丸みを持った形状の鉄錆が付着しており、金床石として使用された可能性があるが、被熱はみられない。また、破面に鉄錆が付着することから、割れた後も使用していると考えられる。279は金床石と考えられ、全体に鉄錆様の橙褐色の物質が付着している。この付着物は正面・裏面の平坦面を中心にみられ、一部側面にも及んでいる。使用によるためか、正面・裏面には鉄錆状物質が付着していない部分のみとめられる。280は砥石として主に利用されたと考えられ、正面・裏面に擦痕がみられる。また、正面上部が被熱により黒く変色しているほか、左右の両側面も被熱により赤く変色している。さらに部分的に敲打痕状の凹凸が確認できるので、金床石として利用された可能性もある。正面・裏面の下部は大きく剥離しているほか、上部で2つに折損している。44号竪穴建物跡床面から2つに割れた状態で離れて出土しているが、剥離した部分の出土は確認していない。281は金床石と考えられ、被熱して変色しているほか、鉄錆が付着している。特に右側面における鉄錆の付着が顕著である。部分的に磨面と考えられる平滑な面をもち、台石あるいは磨石を転用している可能性が考えられる。

282は主に磨石として使用されており、上面を除く各面に磨面が形成されており、一部にコーン



283:35号型穴穿物跡  
 284:42号型穴穿物跡  
 285:39号型穴穿物跡  
 286・288:37号型穴穿物跡  
 287:D126r-4・5層  
 289:38号型穴穿物跡

図67 古墳時代石器実測図4 (S=1/6)

グロス状の光沢を持つ。上端面に敲打痕状の凹凸を形成するほか、正面・裏面にも同様な凹みが部分的にみとめられ、敲石あるいは台石としても利用されたと考えられる。破面の縁には、割れた後に剥離した様子がみとめられ、折損後も使用した可能性がある。E調査区からの出土であり、古墳時代の石器としたが、縄文時代あるいは弥生時代に属する可能性がある。

283～289は軽石製の石器あるいは石製品である。軽石自体は多く出土しているが、本報告では明らかに加工がみられるものについて図化を行った。

283は円板状の加工品であるが、弧状に内湾した部分や側面も含めて、ほぼ全面に研磨を行い整形している。284は中央に穿孔を施した環状の軽石である。孔内部は平滑でほぼ真っ直ぐにあげられている。表面は若干剥落している可能性がある。285・288は孔が開けられた軽石である。285は正面のみ、288は正面と裏面に孔があげられているが、貫通しているのは288の1カ所のみである。288の貫通した孔は両側から穿孔されており、途中にずれて段を形成している。孔の大きさは直径10mm程度の大型のものと5mm程度の小型のもの2種類あり、285は小型のみ、288の正面は小型と大型、裏面には大型の孔がみられる。孔はいずれも回転穿孔によって、表面からはほぼ垂直に

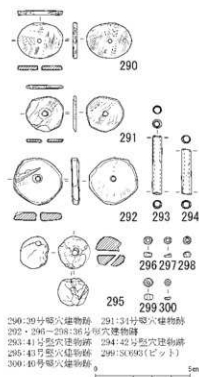


図68 有孔円板・玉類実測図 (S=1/2)

あけられている。288正面の小型の孔は直線的に並んでいるようにも見える。286・287は鋭利な刃物によると考えられる、断面が鋭い「V」字状を呈する傷を多数もつ軽石である。286はほぼ全面に刃物痕が残るが、特に図正面と右側面が顕著である。右側面以外の傷は幅が非常に細いため、一回でついたものが多いと考えられる。右側面の傷の上端幅は広く、刃物が複数回重複して当たっていることを想定できる。なお、一部研磨によって磨かれている部分があり、刃物痕が浅くなり消えかけている箇所もある。このほか、上面の研磨が施されている面には鉄分が付着しているためか、橙褐色に変色している。287は刃物による傷だけでなく、孔をもつ。孔はやや大きめで、表面側が広く奥側は狭くなっており、285・288とは穿孔の仕方が異なるか、穿孔の目的が異なると考えられる。刃物痕の傷は図正面のみにみられる。289は大型の軽石で、図正面と裏面が平坦に整形されており、側面も研磨が施されるなど全体に整形されている。このほか、鉄錆と考えられる橙褐色の付着物と、刃物痕と考えられる傷が部分的に確認できる。

#### (5) 石製品・ガラス製品 (図68)

3次調査では、石製品として有孔円板・管玉・白玉、ガラス製品として小玉が出土している。

290～292は有孔円板で、290は滑石裂、291は緑色凝灰岩裂、292は頁岩裂である。材質は異なるが、穿孔は1つのみである点は共通している。滑石裂の290は形状が整っているほか、作りが丁寧で側面は研磨によってほぼ平坦に整えられている。これに対して291・292は平面形がやや歪で、やや粗雑な印象を受ける。また、292はほかの2つに比べると分厚い作りである。このほか、291は軟質で、紐などで懸垂したためか孔の一部が外側へ広がった状況が観察できる。いずれも埋土内からの出土で、292は36号竅穴建物埋土1層中から多量の土器とともに出土している。1次・2次調査では出土しておらず、3次調査でもE調査区の北西部の遺構に偏っている。

293・294は管玉で、293は滑石裂、294は頁岩裂である。293は紐ずれによるためか、孔両側の対応する縁がすり減って広がっている。いずれも両側穿孔で、内面に孔のズレがみとめられる。内面には回転穿孔による凹凸がみられる。径に対して孔径が大きく、器壁は薄いように、作り方は類似している。竅穴建物跡からの出土であるが、床面からではなく、埋土あるいは検出面からの出土である。1次・2次調査で管玉は出土しておらず、また、3次調査でも41号・42号竅穴建物跡からの出土で遺構の位置的には偏りがみられる。埋土内からの出土や、出土遺構が偏っている点など、有孔円板と共通する点がある。

296～298は白玉で、296・297は滑石裂、298は蛇紋岩裂である。298は側面に明瞭な稜をもち、側面と上下両面との境も比較的明瞭であるが、296・297は側面の稜は不明瞭で、上下両面の境界は丸みを持っている。特に297は形状が歪である。これらの白玉はいずれも36号竅穴建物跡の炉内埋

土を篩選別した際に回収している。炉内にあったのが意図的なものか、偶然であるかは明らかでない。有孔円板や管玉と同様に、1次・2次調査では出土していない。

299・300はガラス製小玉で、299が淡緑色、300は紺色を呈す。299は上下両面に研磨を施し、孔周辺に面を形成している。内部に気泡は確認できるものの、その向きは明らかでない。300には上下両面ともに丸みを帯び研磨痕はみられない。内部に気泡が縦に並んでいる様子が確認できる。299は43号竪穴建物跡近くのピット内から出土しており、時期は明らかでない。

#### (6) 鉄器 (図69)

302は平造で平面が長三角形、直角間の鎌身をもち、頸部に関を有する鉄鎌である。頸部の関は茎個がやや広くなっており、台形関と考えられる。茎部断面は長方形である。303は36号竪穴建物跡埋土1層から出土した、縄文時代の凹基式石鎌に類似した形態の鉄鎌と考えられる鉄器である。表面の一部に有機質が錆着している。横断面形はゆるく湾曲しているが、薄い鉄板を切断して整形していると考えられる。301と同じく弥生時代の鉄器である可能性があるが、36号竪穴建物跡埋土1層の特異な状況を考えて判断が難しく、ここでは建物跡に伴う遺物として扱っておく。

304～307は刀子で、304・305は両刃、307は刃四である。304の茎部には樹皮状の有機質、307には木質状の有機質が錆着している。307の木質は繊維の方向が背の軸からややずれている。304は鍛接が不十分であったためか、刃部と茎部の境付近で剥離している。

308は刀子状の鉄器が重なりあった状態で錆着しているが、調査で出土している刀子と比較すると、厚みが厚いため器種は不明である。309は薄い鉄板状の鉄器で、緩く湾曲しており、右側面に切断痕がみられる。

310・311は鉄鉞と考えられる鉄板状の鉄器である。310は両端を欠失するが、「Z」字状に折り

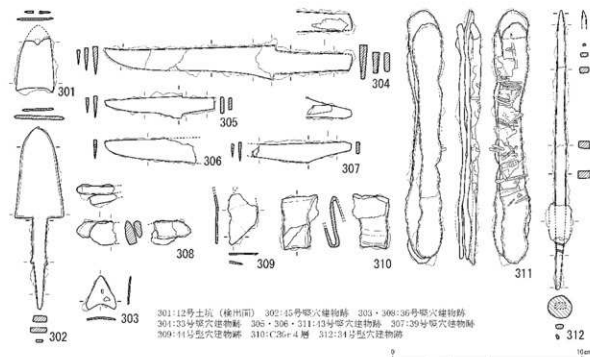


図69 鉄器実測図 (S=1/2)



曲げられている。311は長さ13cm程度の小型の鉄鋌が3枚鑄着したものであるが、表面には繊維や樹皮状の有機質が確認できる。遺棄時には束ねられた状態であったと考えられる。形態的には東潮氏分類の細型鉄鋌B類（東1999）に該当する。310は遺構が少ないD調査区から出土している。このような折り曲げられた鉄器は、いわゆる祭祀遺構から出土することが多い。遺跡の特殊性を考えると、調査区外に祭祀に関連した遺構が存在する可能性がある。

312は身部横断面が長方形を呈し、先端付近が扁平な横断面を呈する鑿状の鉄器である。図上部が刃部と考えられ、途中の木質を挟んで下部が茎部と考えられる。途中の木質は長さ約2cmで、径が1.0～1.2cmの断面円形を呈している。木質よりも下の茎部にはらせん状に幅1mm程度の細い紐状の物質が鑄着している。したがって木質は茎下端まで覆っておらず、本来の形状を保っていると考えられる。木質の表面に樹皮が遺存しており、枝の一部を切断し、中を割り抜いて身を通してることがわかる。ただし、木質の中の鉄器の状態は明らかでない。身部と考えられる木質よりも上部の中程で、幅が最も広がっているようにみえるが、鑄のためはつきりしない。この鉄器の機能などは不明である。

### 第3節 古代の遺物

#### (1) 土師質土器

本報告では図示できなかったが、図版40に示すように、甕、坏、高台をもつ坏などが調査区内や13号～15号土坑などから出土している。甕は内面がケズリでおおよそ共通しているが、外面の調整にはハケメとタタキの2種類が確認できる。口縁部の破片は多くないが、緩やかに外反しているのが確認できる。坏は比較的遺存状態がよく、数も多い。底部と口縁部の境に稜をもち区別が明瞭なものから、やや丸みを帯びたものもある。体部も直線的のびるものから、やや内湾するものがみられる。このほか、黒色土器や内面に布目痕を有する土器が一定数みられる。これらはおおよそ9世紀～10世紀初め頃のものと考えられ<sup>(1)</sup>、1次・2次調査で出土しているものと同じ時期のものである。

#### 註

- (1) 土師質土器の編年については、平成22年度に当センター主催の埋蔵文化財担当専門職員研修会における近沢恒典氏（都城市教育委員会）の発表資料を参考にした。

#### 引用・参考文献

- 中村直子 1987「成川式土器再考」『龐大考古』第6号 鹿児島大学法文学部考古学研究室、57-76頁  
東 潮 1999「第5章 鉄鋌の基礎的考察」『古代東アジアの鉄と倭』、淡水社、147-283頁  
日田市教育委員会 1995『荻鶴遺跡』日田市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集  
宮崎県埋蔵文化財センター 2011『働女木遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第205集

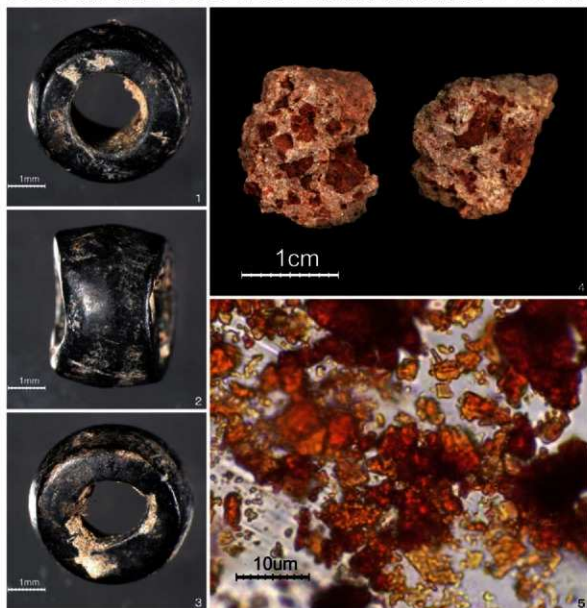
## 第4章 自然科学分析

### 第1節 平峰遺跡3次調査出土遺物の蛍光X線分析

#### (1) 試料と方法

分析試料は、36号竪穴建物跡の炉より出土した小玉（試料1、図70-1～3）と、44号竪穴建物跡より出土した赤色物（試料2、図70-4）である。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000Type IIを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV・1mAのロジウムターゲット、X線ビーム径が100 $\mu$ mまたは10 $\mu$ m、検出器は高純度Si検出器（Xerophy）である。また、試料ステージを走査させながら測定することにより、元素の二次元的な分布画像を得る元素マッピング分析、



1～3：試料1 4：試料2 5：試料2生物顕微鏡写真

図70 蛍光X線分析対象の遺物

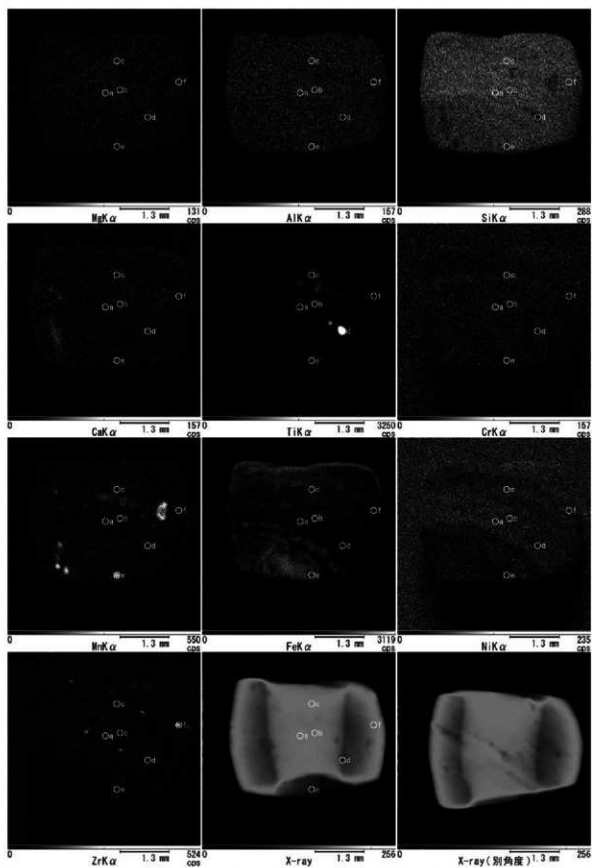


図71 試料1の元素マッピング図および透過X線マッピング

表3 試料1の点分析結果

	RgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	SO <sub>3</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	MnO <sub>2</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	NiO	CuO	ZnO	ZrO <sub>2</sub>
a	29.43	14.82	37.44	—	—	—	0.22	0.07	0.06	0.24	17.25	0.27	0.01	0.06	0.10
b	25.36	15.17	39.34	—	—	—	0.23	0.22	—	0.19	19.11	0.25	—	0.06	0.07
c	28.13	14.32	38.48	—	—	—	0.14	0.24	0.07	0.25	17.92	0.28	—	0.06	0.11
d	—	2.05	2.83	—	—	—	0.08	88.09	—	0.50	6.33	—	—	—	0.08
e	—	19.50	32.58	1.32	0.55	0.41	0.67	0.28	—	6.85	37.36	0.23	—	0.17	0.08
f	24.27	13.92	36.42	—	—	—	0.30	1.02	—	0.33	20.84	0.31	0.06	0.08	2.46

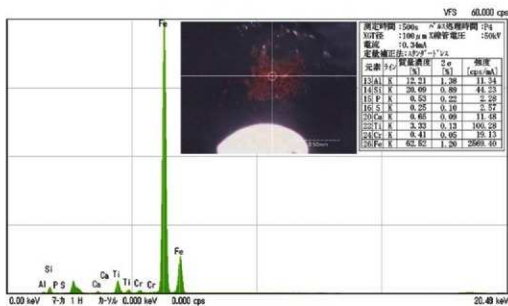


図72 試料2の蛍光X線分析結果

およびX線透過試験も可能である。検出可能元素はナトリウム～ウランであるが、ナトリウム、マグネシウムといった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上、検出感度が悪いので、試料中に少量含む程度ではピークを検出し難く、検出できてもその定量値はかなり誤差が大きい。

試料1は、まず元素マッピング分析を行い、典型的な箇所、特徴的な箇所について点分析を行った。測定条件は、マッピング分析は50kV、1.00mA、ビーム径100μm、測定時間2000sを5回走査、パルス処理時間P3に、点分析は50kV、0.10～0.16mA（自動設定による）、ビーム径100μm、測定時間500s、パルス処理時間P4に設定した。

試料2は、セロハンテープに赤色物を極少量採取して分析試料とした。測定条件は、50kV、0.34mA（自動設定による）、ビーム径100μm、測定時間500s、パルス処理時間P4に設定した。また、蛍光X線分析で作成した試料を観察試料として、生物顕微鏡で赤色顔料の粒子形状を確認した。

定量分析は、いずれも標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法（FP法）による半定量分析を装置付属ソフトで行った。そのため、定量値の誤差は大きい。

## (2) 結果と考察

### 試料1

元素マッピング図および透過X線マッピング図（2方向）を図71に示す。また、マッピング図中に示されるa～fの6点のFP法による半定量分析結果を表3に酸化物の形で示す。典型的な

表4 分析対象の炭化種実 (括弧は破片を示す)

	試料3号	試料3	試料4	試料5	試料6	試料7	試料8	試料9
	出1場所	43号堅穴建物跡						
	点上位号	756	758	3201	3202	3203	3221	47号堅穴建物跡
分析群	部位/時期	古墳時代中期～後期						
タリ	炭化子葉	(1)						
イチイガシ	炭化子葉	12 (20)						
モモ	炭化核	1	(5)	(2)		(1)	(4)	
	炭化子葉	1 1						

箇所(点a～c)では主にマグネシウム(MgO)、アルミニウム( $Al_2O_3$ )、ケイ素( $SiO_2$ )、鉄( $Fe_2O_3$ )が高く検出された。元素分布は不均質であり、チタン( $TiO_2$ )、クロム( $Cr_2O_3$ )、鉄、ニッケル(NiO)、ジルコニウム( $ZrO_2$ )が縞状に分布していた。また、粒状にチタン(点d)、マンガン( $MnO_2$ 、点e)、ジルコニウム(点f)の高い箇所がみられた。

元素分布が不均質縞状で、マグネシウムが非常に高く検出されることから、材質は蛇紋岩質と推定される。蛇紋岩は、蛇紋石を主成分とし、かんらん岩類中のかんらん石や輝石が蛇紋石化した岩石である(黒田・諏訪1983)。

#### 試料2

スペクトルおよびFP法による半定量分析結果を図72に示す。鉄(Fe)が高く検出され、他にケイ素(Si)、アルミニウム(Al)、チタン(Ti)などが検出された。また、生物顕微鏡観察により得られた画像を図70-5に示す。

鉄が高く検出されており、赤い発色は鉄によるものと推定される。すなわち、顔料という観点からはベンガラにあたる。ベンガラは狭義には三酸化二鉄( $Fe_2O_3$ 、鉱物名は赤鉄鉱)を指すが、広義には鉄(Ⅲ)の発色に伴う赤色顔料全般を指す(成瀬2004)。また、ベンガラは直径約1 $\mu m$ のパイプ状の粒子形状からなるものも多く報告されており、これは鉄バクテリアを起源とすることが判明しているが(岡田1997)、本試料からはパイプ状粒子は観察されなかった。

## 第2節 平峰遺跡3次調査出土の炭化種実

### (1) 試料と方法

試料は、43号堅穴建物跡から出土した6試料と47号堅穴建物跡から出土した1試料の計7試料である。うち43号堅穴建物跡から出土した6試料はそれぞれ1個体の破片とされていたが、1試料中には1点から複数点が収納されていた。炭化種実は発掘調査時に目視で取り上げられたものである。

計数の方法は、完形または一部が破損しても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。

### (2) 結果

同定した結果、木本植物では広葉樹のタリ炭化子葉とイチイガシ炭化子葉、モモ炭化核・炭化子葉の3分類群が見いだされた。

遺構別の炭化種実出土傾向を記載する。

#### 43号竪穴建物跡

試料5でクリ炭化子葉破片1点（約半分）、試料3でモモ炭化核1点（現状では割れ）、試料4でモモ炭化核破片5点（約1個体分）、試料6でモモ炭化核破片2点（1個体未満）、試料7でモモ炭化核破片1点（約半分）とモモ炭化子葉が1点、試料8でモモ炭化核破片4点（1個体分）、



1. クリ炭化子葉（43号竪穴建物跡）
- 2～4. イチイガシ（47号竪穴建物跡）
5. イチイガシ炭化子葉（食害痕；47号竪穴建物跡）
6. モモ炭化核（43号竪穴建物跡）
7. モモ炭化子葉（43号竪穴建物跡）

図73 分析対象の炭化種実

モモ炭化子葉1点が得られた。

#### 47号竪穴建物跡

イチイガシの炭化子葉の完形が12点、破片が20点得られた。

以下に炭化種実の記載を行い、図73に写真を示して同定の根拠とする。

(1) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 炭化子葉 プナ科

側面は広卵形。表面には縦方向の皺状の溝がある。しわ以外の面は平坦でやや光沢があり、硬質。残存長14.3mm、幅20.8mm。

(2) イチイガシ *Quercus gilva* Blume 炭化子葉 プナ科

側面観は依形。先端の突出はあまりない。おおむね縦方向に明瞭な溝が1本確認できる。溝が浅いものや複数あるもの等、変異の幅が大きい。中には図73に示したように、昆虫による食害痕をもつものもある。長さ10.6~14.3mm、幅7.8~9.0mm。

(3) モモ *Amygdalus persica* L. 炭化核・炭化子葉 バラ科

核の上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。また片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。長さ20.5mm、幅17.4mm、厚さ14.0mm。子葉は扁平な円形で、光沢がある。長さ8.6mm、幅6.6mm、厚さ5.3mm。

### (3) 考察

竪穴建物跡から出土した炭化種実を同定した結果、木本植物で生食可能なクリとイチイガシ、モモが得られた。このうち、モモは栽培種である。取り上げ時の所見では、各試料は1個体の破片であったため、モモは最大で5個体あったと考えられる。モモの核と、核の内部にある子葉も産出したが、これは元々核に伴っていたと考えられる。遺構別にみると、43号竪穴建物跡からはクリが半個とモモが約5個、47号竪穴建物跡からはイチイガシが破片を含めると約20個得られた。イチイガシは生食可能なドングリ類である。産出したイチイガシの部位はすべて食用部位である子葉で、果実は破片すら含まれていなかった。調査時の所見ではイチイガシが果実を伴っていたかは不明で、遺構内から散漫に産出したとされている。詳細な産出状況が不明のため、どのような来歴で炭化したかは不明であるが、食用となる子葉のみであれば、調理および加工過程で炭化したか、生のままであった子葉が何らかの要因で被熱した可能性がある。またイチイガシを含むドングリ類の果皮は炭化時にしばしば外れやすいため、本来果実の状態であったとすれば、貯蔵してあった果実が何らかの要因で被熱した可能性も考えられる。イチイガシの中には図73-5のように昆虫による食害痕をもつものもあるため、調理・加工したというより、保管状態の果実が炭化したと考える方が自然かもしれない。

以上のように、平峰遺跡では古墳時代中期に堅果類を採取し、果樹を栽培していたことが明らかとなった。

#### 引用・参考文献

- 黒田吉益・諏訪兼位 1983『偏光顕微鏡と岩石鉱物〔第2版〕』共立出版、343頁  
成瀬正和 2004『正倉院宝物に用いられた無機顔料』『正倉院紀要』26 宮内庁正倉院事務所、13-61頁  
岡田文男 1997『パイプ状ベンガラ粒子の復元』『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集』、38-39頁

## 第5章 遺構と遺物の検討

### 第1節 竪穴建物跡について

#### (1) 竪穴建物跡の形態について

平峰遺跡1次・2次調査(宮崎県埋蔵文化財センター2012)では、古墳時代では類例がほとんど知られていない平面形が五角形あるいは六角形を呈する多角形建物跡がそれぞれ2軒ずつみつまっている。今回の3次調査でも1軒だけではあるが、平面形が五角形の竪穴建物跡が検出された。この45号竪穴建物跡は、一部調査区外に広がり、また、古代の道路状遺構に切られているため、全容は明らかでない。しかし、それぞれの頂点に対応する柱穴と考えられるピットを検出しており、基本的な構造は1次・2次調査でみつまっているものと同じである。この45号竪穴建物跡以外は張出部の有無などの違いはあるものの、方形を基本とした平面形で共通している。張出部を有するものは、32号・37号・43号竪穴建物跡である。その形状には2種類あり、一つは32号竪穴建物跡のように中央付近の一部のみが張り出すタイプである。もう一つは37号・43号竪穴建物跡のように、付設する位置は違うものの一辺の半分ほどが張り出すタイプである。1次・2次調査分をみると、13号竪穴建物跡で張出が確認でき、32号竪穴建物跡と同じように一辺の中央付近が張り出すタイプであるが、付設位置が北側であるという点では異なる。これらの遺構は、中央部が突出するものが遺跡の北側、辺の半分が突出するものが南側に位置しているとみられることもできる。このほか、45号竪穴建物跡も南側に位置する一辺の中央付近が突出しているように見えるが、建物に伴うかどうかは明確に判断することはできなかった。

建物跡の平面形をみると、45号竪穴建物跡を除き他の建物跡は方形を基調とする。これらの方形の建物跡は、大きさの上では一辺5～6mの大型と、4m以下の小型の建物跡に分けることができる。1次・2次調査を含めると、南北長が4.2～5.6m、東西幅が3.8～4.8mの一群と、南北長5.4～6.9m、東西幅5.1～6.7mの一群に分けることができる(図74)。したがって、4m以下の小型、4～5mの中型、5m以上の大型の建物跡が存在したことが想定できる。なお、多角形建物については、辺での比較ができないが、面積的には大型に属すると考えられる。この基準にしたがえば、小型建物跡は4号・6号・7号・9号・14号・17号・25号・28号・35

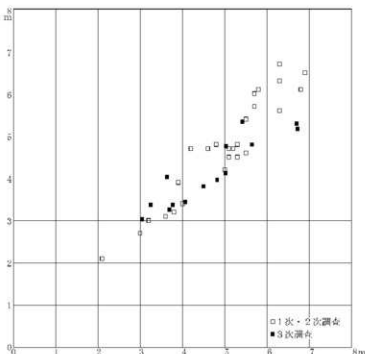


図74 平峰遺跡における竪穴建物の規模



表5 1次・2次調査の竪穴建物跡における諸要素の状況

	平面形	柱穴	扉	貼床	壁溝	鍛冶炉	羽口	焼坪
1号竪穴建物跡	方形	4	○	○	×	×	×	×
2号竪穴建物跡	方形	4	△	○	×	×	○	×
3号竪穴建物跡	方形	4	△	○	×	×	○	×
4号竪穴建物跡	方形	2	×	△	×	×	×	×
5号竪穴建物跡	方形	4	○	○	×	×	○	×
6号竪穴建物跡	方形	4	△	○	×	×	○	○
7号竪穴建物跡	方形	4	×	○	×	×	○	×
8号竪穴建物跡	方形	4	○	○	×	×	○	×
9号竪穴建物跡	方形	2	△	○	×	×	×	○
10号竪穴建物跡	方形	4	△	○	×	×	×	×
11号竪穴建物跡	方形	4	×	○	△	×	×	×
12号竪穴建物跡	方形	4	△	○	×	×	○	×
13号竪穴建物跡	方形	4	○	○	×	?	○	○
14号竪穴建物跡	方形	2	△	×	×	×	○	×
15号竪穴建物跡	方形	2	○	×	×	×	○	×
16号竪穴建物跡	方形	4	×	×	×	×	×	○
17号竪穴建物跡	方形	6	×	×	×	×	○	×
18号竪穴建物跡	方形	4	△	○	×	△	×	○
19号竪穴建物跡	方形	4	×	×	×	×	×	△
20号竪穴建物跡	方形	4	△	○	×	×	○	×
21号竪穴建物跡	方形	4	△	○	×	×	○	○
22号竪穴建物跡	方形	4	×	△	×	×	×	×
23号竪穴建物跡	方形	4	△	○	×	×	△	○
24号竪穴建物跡	方形	3	△	○	×	×	○	×
25号竪穴建物跡	方形	0	×	×	×	×	○	○
26号竪穴建物跡	方形	4	△	○	×	×	×	×
27号竪穴建物跡	方形	2	○	×	×	△	×	×
28号竪穴建物跡	六角形	6	×	×	○	×	○	×
29号竪穴建物跡	六角形	6	△	○	△	×	○	×
30号竪穴建物跡	五角形	5	△	×	△	×	×	×
31号竪穴建物跡	五角形	5	×	×	×	×	○	×

号・39号・41号・42号・44号・47号・48号竪穴建物跡、中型建物跡は2号・3号・5号・10号・11号・13号・16号・18号・19号・26号・32号・36号・37号～39号・43号・46号竪穴建物跡、大型建物跡として1号・8号・12号・15号・20号～24号・33号・34号・40号と多角形建物跡の28号～31号・45号建物跡となる。

これらの建物の掘形は、多くが一度基本土層の7層まで掘削を行った後、霧島御池軽石と、7層と考えられる黒色土を混ぜた土で厚さ10～20cmの貼床を施している。この貼床をもつ建物跡の多くは、床面に硬化面を有するが、調査時の所見では、この硬化面は貼床の中でも霧島御池軽石を含む割合が高い。

貼床の土層断面でも、中央付近は霧島御池軽石層をブロック状に含んでいる様子がみられた。頻繁に通る中央付近を中心として意図的に霧島御池軽石を多く混ぜていると考えられる。

竪穴建物跡の床面には中央付近に炉を設けたものがあり、炉や炉と考えられる焼土を含む土坑は32号～38号・42号で確認されているが、それ以外の建物跡では明らかな焼土や焼けた面は確認できなかった。ただし、明らかな硬化面を形成している建物跡では、床面中央付近に硬化面を持たないものがある。40号竪穴建物跡では中央付近の硬化面がみられない範囲が楕円形に確認できた。当初土坑の可能性を考え精査・断削をおこなったが、結局霧島御池軽石を含まない基本土層7層の黒色土部分であると判断した。このような状況から建物中央は人が通らない場所であったことをうかがうことができる。また、本遺跡からは羽口が多く出土しているが、羽口の先端が溶融したような高温を受けた炉跡は確認できなかった。1次・2次調査においても明確に鍛冶炉と考えられるものは報告されていない<sup>1)</sup>。

柱穴については、五角形建物が頂点に対応した5本であったと考えられるほかは、4本柱が主流であり、大型の竪穴建物跡では4本+2本の柱穴を有しているものもある。1次・2次調査を合わせてみても、多くは4本柱であり、小型のものが2本柱となる傾向にある。3次調査では43号竪穴建物跡のみが床面および掘形底面において全く柱穴を確認することができなかったものの、2柱の可能性もある。

このほか、建物の床面をスロープ状に張り直したと考えられるものとして、39号竪穴建物跡と43号竪穴建物跡がある。いずれも北側半分で確認でき、南側では確認されていない。39号竪穴建物跡

では、この二次床面は硬化面として確認することができるが、43号堅穴建物跡では硬化面としてとらえることはできなかった。43堅穴建物跡については、一次床面も明らかな硬化面を形成しておらず、また柱穴も明らかでないという点では、構造および性格的に他の堅穴建物跡と異なっていた可能性が高い。

## (2) 堅穴建物跡の配置について

3次調査の範囲内では、堅穴建物跡はE調査区内にはほぼ限られるが、F12～13Gr付近には若干の空地が存在する。1次～3次調査を通してみても、43号堅穴建物跡周辺は堅穴建物跡が少ない。特に、中型建物では、16・18号・36～39号堅穴建物跡が43号堅穴を囲むように位置している。小型の17号堅穴建物跡が43号堅穴建物に近いが、小型の中でみれば、17号堅穴建物跡が他の小型の建物跡から離れている。

建物跡の大きさで配置をみると、それぞれの大きさの建物跡で配置の様子が若干異なる。まず、大型建物跡は比較的同じ間隔で離れて位置しているが、南側付近には隣接するなど集中するところが見られる。北側の大型建物跡は中央付近に南北に広がる空地が見られ、東西に分けられる可能性がある。また、五角形の建物跡が、東西に直線的に並んでいるが、それによって、大型建物跡が南側と北側に区分された状態となっている。また、六角形建物跡は五角形建物跡を挟んで向かい合った位置にある。中型建物は、大型建物跡とは逆に北側に多くなっている。中心的な分布は、3次調査E調査区の北側付近である。小型建物跡は、中型建物跡の周辺に並ぶようにして位置している。これらの建物跡のすべてが同時期に併存していたわけではないが、次章図80のように時期別にみると、大型建物跡が分散し、その周辺に中型・小型の建物跡が付属するような状況である。多角形建物跡は五角形と六角形で時期が分かれ、それぞれ特徴的な配置となっており、3グループ程度の集団により集落が形成されていたようである。

さらに遺物と遺構の関係をみると、有孔円板・管玉では、有孔円板が33号・36号・39号堅穴建物跡、管玉が41号・42号堅穴建物跡から出土しており、E調査区の北西部に偏っている。このような遺物は、1次・2次調査では2号堅穴建物跡で水晶製切子玉が出土している以外出土していないため、遺跡全体からみても偏っているということが出来る。土器に注目すると、鉢の中でもコップ形を呈するものは、39号・41号・42号・44号・45号堅穴建物跡から出土しており、他では確認できない。また、43号堅穴建物跡の出土遺物は、土器・鉄錠・モモの核や子葉など、他の遺構と比べると異質である。さらに、中型・小型建物跡のうち、五角形住居よりも南側に位置する25号～27号・46号堅穴建物跡の遺物出土量は非常に少なくなる特徴が見られる。

時間的な変遷をここでは除外して、全体を通しての配置について建物跡の大きさや出土遺物の面から検討した。各視点によってそれぞれ傾向が存在し、建物の位置を決めるに当たって何らかの規範が存在したことは間違いないと考えられる。遺物種の偏り具合からは、そこを利用したと考えられる人間の社会的性格が大きな要素となった可能性が高いことが考えられる。

## 第2節 古墳時代の土器について

### (1) 平峰遺跡における出土土器の特徴について

今回の調査では非常に多くの土器片が出土しているが、本報告ではその一部のみを報告することができたのである。ここでは、3次調査の竪穴建物跡から出土した土器について、未報告分を含め、形態・製作技法・胎土と含有鉱物・用途の4項目について検討を行うこととする。

#### 形態について

本報告では最も大きな分類である器種として、壺・甕・鉢・高坏に分類を行っている。これらについて以下、順に検討を行っていく。これらの各分類基準を図75、各遺構における形態別の出土量を表6に示している。

壺は、口縁部形態と胴部形態で分類することができる。口縁部は二重口縁（壺A類）と直口縁（壺B類）の2形態、胴部は幅に対して器高が高い倒卵状（壺a類）と、胴が張る扁平球状（壺b類）の2形態が存在する。表6にみるように、数量的には直口壺が多く、二重口縁壺は少ない。二重口縁については、二重口縁壺のミニチュアと考えられるものも含んでいる。一方の胴部形態については、口縁形態が不明なものは扁平球状のものが多く、これは倒卵状のものが大型に多いことに由来している。各遺構別に出土している形態をみると、二重口縁は41号～43号竪穴建物跡がやや多く、胴部形状についてはa類・b類の両者が同じような数量である。このことから、大型品のa類と小型品のb類がセット関係にあった可能性が考えられる。このほか、甕と同じく頸部に突帯を施すものがみられる。甕と同様に一方向からの刻みを施しているものもあるが、甕とは異なり山形あるいは「V」字状に交互の向きに刻みを施しているものが目立つ。

以上のほか、壺のミニチュアと考えられる小型品が出土している。そのほとんどが小型のb類を模倣しているが、表面にヘラミガキを施すなど、作り方を忠実に再現しているものが目立つ。

甕については、基本的な形状として、底部から口縁部まで直線的なもの（甕A類）と、肩を持ち頸部でくびれる形状（甕B類）の2形態が存在する。甕A類は、外形の形状によって、口縁部が外側に開き胴部から直線的に口縁にいたるもの（a類）、胴下部から口縁部まで緩やかに湾曲している（ただし、内湾しない）もの（b類）、胴下部から突帯付近まで直線的あるいは緩やかに湾曲した後、突帯付近から口縁部がキャリバー状に内湾するもの（c類）、胴部から口縁部にかけて緩やかに内湾するもの（d類）がある。中村直子氏による鹿児島県における先行研究（中村1987）からは、a類からd類への形態的な変化を予想させる。しかし、表6にみるように、底部破片では脚台をもたない平底が圧倒的に多く、脚台を有するものはわずかである。さらに、表中にみられる脚台の多くは台付鉢の可能性が高いものが多いため、甕の脚台と考えられるものはさらに少なくなり、この点において鹿児島県とは異なる。

A類について各遺構からの出土状況を見ると、Ab類が多い建物跡とAc類が多い建物跡がある。ただし、破片の場合両者の区別が難しいものがある。突帯を貼り付ける際に強く押しつけたため、対応する内面が彫らむものが存在し、一見Ac類に見えるが、突帯より上が内湾しないものが散見される。このほかにも口縁端部が薄くなる作りのものには、外面側を薄くしているものがあり、一見Ac類に見えるが、内面はAb類のように湾曲していないものもある。これらの観察からは、Aa類→Ab類（→突帯を強く押しつけるもの・外面を内湾状に薄くするもの）→Ac類→Ad類、への変化が考えられる。一方、B類の甕では、資料が少ないので詳細な分類は難しいが、頸部の突帯の有無で分けることができる。頸部や口縁部の形態でも分けることができると考えられるが、数量が

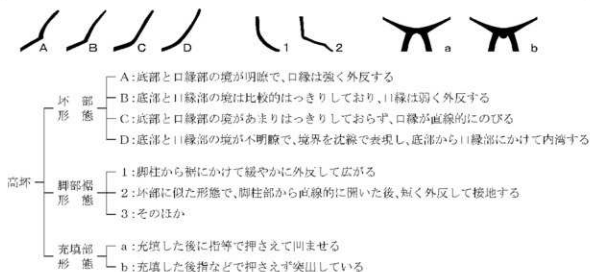
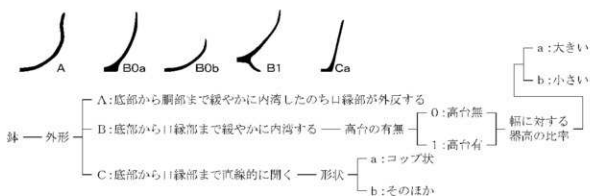
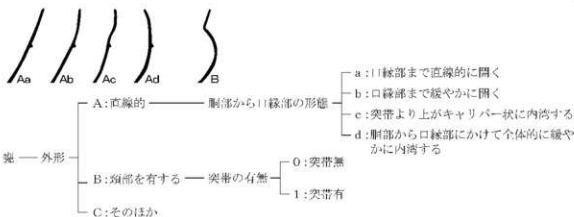


図75 平峰遺跡3次調査出土の土器分類図

表6 竪穴建物別にみた各土師器類型の出土状況

	32号 竪穴	33号 竪穴	34号 竪穴	35号 竪穴	36号 竪穴	37号 竪穴	38号 竪穴	39号 竪穴	40号 竪穴	41号 竪穴	42号 竪穴	43号 竪穴	44号 竪穴	45号 竪穴	47号 竪穴	合計	
甕	A	-	1	-	-	2	-	-	1	4	2	2	1	1	1	15	
	B	-	-	4	1	2	-	2	12	5	1	1	-	1	-	31	
	Be	2	1	2	1	-	-	-	2	-	-	1	-	-	-	9	
	Bo	-	1	2	1	2	-	-	1	-	-	1	-	-	-	6	
	C	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	1	-	4	
口縁 不明	a	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	3	
	b	-	2	1	2	2	1	2	-	2	3	-	-	-	1	16	
甗	Ab	3	-	1	1	-	-	4	1	3	1	1	2	-	-	16	
	Ab	-	7	2	1	11	1	3	7	5	1	4	10	1	5	67	
	Ac	1	2	8	1	7	3	1	2	1	1	-	3	-	8	38	
	Ad	-	3	5	-	4	1	-	-	1	1	-	1	1	1	18	
	B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	
B	BO	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	3	-	2	-	8	
	BI	-	-	1	-	1	-	1	3	-	2	1	1	1	1	11	
C	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	2		
ミニチュア	-	7	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1		
鉢	A	-	-	1	1	-	-	1	3	2	2	2	-	1	-	13	
	B	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
	BOa	1	1	1	1	1	-	3	-	1	2	-	1	1	-	11	
	BOb	1	9	10	1	7	2	2	-	8	1	4	10	1	3	60	
	BIa	-	-	-	-	3	-	-	-	1	-	2	-	-	-	6	
BIb	-	-	-	-	1	-	-	-	2	-	-	-	-	1	1	4	
	Ca	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	1	1	8	
CB	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2		
ミニチュア	-	2	1	1	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	6	
高坪	釉料散布	-	1(1)	1(1)	2(1)	-	-	-	-	-	8(1)	-	-	2(2)	-	24(19)	
	A	-	3	8	3	3	-	-	5	-	5	1	-	-	-	25	
	B	-	4	4	4	7	2	2	2	5	1	5	1	-	1	38	
	C	1	2	2	3	8	1	2	6	1	1	1	4	4	5	27	
	D	2	0	1	1	7	3	1	0	2	4	1	3	1	1	35	
E	2	1	8	3	21	9	2	11	11	10	6	7	3	2	1	103	
a	3	6	7	2	18	1	5	12	2	1	10	1	4	2	5	67	
b	1	3	11	3	20	6	1	11	10	8	7	4	1	2	2	91	
	2	1	-	2	-	3	1	-	1	4	-	1	-	2	-	15	
釉用口	-	1	2	-	6	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	14	
破片数	7	20	30	13	72	22	11	11	36	18	27	21	11	8	9	343	
釉料散布	-	9(3)	3(3)	1(1)	6(1)	3(0)	-	1(0)	21(8)	-	13(3)	5(3)	-	1(2)	-	73(24)	
丸帯・尖帯	-	2	2	1	2	4	-	1	1	-	-	-	-	-	-	13	
産部	甲産	1	6	12	9	21	7	3	16	17	7	12	18	3	2	2	138
	脚台	1	3	3	2	9	2	2	2	1	5	2	-	-	-	21	
産部		○	△	△	△	△	△	△	○	○	△	○	△	△	△	0	
そのほか		-	-	-	-	産 合 ・ 埋 入	産 合 ・ 埋 入	産 合 ・ 埋 入	-	-	-	-	産 合 ・ 埋 入	産 合 ・ 埋 入	産 合 ・ 埋 入	産 合 ・ 埋 入	-

※「産部」欄の括弧内は、高坪では埋部における内外両面(外面と内面)両面産部資料、鉢では口内面産部資料の数を示す

少ないため、ここでは分類基準にしていない。

このほか甕には貼付突帯が付けられ、その上から刻みが施されるが、そのバリエーションは豊富であり、位置も多様である。特に刻目の形状は各個体で異なり、同一個体の中でも部分によって間隔や雰囲気異なる場合があり分類を難しくしている。貼付突帯と粘土紐接合痕跡以外に目立った文様の要素はないが、33号・39号竪穴建物跡において、突帯部の直上部に3本の沈線で山形状の文様を施した破片が出土している。

以上のほか、鉢状の形態のもの(119)を甕とした。本遺跡において鉢は多く出土しているが、これらの中に突帯を有するものが存在していないことと、甕と同様に粘土紐接合痕が観察されることを根拠とした。また、2点ミニチュアの可能性があるものが出土している。一つは小さい破片な

がら、内外面に粘土紐の積み上げ痕跡をそのまま残すもので、甕A類のミニチュアの可能性がある。もう一つは平底の底部小片がある。甕の把手の可能性のある小さな土製品(120)が出土しているが、甕自体は出土していない。

鉢は定義が難しく、本遺跡では形態や製作技法などからの明確な区別が困難であるため、ほかの報告書などでは椀や杯に分類されている形態も鉢として扱った。鉢の形態はおもに外形によって分類ができ、胴部から口縁部にかけて緩やかに内湾した後、口縁部付近が外反するもの(鉢A類)、底部から口縁部にかけて緩やかに内湾するもの(鉢B類)、底部から口縁部まで直線的なもの(鉢C類)に分けることができる。A類はほかの形態に比べると大型のものが多く、大型のものは外反する範囲が広い。B類はさらに細かく分けることができ、それぞれ脚台が付かないもの(0類)と脚台が付くもの(1類)があり、さらに径に対する鉢部の深さの比率が大きいの(a類)と比率が小さいもの(b類)が存在する。B0a類は比較的厚い底部をもち、粘土紐接合痕跡を残すものがあるなど、他の鉢に比べるとやや粗雑な作りのものが目立つ。B0b類は坏あるいは椀として分類されることもある形態であるが、径に対する深さの比率が漸移的である。深いものは口縁部が強く内湾し、浅いものは口縁が開く傾向にある。1a類と1b類も同様に区分が難しい。

鉢については、ミニチュア品と考えられる逆三角形を呈するものが33号~36号・39号竪穴建物跡から出土している。遺構外からも数点出土しているが、これらはG13Gr付近に散布している。

このほか、3次調査では2点のみであるが、須恵器坏蓋を模倣したと考えられる資料が出土している。36号竪穴建物跡出土の模倣坏蓋(117)の重量感是非常に軽く、その点でもほかの土器とは区別される。作日も天井部のケズリなど模倣の意図を明らかに読み取ることができる。もう1点は図示できなかったが、47号竪穴建物跡から出土している(図版38-385)。ただし、口縁部が明瞭に屈曲して直立する以外は、鉢に類似しており、鉢の可能性もある。

高坏は、調査において非常に多く出土しているが、坏部と脚部が接合したものは少なく、全体の形状が明らかな資料は少ない。表6の破片数では坏部と脚部合わせて300点以上となっているが、坏部片が135点(A~D類の合計)、脚部片が190点(1・2類の合計)となり、少なくとも190点以上の個体数となる。坏部に対して、脚部の破片が多いのが特徴である。本報告では坏部と脚部、それと坏底充填部の形態でそれぞれ分けて分類を行っている。

坏部の形態については、外形によって分類ができる。底部と口縁部(体部)の境が明瞭(底部が横にのび、口縁部の傾きと明らかに異なる)で、口縁は強く外反するもの(高坏A類)、底部と口縁部の境は比較的明らか(底部の傾斜がやや上向きだが、口縁部の傾きとは異なる)で、口縁が外反するもの(高坏B類)、底部と口縁部の境があまりはっきりしておらず、口縁がやや直線的にのびるもの(高坏C類)、底部と口縁部の境が不明瞭で、底部から口縁部にかけて内湾するもの(高坏D類)などがある。A~C類については、底部と口縁部の接合部が段状に屈曲するものを含む。これは、同一個体の中でも段を形成する部分と段を持たない部分が存在する個体があり、段の有無による区分が難しいためである。D類の中には底部と口縁部の境を凹みで表現するものや、口縁部がやや外反するものも含む。しかし、これらの多くは、外面における凹みが内面における底部と口縁部の境界とは対応しておらず、上にずれているものがみられる。同様に、D類で口縁部が外反するものも、内面の区別とはややずれている。坏部におけるこのような形態の差異は通常、底部と口

縁部の境の退化と、坏底部の丸底化として解釈でき、A類→B類→C類→D類といった型式変化として捉えられるような区分である。D類については別系統の可能性があるが、表6にみるように、A類・B類とD類が相伴することは稀であるため、およそこの流れは妥当であろう。

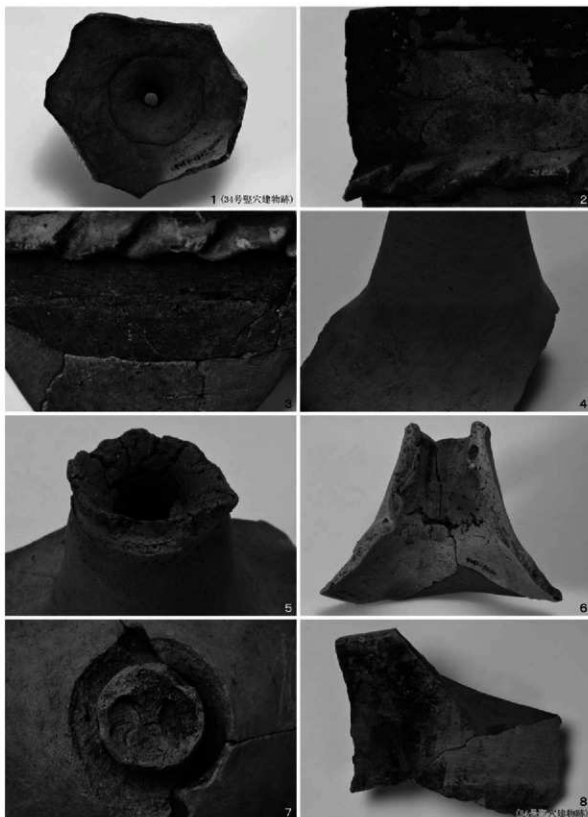
一方、脚部形態では、主に裾の形態で分類しており、脚柱から裾にかけて滑らかに外反するもの（1類）と裾部が坏部状の形態に屈曲するもの（2類）がある。なお、脚柱部のみ破片も多いが、裾部との境界に明らかな稜をもつものは2類としている。また、柱部形態も多様であり、さらに分類は可能である。裾が屈曲する2類については、裾端部が高く緩やかに外反するものから、低く外反が小さいもの、端部が内湾気味になるものがある。調整の様子などをみると、前者から後者への変化した可能性がある。1類と2類については、一部を除き各遺構から同数に近い量が出土している。坏底充填部の形態については、充填後に脚側から押して、脚柱内面で凹ませるもの（a類）と、凹ませず半球状を呈するもの（b類）がある。図示した坏部ではb類も一定数みられたが、全体からするとb類は非常に少ない。

#### 製作技法について

平峰遺跡における土器の製作技法上の大きな特徴として、甕や鉢、一部の高坏の坏部外面において粘土紐の接合痕跡が明瞭に残る点をあげることができる。接合痕跡を残すものは、壺頸部から胴部の内面においても観察される。ただし、甕や鉢の外面における痕跡が沈線状に残るのに対して、壺の内面は段として残っている。壺の内面には指頭圧痕が残ることや、接合痕跡を残さないものもあるため、物理的に残さざるをえないというよりも技法上の特徴といえることができる。高坏脚部でも、34号竪穴建物跡出土1類の1点（未図化）のみ、内面に壺に類似した接合痕跡をもつものがある（図76-1）。また、甕では、粘土紐の始点と終点の痕跡が残るものもある（図76-2）。これらの痕跡が残る面と反対の面は、甕では（板）ナデ、壺ではヘラミガキによって平滑に整えられている。

甕は外面と内面の状況が対照的であると同時に、外面の接合痕跡が特徴的である。突帯より上部の接合痕跡をそのまま残し、突帯よりも下部では数条を残すものが多い。突帯より下部は、底部から上部まで連続して接合痕跡をナデ消すものがみられ、粘土紐を接合するたびにナデ消しているわけではない。また、部分によっては粘土が水分を多く含むためか、他の部分と比べてナデの凹凸が著しいものがある。これらの甕は、一個体中の接合面において擬口縁状を呈する面が2～3カ所あるため、一度で作り上げているわけではない。したがって、ある程度作り上げた段階で、下部の接合痕跡をナデ消すために土器に水を含ませている可能性がある。また、局所的に接合痕跡を棒状工具でナデ消すもの（図76-3）があり、接合痕跡の条数を調節している可能性があり、何らかの規範が存在したことをうかがわせる。型式変化においてよくみられるような、接合痕跡が退化して沈線化した個体が存在する可能性を想定して観察を行ったが、みつめることはできなかった。

粘土紐接合痕と並んで特徴的な製作技法上の特徴に、甕と壺における貼付突帯がある。甕では口縁部下、壺では頸部においてみることができる。また、布をあてた棒あるいは板状工具による刻みを施す点でも共通している。異なる点としては、突帯の貼り付け方をあげることができる。壺の突帯の上下は丁寧にナデられ、しっかりと貼り付けられている。これに対して、甕の突帯上縁はハケメあるいは強いナデの痕跡がみられるようにしっかりと貼り付けるのを意識しているものの、下縁



- 1 高坏内面における粘土接合の段が残る例(391)(実測図未掲載) 2 惣外面における粘土紐端部がわかる接合痕跡例(88)  
 3 惣外面における粘土接合線の局所的ナデ消し例(88) 4 高坏脚部外面におけるヘラミガキのナデ消し例(232)  
 5 高坏脚柱部上端における円筒拡張による亀裂例(230) 6 高坏脚部内面における円筒拡張による亀裂例(241)  
 7 高坏坏底充填部外面に残る爪痕例(185) 8 高坏坏部外面にのこる吹きこぼれ痕例(390)(実測図未掲載)

図76 平峰遺跡3次調査出土の土師器にみる調整技法などの諸例



は特に貼り付けの強度を上げるための調整を行っていないものが多い。そのためか、甕の突帯の中には、焼成前に剥がれ落ちたと思われるものもあり、突帯剥落部の焼成が周囲と変わらない個体が存在する。また、剥落部が煤に覆われているものもある。鉢や高坏において補修を行っていることは対称的である。突帯上の刻みの施し方は様々である。刻みの間隔が一定のものもあれば、同一個体の中でも刻みの間隔がばらばらなものもある。

このほかの製作技法上の特徴としては、粘土紐接合部が擬口縁状を呈するものが多くみられる点をあげることができる。甕や二重口縁壺の口縁部、台付鉢の脚部などでみられるが、とくに高坏において多い。甕で擬口縁状の接合部が確認できる個体では、数段おきに擬口縁状の接合部がみられるため、数段ずつ粘土紐の積み上げと乾燥が交互に繰り返されていたことがわかる。また、貼付突帯部も本体の乾燥が進んだ段階で貼付が行われており、擬口縁状の接合部を呈する。二重口縁壺は高坏坏部と同様で、一次口縁と二次口縁の接合部が擬口縁状を呈する。台付鉢は底部に脚台を貼り付ける箇所や、円盤状にやや突出した底部の外縁に脚を貼り付ける箇所においてみられる。高坏については、脚柱部上端、坏底部と口縁部の接合部、坏底充填部において、擬口縁状の接合部を確認することができる。また、高坏2類については脚柱と裾部との接合部でも擬口縁状を呈するものが散見される。この中で、坏底部と口縁部の接合部分は高い割合で擬口縁状を呈する。中には、口縁部接合前の坏底部に赤色顔料を内面～外面に塗布した後、口縁部を作り上げたため、赤色顔料が接合部の内側まで続いているもの(巻頭図版6-1)もある。

高坏や鉢においては、ヘラミガキを施した後にその一部あるいは全体をナデ消す、あるいはミガキの光沢を残したままヘラミガキのみをナデ消す(本報告では「ナデ様ミガキ」と表現しているものの多くがこれに該当する)ものがみられる。特に高坏においては脚柱部～裾部外面や坏口縁部において、縦方向あるいは斜方向の密なヘラミガキを施した後、このナデ消し技法が用いられている(図76-4)。高坏におけるこのナデ消し技法はある程度パターン化している。脚柱部においては、脚柱部上部～上半のみ、脚柱部上部～上半+裾部下半、脚柱部全体、脚部全体の4種類がみられる。数は少ないながら、脚柱部の上下をナデ消し中央のみヘラミガキを残しているものがある。一方、坏部については、口唇部のみ、口唇部+口縁部の接合部付近の2種類が多く、これらは内外面の対応した位置にナデ消しが観察できる。このほか、口唇部外面+口縁部内面全体や、坏底部外面中央付近にナデ消しが行われているものもある。坏底部外面や柱部上部～上半については、坏柱部～坏底部が残存しているものの場合、柱部から坏底部まで連続してナデ消しているものが存在するため、接合痕跡を消す目的があったと考えられる。本報告では形態との対応関係までは言及できないが、坏部C類やD類などにナデ消しが多いような印象をうける。おそらく、接合痕跡を消す目的から装飾的な目的へと変化していったと考えられる。中には、ナデ消しの際に化粧土と思われる薄く水で溶いた粘土をつけてナデを行っているものもある。なお、高坏におけるこれらのヘラミガキをナデ消す技法は、赤色顔料を塗布したものは対象としていないようで、顔料を塗布したものにほとんどみることはいできない。

一方、鉢については、数は多くないが、口唇部内外面、あるいは口唇部外面をナデ消すものがある。これらのナデ消しを行う場合、口唇部付近が内湾しており、整形の流れの中に位置づけられる。

このようなヘラミガキをナデ消すもののほかに、ヘラミガキを暗文状に施すものがある。上で述

べた、高環において縦方向や斜方向の連続したヘラミガキを施すものもその可能性がある。高環の中には、ヘラミガキの間隔をより離して等間隔で縦方向にヘラミガキを施すものがあり、これらはより暗文的な要素といえることができる。このような暗文的なヘラミガキとしては高環のほか、わずかではあるが甕や鉢でもみることができ（巻頭図版6-2・3）。

高環については、製作技法上の特徴がほかにもみとめられる。脚柱部の整形技法についてもその一つで、脚柱内面にしぼり痕や、縦方向・横方向への亀裂が入ったものなどが存在する。しぼり痕をもつものは少ないが、脚柱に対して、真っ直ぐなものや、ややねじったように斜行するものが存在する。これらは脚柱の素材となる円筒部をしぼる際のしぼり方の違いに起因すると考えられる。亀裂が入るものについては、脚柱上部（図76-5）、脚柱部内面、脚柱と裾部の境に亀裂（図76-6）がみとめられる。前二者は縦方向、後二者は横方向への亀裂が認められる。しぼり痕をもつものとは逆に、円筒部を開いたことに起因すると考えられる。

坯底充填部<sup>2)</sup>（脚柱充填部）の充填方法については、脚を作った後、底が抜けた状態の坯部を作り、最終段階で中央部に粘土を充填しているものが多い。脚柱充填後に坯部を整形しているものもあるが、少ない。充填部の脚柱側の面は多くが凹んでいるが、少数ながら突出したままのものもある。突出部は半球上を呈し、多くは表面が平滑となっている。充填した後の整形は難しいと考えられ、柱部へ充填する前にあらかじめ整形されていた可能性が高い。一方、充填した後凹ませるものの中には、鹿児島県の水野原遺跡で図示〔(財)元興寺文化財研究所2000;Fig.42〕されているような「円錐塊」と考えられる垂下した粘土が柱部内面に付着している様子を見ることができ、多くは粘土がはみ出した状況はみられない。以上のほかに、爪の痕跡と思われる三日月状の刺突痕を残すもの（図76-7）や、工具の刺突痕を残すものがある。爪状の刺突痕は担当者の指では小指に該当する程度の大きさである。高環の形態・調整方法のバリエーションは豊富で、遺跡外から持ち込まれたものも多く存在していると考えられる。

#### 胎土と含有鉱物について

平峰遺跡出土の土器に含まれる主な含有鉱物には、黒色で光沢を持った角閃石あるいは輝石、無色透明から光沢のある白色まで幅のある石英があり、ほとんどの土器に含まれている。石英については極微細なものが土器全体に含まれているものもあり、土器全体が細かく光を反射して光沢があるようにみえる。この他に特徴的なものとして、白からやや赤みを帯びた白色で多孔質の軽石、こすると赤くにじんだようになる軟質の赤色粒子、長さ5mm程度の鉄錆様の赤色物質などがある。また、分類はできないが、3～5mm程度の赤褐色や青灰色を呈する礫がみられる。弥生土器には金雲母が含まれるものがあるが、土師器では金雲母を含む物はほとんどない。

以上の含有鉱物の中において、赤い軟質の赤色粒子は、平峰遺跡から出土している軽石の孔に詰まっている酸化鉄（前章を参照）に類似している。遺跡からは加工がみられない数多くの軽石が出土しているが、その中には赤褐色の泥状物質が孔に詰まったものが存在する。調査時、建物の床面などから赤色顔料の粒や小塊が検出されたため、軽石に詰まったこれらの物質が原料として集められ、遺跡内で赤色顔料を精製していたのではないかと予想した。赤色顔料については1次調査時に分析がなされており、ベンガラに多くみられるパイプ状粒子が確認されている。しかし、今回の分析で、軽石に詰まった物質は酸化鉄ではあるもののパイプ状粒子は確認されていない

め、遺跡内で使用された赤色顔料の原料ではないことが明らかとなった。調査で出土した軽石には様々な大きさのものが存在するが、このような赤い酸化鉄が詰まった軽石は大きさが数cm程度に収まる小さなものが多い。土器の胎土に軽石が含まれるものもあり、赤～橙色の発色を意識して、このような酸化鉄が詰まった軽石を細かく砕いて土器の胎土混ぜている可能性を指摘しておく。

軟質の赤色粒子にみるような色に対する意識、あるいは“こだわり”は、一つの個体の中で色調が異なる複数の粘土を使用しているところからも読み取ることができる。火のまわり具合など焼成時の状況に遺存している可能性もあり判断は難しいものの、明らかなものとして43号竪穴建物跡出土の壺(49)(巻頭図版5-3)がある。この壺は内面に粘土紐の接合痕跡が明瞭に観察されるが、胴部中段の1段のみ黄橙色の発色が強い。その色調が異なる粘土は、重なった上段の粘土の下まで続いており、焼成状況に由来する色調の変化ではないことは確実である。ただし、やはり表面のみ黄橙色に発色しており、内面はほかの部分と大きくは変わらない。このような黄橙色の発色が強い例は、その他にも鉢や高坏など幅広い器種において確認することができるが、壺ではおもに内面に、ほかでは外面において観察される。

#### 用途について

壺については、通常貯蔵容器として位置づけられており、使用痕跡を確認できるものはほとんどない。倒卵状を呈する大型品と扁平球胴状を呈する小型品がそれぞれ供伴しているため、それぞれ機能的にセットとして使用されていた可能性がある。その中で使用に関係する痕跡がみられる興味深いものとして、34号竪穴建物跡と43号竪穴建物跡から出土した壺(44)(巻頭図版8-1・2)がある。いずれも壺の口縁部上半が二次被熱を受けている。ただし、被熱していない部分との境が明瞭であり、熱を受けないように何らかの処置を施していた可能性がある。34号竪穴建物跡から出土した壺は、破片の断面をみると、内面の被熱が顕著であり、先端部付近では内外面が被熱している。内面の剥離も顕著に観察される。一方、43号竪穴建物跡出土例は、被熱したと思われる部分は内外面ともに灰色に近い還元色を呈している。34号竪穴建物跡からは高坏脚部転用羽口や専用の可能性がある羽口が出土していることから、これらの壺も鍛冶作業に伴って使用された可能性がある。ほかにも口縁片に鉄滓が付着したもの(巻頭図版8-3)がある。

同じ宮崎県内のえびの市内小野遺跡SK-76では、鉄滓が付着した壺が出土しており、報告書では「埴輪転用壺」とされている(えびの市教育委員会2000)。平峰遺跡1・2次調査の科学分析では、鉄滓付着の土器や被熱土器の分析が行われており(宮崎県教育委員会2012)、その報告では土器片を鍛冶炉材として使用したことが指摘されている。ただし、3次調査で出土した遺物のみを限りでは、炉材に使用したと考えられるような著しく被熱した土器片は少なく、積極的に利用しているとはいえない。34号竪穴建物跡出土の壺は、完周する口縁全体が被熱しているため、破片状態での被熱は考えられない。このように炉材とは考えられない例があることも含めると、炉材以外にも使用目的があった考えられる。

甕については、そのほとんどのものについて外面に煤が付着していたり、胴部内面下半にコゲ状の付着物が観察されるだけでなく、吹きこぼれと考えられる煤がはがれ落ちた痕跡がみられるので、煮炊きに使用されたことは確かであろう。

鉢は、A類を除くと、使用の痕跡を残したものがほとんどないため、その用途は明らかでない

が、一般的には日常什器としての利用が考えられる。大型のA類については、外面に煤・コゲや吹きこぼれ痕が認められるため、甕と同様に煮炊きに使用されていたことがわかる。一方、B0b類については、二次被熱を受けたと考えられる赤く変色したものがみられる。什器としての利用が一般的と考えられるが、このような被熱状況は、什器としての用途から逸脱していると考えられる。内面を中心として被熱している状況などから、高温に熱せられた何かを入れたものと考えられる。

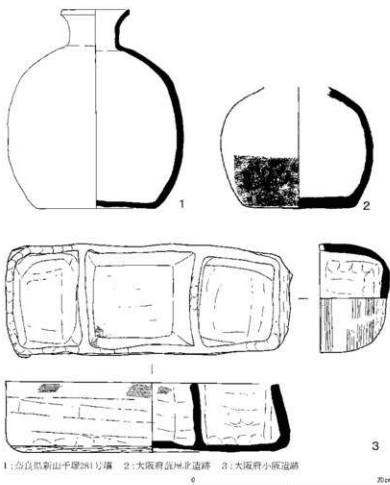
高坏は通常供膳具として位置づけられているが、調査で出土した高坏の中には、被熱したものや坏部外面に黒色の光沢あるコゲ状の付着物がみとめられるものが存在する。吹きこぼれ痕に類似する痕跡を残すもの（図76-8）も存在しているが、被熱の痕跡は鉢ほど強くはない。かなり広い用途に使用されたようである。

平峰遺跡において興味深いのは、高坏1類と2類の土器が多くの竪穴建物跡で共伴している点である。1軒の中でほぼ同数の破片が出土しているものが多い。一般的に製作者や製作地域の違いと考えられる両者が一般的に供伴するとすれば、それはセット関係として捉えることができるのかも知れない。このほか、壺と同様に高坏においても、鉄滓が付着したものが存在する（巻頭図版9-1）。

一方、供膳器としての高坏だけでなく、羽口として脚部を転用しており、本遺跡の特徴でもある。高坏の出土数は多いが、坏部に対する脚部の数が多く、羽口としての利用を意識している可能性をうかがわせるが、実際に使用されたものは多くない。また、1次・2次調査では、転用羽口のほかに専用と考えられる羽口片も報告されており、両者の共存関係のもつ意味は注目される。

## （2）非在地系の土器について

多くの土器は在地の土器と考えられるが、少ないながら非在地系と考えられる土器・須恵器が出土している。非在地系と考えられるものは、土師器では仕切付角鉢、須恵器では平底瓶がある。平底瓶は、44号竪穴建物跡出土品と似た形態のものが、奈良県新沢千塚281号（奈良県立橿原考古学研究所1981）や大阪府葦屋北遺跡（大阪府教育委員会2010）（図77-1・2）にあり、百済系の土器とされている。この2遺跡のほか、九州内では、大分県日田市金田遺跡（日田市教育委員会2009）



1:奈良県新山千塚281号墳 2:大阪府葦屋北遺跡 3:大阪府小阪遺跡

図77 平底瓶・仕切付角鉢の諸例（各報告書より大きさをそえて転載）

で、土師質で肩部より上を欠失するものの、平底瓶の可能性のあるものが出土している<sup>23</sup>。本遺跡出土品は口縁部を一部欠損しているが、観察の限りでは、意図的に打ち欠いている可能性が高い。平底瓶については、寺井誠氏により、底部径と胴部径の比率に着目した編年が行われている（財団法人大阪市文化財協会2004）。氏によれば、「体部の最大径が中ほどにあり、底部径が最大径の7割程度の大きさ」の「A類」が5世紀後半～6世紀前葉、「体部全体が丸みを帯び、最大径は中程からやや上にあり、底部は最大径の5～6割程度」の「B類」が6世紀中葉～末、「最大径が上方にあり、最大径以下が丸みがなく、直線的に下りる」の「C類」が7世紀前～中葉に位置づけられている（前掲書:176-177）。本遺跡出土の平底瓶は、体部の張りが弱く、底部径は最大径の8割ほどあり、A類に分類できると考えられ、5世紀後半～6世紀前葉頃に位置づけられる。

一方、仕切付角鉢は、管見の限りでは大阪府小阪遺跡G地区河川8上層で出土している（大阪府教育委員会・大阪文化財センター1992）（図77-3）のみである。小阪遺跡出土例は須恵質である点と全体にやや丸みを帯びている点で雰囲気は異なっている。平峰遺跡では1次から3次調査を通して3個体以上の仕切付角鉢が出土している。胎土は比較的精良なものを使用しており、一見搬入品の可能性をうかがわせる。しかし、よく観察すると、軟質の赤色粒子と考えられるものが含まれており、在地の土で作られたものである可能性が高い。16号・36号竪穴建物跡出土品の胎土はよく似ており、21号竪穴建物跡出土の2個体は石英・角閃石が多く含まれ、前二者に比べると若干胎土が粗い。形態においても、16号・36号竪穴建物跡出土品は仕切りが2つ付くものに対して、21号竪穴建物跡出土品は仕切りが1つとなっている。時期的な比定は、他に類例がないため難しい。

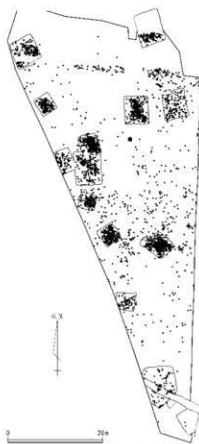


図78 E調査区の点あげ遺物の分布

### (3) 住居廃絶時における土器の廃棄行為について

平峰遺跡では、竪穴建物跡の検出面付近や、埋土中から多量の土器が出土している。埋土の上層や検出面付近での出土も多く、住居の埋没過程における流れ込みの可能性もある。しかし、その量と特定の層に集中的にみられる堆積状況だけでなく、図78にみるように、床面からの出土が少ないにも関わらずそのほとんどが竪穴建物跡に集中する状況を考慮すると、意図的な廃棄と考えた方がよい。仮に周辺からの流れ込みであるとすれば、その供給を満たす程度の土器が周辺に散布していなければならないはずであるが、そのような状況はみられない。以上のような状況や土層の堆積状況などから、建物は廃絶に伴い埋められ、ある程度埋まった段階で土器の廃棄が行われたと考えられる。このような竪穴建物跡の検出面あるいは埋土からの土器の出土状況は、建物廃絶に伴う祭祀行為の最終的な姿を想像させる。考古学における祭祀とは、十分な定義はされておらず、報告書中でも祭祀に関する定義あるいは意味づけが十分に行われているとはいえない。非日常的にみえるよくわからないものに対して「祭祀」という言葉が使用されてきたように見受け

られる。

人類学の成果などから、端的に祭祀を表現すれば、「一定の反復性（回帰性、定型性）」、「比喩的秩序性（比喩的な論理性に基づく秩序）性」、「比喩的な秩序が要請する意味的な関連づけのネットワーク」を備えた「規則性（形式性、パターン性）」（今村仁・今村真2007:49）が観察される行為と考えられる。このほか、サリー F、ムーアとバーバラ G、マイヤー-ホフは、儀礼の特徴として次の6つの点を挙げている（Moore and Myerhoff 1977:7-8）。

1. 契機、内容、形態のいずれか、あるいはこれらの組み合わせが「反復（repetition）」される。
2. 無意識の（spontaneous）行為ではなく、演劇のような意識的「行為（acting）」を伴う。
3. 特別なものの使用、あるいは普通のものの特別な使用といったような、「特別な」行動や様式化（“special” behavior or stylization）」を伴う。
4. 場所や時間などの秩序が存在する。
5. シンボルの巧みな操作と感覚的な刺激を通した「（記憶や感情を）喚起する表象的スタイル（evocative presentational style）」をもつ。
6. 社会的なメッセージを包含する「集合的次元」に属する。

以上のような人類学における研究からは、「非日常的」であるだけでなく、「反復性」と「規則性」がみられる行為が祭祀・儀礼として定義できる。細かな差異はあるが、建物がある程度埋まった段階という時間的共通性、多量の土器（+a）を投棄しているという物質的共通性がみられる。また、多くの建物跡でみられる点は、反復性としてとらえられる。これらのことから、土器はおそらく祭祀・儀礼的な行為を行った後に、廃棄されたものであると考えられる。ところで、反復性・規則性は、その祭祀・儀礼に関係する集団の規模によって出現頻度は異なる。国家・クニ・地域共同体・集落・家族といったレベルが考えられるが、各建物跡でみられることから、家族～1集落程度を単位とする儀礼・祭祀である。

遺構の検出面から埋土にかけて出土する遺物はほぼ土器で占められるが、竪穴建物跡によって土器以外の構成はやや異なっている。特に有孔円板や管玉などは1軒につき1点、43号竪穴建物跡では小型鉄鋌が3枚重ねて出土しており、各竪穴建物跡で特徴がある。このように遺物の構成内容に微妙な差異が存在するのは、各建物を利用した人間の社会的性格を反映したものであると考えられる。34号竪穴建物跡の3次調査部分では、一部分の調査であり土器の出土こそ少なかったが、検出面から埋土にかけて鍛造剥片や粒状滓が出土しており、この遺構が鍛造に関連する建物であったことに由来する可能性がある。

#### （4）土器からみた竪穴建物跡の変遷について

1次から3次調査を通して多くの土器が出土している。3次調査分も出土状況は十分に検討できなかったが、それ以上に1次・2次調査分についてはその位置づけがはっきりしない。3次調査の状況を見ると、既に述べたように、検出面から埋土付近から多量の土器が出土しており、時間的な位置づけを難しくしているが、この中では甕と高坏が形態的なバリエーションが多く、編年作業に適していると考えられる。甕は口縁部が外反するものではなく、比較的直線的のびるものから、突帯より上部で内湾するものまでを含むが、全体が内湾するものは少ない。ただし、底部は多くが平

底であり、いわゆる「成川式土器」の甕が脚台を有するのとは異なる。この点については都城～えびの地域といった「成川式土器」分布圏の北部における独自の要素であると考えられる。中村直子氏の研究（中村2002）を参照すれば、これらの甕は中村編年3～4期に位置づけられる。中村4期は6世紀中頃～7世紀末までと幅広いが、本遺跡出土土器は5世紀中頃～6世紀中頃の範囲におさまるものと考えられる。続く第4節でみる、高坏脚部を転用した羽口が出土する遺構の多くが5世紀に多いことも一致する。しかし、土器の特殊な出土状況と関連して、各個体のバリエーションが多く、各遺構の時期の比定を難しくしている。

この中で、須恵器が出土している遺構は定点をおさえる上で有効と考えられる。33号竪穴建物跡出土の甕および40号竪穴建物跡出土の短頸壺は5世紀後半、44号竪穴建物跡は5世紀後半～6世紀前葉頃に位置づけられる。これと表6における各土師器の出土傾向をみると、33号・40号竪穴建物跡ともに甕はAb類、高坏がAa・Ab類が中心である。これと同様の傾向を持つ建物跡は、35号・42号建物跡の2軒である。これらの4軒の中で、35号・42号竪穴建物跡は遺物の出土状況から2つの時期の遺物を含むと考えられ、a類のものは古い時期に位置づけられる可能性がある。

次に、44号竪穴建物跡は、土師器甕は明らかでないが、高坏はAc類が中心であり、33号・35号・40号・42号竪穴建物跡よりも新しいと考えられる。同様にAc類が中心となる遺構は、36号・39号・43号竪穴建物跡があるが、D類も同程度出土していることから、やや新しく位置づけられる可能性がある。ところで、44号竪穴建物跡を除く3軒は、いずれも検出面の埋土から多量の土器が出土している遺構であり、39号・43号竪穴建物跡は二次貼床をもつ点でも共通している。

遺物が少ない46号・48号竪穴建物跡を除く7軒のうち、37号・45号竪穴建物跡は甕Ac類が中心であり、これまでみてきた8軒の建物跡より新しいと考えられる。37号竪穴建物跡については、36号竪穴建物跡出土遺物との接合関係からも、新しく位置づけられる。また、41号竪穴建物跡は高坏D類が中心となっており、37号・45号建物跡と同じく新しいと考えられる。34号竪穴建物跡は、甕はAc類・Ad類が多いのに対して、高坏はA類が多くこれまでの編年に当てはまらない。ただし、高坏2類は、裾端部が内湾するものや直線的に開くものがみられるため、新しい要素といえる。また、鉢外面に粘土紐接合痕跡を残すB0bは5世紀後葉～6世紀前葉とした建物跡でみられるため、高坏A類とは合わず、全体として新しい要素が多い。甕や高坏2類の様相から最も新しいグループに入ると考えられる。34号竪穴建物跡と同様に、32号・47号竪穴建物跡の高坏2類は裾端部の屈曲が弱く直線的なものや低平ものがみられるため、新しく位置づけることができる。38号竪穴建物跡は決め手に欠けるが、39号・40号竪穴建物跡出土の甕B類に比べると、頸部の屈曲が弱いと新しいと考えられる。

遺物がほとんど出土していない46号・48号竪穴建物跡は、時期比定がむずかしいが、1次・2次調査では平峰Ⅱ期までは貼床がほとんどをしめるが、Ⅲ期になると貼床を施さない傾向にあるため、Ⅲ期となる可能性がある。

以上をまとめると、33号・35号・40号・42号竪穴建物跡が5世紀後半、36号・39号・43号・44号竪穴建物跡が5世紀後葉～6世紀前葉、残りの32号・34号・37号・38号・41号・45号～48号建物跡が6世紀前葉～中葉に位置づけられる。6世紀前葉～中葉の遺構は全体的に遺物が少なくなる傾向となった。このことは、検出面・埋土に投棄された土器がそこに住み続けた人々によって行わ

れたことを示しているといえる。なお、ここでの建物跡の時期は、埋土中への土器の投棄を考慮して、建物跡の使用時期ではなく、廃絶時期を主に考えている。

### 第3節 有孔円板と高坏脚部転用羽口について

#### (1) 有孔円板と滑石製管玉について

##### 平峰遺跡における有孔円板と滑石製管玉の様相

平峰遺跡における有孔円板と滑石製管玉は、有孔円板が33号・36号・39号堅穴建物跡、滑石製管玉が41号堅穴建物跡から出土している。管玉はこのほか頁岩製のものが42号堅穴建物跡から出土している。また、滑石製および蛇紋岩製白玉が36号堅穴建物跡の炉内埋土から出土している。時期的関係は、33号（緑色凝灰岩製有孔円板）・42号（頁岩製管玉）→39号（滑石製管玉）・（あるいは→）36号建物（頁岩製有孔円板）→41号（滑石製管玉）となり、同一製品で同一時期のものはない。なお建物の大きさでみると、中・大型の建物から有孔円板が、小型の建物から管玉が出土しており、区別がみられる。

滑石製品の白玉は宮崎県内の墳墓などでも散見されるが、有孔円板は管見の限り県内では初めての例であり、滑石製の管玉は宮崎市山崎上ノ原第2遺跡例に続いて2例目となる。九州地域におけるいわゆる滑石製模造品は、「筑後川以北、福岡県域に分布が偏っている」（福本2005:144）ことが指摘されている。筑後川以南では出土数・遺跡は減少し、鹿児島や宮崎などの九州南部地域ではいわゆる滑石製模造品が少なく、2005年埋蔵文化財研究会による集成資料（第54回埋蔵文化財研究会事務局2005）段階では有孔円板は両県では確認されていない。

以下では、有孔円板と滑石製管玉について若干の検討を行うが、副葬品は検討対象外とする。墳墓に納められる副葬品としての秩序と集落内で使用に際して規制される秩序が同一であるかは疑問であるため、少なくとも集落という同じ基準で比較できる集落出土資料を対象を限る。また、出土数が少ないという共通点がみられる熊本県・大分県以南を対象とする。

##### 九州中・南部地域における有孔円板と滑石製管玉出土遺跡と遺構

九州中・南部地域における有孔円板や滑石製管玉が出土している遺跡は、管見の限り表7および図79のように15遺跡であり、依然として少ない<sup>(4)</sup>。これらの遺跡を時期的にみると、大分県都野原田遺跡を除くと、そのほとんどは、5世紀から6世紀頃の遺跡である。地域的には、九州中部地域では平野や盆地・河川流域単位にまとまる傾向にあるが、南部地域では散在している。内容的にみると、異質であるのは熊本県域の遺跡である。玉名市上小田宮の前遺跡（熊本県教育位階2010）や兩迫間日渡遺跡（玉名市教育委員会2009）では多量のいわゆる祭祀遺物が出土しており、詳細な内容は不明であるが、熊本市上高橋高田遺跡（熊本市教育委員会2005）においても多量の祭祀遺物とともに有孔円板が出土したとされる。海浜部に近い位置と、遺物の量・出土状況は、青銅器や鉄製品が欠落する点からランク的な開きはあるものの、沖の島などにみるような海上交通に伴う上位クラスの祭祀の一種であると考えられる。熊本県域以外では、大分県日田市荻鶴遺跡において祭祀遺構とされる遺構から出土している以外は、鹿児島県池之頭遺跡の1例を除き、すべて堅穴建物跡からの出土である。また、有孔円板と滑石製管玉の出土状況を見ると、有孔円板と管玉の両者が出土している遺跡はほとんどない。このような中で、1遺跡の中で有孔円板が3点出土している点や、



表7 九州中・南部地域における有孔円板・滑石製管玉出土遺構一覧

所在地	遺跡名	滑石製品出土遺構	時期	日 玉	管 玉	有孔 円板	その他	その他遺物	備考	文献
<b>大分県</b>										
大分市	下郡道路跡-	003SH006 (竪穴建物)	5C前	-	-	2	勾1	シナブ上部,土製勾玉 土製管玉,玉製管玉1,滑 石製管玉1	他に紀成呂製石芥1,石 鏝1,勾玉1,点は未成品	大分市教委2009
		003SH005 (竪穴建物)	不明	1	-	-	-	砥石1		
大分市	藤田市遺跡	SD9(溝)	4C	-	-	-	勾1	-		
		SH6(竪穴建物)	5C後	11	-	-	-	結晶片岩製砥石1		
		SH4(竪穴建物)	5C末	-	-	-	紡1	-		
		SH8(竪穴建物)	5C末	3	-	-	-	シナブ上部		
		SH23(竪穴建物)	5C末	2	-	-	紡1	シナブ上部		大分県教委1994
		SH9(竪穴建物)	5C末-6C 初	3	-	-	-	材質不明(赤褐色)小 玉15		
大分市	関遺跡	SR1(道路)	5C- 7C前	-	-	-	紡3	シナブ上部,結晶片岩 製滑石品1,砂岩製砥 石1		
		3号住居跡	5C前	-	-	-	-	-		
		1号住居跡	5C末	18	-	-	網形?2, 不明1	シナブ上部,刀子1		大分市教委1992
		2号住居跡	6C中	1	-	1	-	-	柱穴の中から円板出土	
4号住居跡	不明	1	-	-	-	-				
日田市	麻鳩遺跡	5号溝状遺構	5C前	-	-	2	-	シナブ上部,鉄製,鉄片	日田市教委1995	
日田市	田ノ坪遺跡	B地区 8号竪穴住居	6C前	-	-	-	-	有孔円板1(結晶片 岩)	日田市教委2009	
竹田市	郡野原田遺跡	271号竪穴 (竪穴建物跡)	弥生後期 弥生-終末	-	-	-	紡1	鉄器3		久住均教委- 大分県教委2001
		51号竪穴(竪穴建物跡)	4C前	-	1	-	-	-		
		37号竪穴(竪穴建物跡)	4C中	-	-	-	勾1	鉄器4,土器片加工品 29点		
<b>熊本県</b>										
玉名市	両辺間田流遺跡	SH8(祭祀遺構)	5C前	70+	2	2	勾1	シナブ上部,土製勾玉 1	片岩製合	玉名市教委2009
玉名市	両辺間田流遺跡	SH4(祭祀遺構)	5C後	123+	4	14	網形8,勾 2,葉玉4	シナブ上部,土製模造 鏡2	片岩製合	玉名市教委2009
玉名市	上小田 宮の前遺跡	8-9区 自然流跡	5C	28	1	55	網形40, 紡1	シナブ上部,土製模造 鏡14,土製勾玉17,土 製瓦玉3,用解,細孔 碧玉製管玉,24×31小 玉3,木製品	縄文から中世までの遺 物を含む	熊本県教委2010
玉名市	柳町遺跡	調査区排水用側溝	?	-	1	-	-	-	両辺間田流遺跡に隣接	熊本県教委2001
熊本市	上高橋高田遺跡	包含層 (P-13P-9)II層	4C後-5C	-	-	0	-	-	遺跡内から多数の「祭 祀遺物」出土,ただし詳 細な内容は不明	熊本市教委1992
<b>宮崎県</b>										
宮崎市	土野原第2遺跡	SA1(竪穴建物跡)	6C-7C	0	1	-	勾1	引口,ガラス小玉,磨 造鏡片,板状浮,鉄片 (鉄鏝,刀子)	鉄鏝,刀子は表では「包 合層」出土	宮崎県歴史文2003
<b>鹿児島県</b>										
鹿児島市 (旧川辺町)	古市遺跡	5号竪穴住居跡	6C前	-	-	-	-	有孔円板(材質不明)	報告書では「柔らかくへ 石材を使用した石製品」と 記載	鹿児島県歴史文2005
日置市 (旧東市来町)	池之頭遺跡	包含層	5C	-	-	-	-	粘板岩製有孔円板?1	報告書では「粘板岩製 の石製品」と記載	鹿児島県歴史文2002
さつま町 (旧薩摩町)	向井原遺跡	6号竪穴住居跡	6C前?	-	-	1	-	-	報告書では「石製品 (滑石)」と記載	鹿児島県歴史文2010
指宿市	坂幸丸川遺跡	SUB.M.No.26-27P-2 9層	4C後-5C前	-	-	1	-	-	報告書では「円板状石 製模造品」と記載	指宿市教委1992

※遺構名は基本的に報告書記載名で統一し、括弧内に遺構の種類などを補足している。

同一遺跡内で出土することが少ない滑石製管玉が出土している点に平峰遺跡の特徴をみることができる。ところで、萩鶴遺跡は高坏脚部を転用した羽口と鉄鋌や鉄器を用いた祭祀で有名な遺跡であるが、次節で触れるように、高坏脚部転用羽口は九州南部、とくにえびの地域において多くみられる遺物であり、その関係性は注目される。

#### 平峰遺跡における有孔円板と滑石製管玉の位置づけ

有孔円板や滑石製管玉は、九州中・南部地域にておいて出土数は少なく1遺跡1点程度であり、有孔円板と滑石製の管玉が同一遺跡内から出土することはほとんどない。熊本県の祭祀に関連する例を除くと、平峰遺跡の状況はやや異質である。在地の一集落というよりは、外の地域とのつながりをうかがわせる。

#### (2) 高坏脚部転用羽口と鍛冶素材について

##### 平峰遺跡および宮崎県内における鍛冶の様相

平峰遺跡では1次から3次調査を通して、鉄滓や高坏の脚部転用羽口といった鍛冶関連の遺物が検出されている。しかし、羽口が出土する建物跡内で鍛冶炉と考えられる強く被熱した炉跡の検出は少ない。34号堅穴建物跡でみたように、埋土中においても小さい鍛造剥片・粒状滓には気づくため、鍛冶遺構を見逃している可能性は少ないと考えられる。

1次・2次調査（宮崎県埋蔵文化財センター2012）の遺物に関連した冶金学的分析によれば、分析を行った平峰遺跡出土の椀形鍛造滓はすべて鍛錬鍛造滓とされている。また、粒状滓のうち1点は「ねずみ鋳鉄」であり、鉄塊系遺物では脱炭した際のガス抜け孔が確認されており、平峰遺跡に

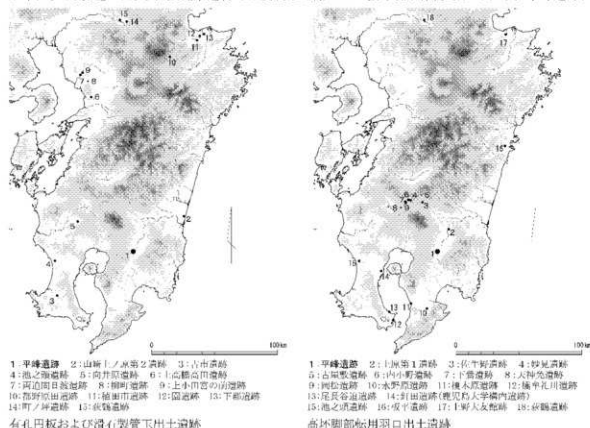


図79 九州中・南部地域における有孔円板・滑石製管玉と高坏脚部転用羽口出土遺跡の分布

表8 宮崎県内における弥生時代～古墳時代の羽口・鉄滓出土遺構一覧

所在地	遺跡名	遺構名	時期	鍛冶関係遺物	その他	備考	文献
新富町	向原第1遺跡	SA1(竪穴建物跡)	弥生後期後半	鍛造製片?、穀状滓、鉄片、台石(金床石?)	土器、砥石、鉄鏝	焼失家屋	宮崎県理文2006
川南町	尾花A遺跡	4-SI3(竪穴建物跡)	4C前	鉄片、白石(金床石)	土器、砥石、磁石、磨石、小玉、鉄鏝、ヤリガシナ(打製石斧、石鎚?)	焼失家屋?	宮崎県理文2011a
山向市	板平遺跡	4次 SA1(竪穴建物跡)	5C前	高坏転用羽口、鉄滓	砥石、石鏝(打製石斧?)		宮崎県理文2011b
新富町	上廣遺跡	F地区 5号住居址	5C中	羽口、鉄滓	土器、須恵器、砥石、磨石、砥石、鉄鏝、鉄製品?		新富町教委1995
		E地区 48号住居	6C	鉄滓	土器、鉄器	詳述なし	新富町教委1996
		E地区 55号住居	6C	鉄滓	鉄鏝	詳述なし	
宮崎市	北中遺跡	竪穴状遺構	6C	鉄滓	土器		宮崎市教委1999
宮崎市	山崎上ノ原第2遺跡	SA1(竪穴建物)	6C-7C	羽口、鍛造製片、穀状滓、鉄滓	土器、須恵器、磨石、白土、滑石管玉、磨石小玉、ガラス小玉(鉄鏝、刀子)	鉄鏝、刀子は表では「混合層」出土	宮崎県理文2003

において銹鉄を脱炭して脱炭鋼をつくる「下げ」の行程が行われたことが想定されている。

より視点を広げて宮崎県内をみてみると、近年弥生時代から古墳時代にかけての鍛冶に関連する遺跡の調査事例が増えている。弥生時代に属する鍛冶関連の遺跡は少ないが、弥生時代から古墳時代にかけての大規模な集落である川南町尾花A遺跡において鍛冶関連遺物が確認されている。また、これまであまり紹介されていないが、新富町向原第1遺跡において鍛冶工房と考えられる弥生時代後期後半頃の竪穴建物跡(SA1)がある<sup>(5)</sup>。

#### 九州中・南部地域における高坏転用羽口と鍛冶の様相

野島永氏によれば、古墳時代における高坏の脚部転用羽口は、古墳時代中期の5世紀にみられ、さらにその地域は東北地方と九州南部にみられるが、特に東北地方に多い(野島1997)とされている。九州内における高坏転用羽口は、管見の限り、表9にみるように18遺跡で出土している<sup>(6)</sup>。宮崎・鹿児島県の九州南部を中心として分布しているが、大分県でもわずかながら確認することができた。九州南部においては、特にえびの市域において出土遺構数が突出している。また、鹿児島県内における転用羽口は、包含層から出土していることが多いのに対して、宮崎県内の遺跡では遺構に伴うものが多い。遺構出土のものは竪穴建物跡からの出土が多いが、竪穴建物跡に鍛冶炉と思われる遺構が確認されている例は少ない。平峰遺跡1次・2次調査の冶金学的分析では、土器が鍛冶炉の炉壁として使用された可能性が指摘されており、床面にあまり痕跡が残らないような構造の炉であったのかもしれない。

時間的な状況を見ると、大分県内の遺跡はいずれも5世紀前半代で、九州南部では5世紀前半～6世紀前半頃までみられる。えびの市の遺跡が5世紀代のものが多いのに比べると、平峰遺跡はやや新しい時期となる。

#### 鍛冶素材と鉄錠について

鍛冶の素材については明らかでないが、平峰遺跡1次・2次調査の報告では、銹鉄を脱炭処理して鋼として鉄器を生産している過程が想定されている。銹鉄製品としては、えびの市妙見遺跡(宮崎県教育委員会1994)のSA2(竪穴建物跡)から鍛造鉄斧が出土しており、当時流通していた鍛造鉄斧やその破片などが、素材となった可能性がある。その一方、3次調査では43号竪穴建物跡の検出面付近の埋土ではあるが、投棄されたと考えられる多量の土器とともに小型鉄錠が出土してお

表9 九州中・南部地域における高環脚転用羽口出土遺構一覧

所在地	遺跡名	遺構名	窯台形	時期	転用羽口数	窯台関係遺物	その他	備考	文献
大分県									
大分市	上野大瓦畑(上原加)跡	SK004(土坑)	-	5C前	1	-	-	土坑自身は3C代SK001の混入か	大分市教委2000
		SK003(性格不明遺構)	-	5C前	1	-	土器		
田田市	萩鴨遺跡	整穴(竪穴)遺構	○	5C前	8	鉄滓(鍛造滓片、粉状滓、焼酎滓、ガラス質滓)、金床石、鉄石	土器		田田市 教委1995
		5号溝状遺構(祭成遺構)	-	5C前	-	鉄銹片	土器、3ニチュア土器		
宮崎県									
日向市	板平遺跡(4次)	SA1(整穴建物跡)	-	5C中	5	鉄滓、金床石	土器、打製石斧、磨石、砥石、石皿		宮崎県史文2011b
えびの市	内小野遺跡	SA-24(整穴建物跡)	-	5C前	1	-	台石、佩帯状砥石(打製石皿、磨製石皿、石匙、磨製石斧、石杖、滑片)		えびの市教委2000a
		SA-65(整穴建物跡)	-	5C前?	2	-	台石		
		SA-86(整穴建物跡)	-	5C前	1	-	(石鏃、石核)		
		SA-97(整穴建物跡)	-	5C前	1	-	土器		
		SA-142(整穴建物跡)	-	5C前	1	-	(打製石鏃2、石匙2、珠状玉1、滑片)	同では中央付近に土坑状の掘削込みあり	
		SK-76(土坑)	-	5C前	2	鉄滓付着量	軽石加工品	遺は報告書では「短期?」と記載	
		SA-126(整穴建物跡)	-	5C?	2	-	(打製石鏃)	高環の割合高い	
えびの市	長平野遺跡	SA-130(整穴建物跡)	-	5C後-6C前?	1	鉄鏃?	(石鏃、石片(-))	「鉄鏃」は報告書では「不明鉄器」と記載	えびの市教委2000b
		包含層	-	-	2				
		SA2(整穴建物跡)	-	6C後?	1	-	土器		
えびの市	古原牧遺跡	V区 SA-46(整穴建物跡)	-	5C前	「数点」	-	磨石、磨石、砥石、台石(打製石鏃、石鏃本製品)	地床9?あり	えびの市教委2005
		V区 SA-41(整穴建物跡)	-	6C前	「数点」	-	土器、砥石	地床9?あり	
		V区 SA-45(整穴建物跡)	-	6C	2	-	磨器、台石	地床9?あり床面2枚	
		Ⅲ区 SA-62(整穴建物跡)	-	6C?	1	-	台石(打製石鏃、局部磨製石斧、石鏃本製品)	地床9?あり	
		Ⅲ区 SA-66(整穴建物跡)	-	6C?	1	-	砥石1、台石1(磨石片)	地床9?あり	
えびの市	天神代遺跡	Ⅲ区 SD35(溝状遺構)	-	-	1	-	(各時期の遺物を含む)	混入	えびの市教委2010
		Ⅲ区 (3T1)(包含層)	-	-	1	-	(各時期の遺物を含む)		
		SA-110 1層(整穴建物跡)	-	5C後	4	金床石2? (1は報告書では「台石(砥石片のみ)」)	砥石1、台石7(1-2層にかけて「土器」と混入素材か、と思われる石鏃)	築城土掘じの土あり	
		SA-123 1層(整穴建物跡)	-	5C後	3	鉄滓	土器、土鏃、鉄鏃	地床9?あり	
		SA-118 1層(整穴建物跡)	-	5C後?	2	-	土器	地床9?あり	
		SA-134 1-2層(整穴建物跡)	-	5C後-6C前	4?	-	土器、須恵器、(磨製石鏃)	地床9?2基分あり	
		SA-107-108 1層(整穴建物跡)	-	5C後-6C前?	1	-	(両遺構の遺物を含む)		
SA-132 1層(整穴建物跡)	-	6C後	2	-	土器、須恵器、刀子	地床9?あり			

えびの市	天神堂遺跡	SA-84 1層 (竪穴建物跡)	-	7C初	1	-	土器、須恵器、磁石、 白石鉄鏡	土器埋没が	えびの市教委2010
		SD-124 上・中層 (溝状遺構)	-	9C後?	1	-	(各時期の遺物を 含む)	混入	
えびの市	岡松遺跡	SZ-01 3-4層 (自然成跡)	-	5C-6C?	3	-	(各時期の遺物を 含む)		えびの市教委2010
		SX-01 4層 (凹地)	-	-	1	-	(各時期の遺物を 含む)		
えびの市	下熊遺跡	5区南庭園区 跡部	-	8世紀- 古墳	1	-	(各時期の遺物を 含む)		えびの市教委2011
えびの市	砂見遺跡	SA2 (竪穴建物跡)	-	6C前?	1	-	土器、銅造鉄斧1	銅造鉄斧は二次 床面からの出土	宮崎県教委1994
都城市 (旧高城町)	上原第1遺跡	街区 12号型六住居跡	-	5C後 -6C前	4	-	-	-	高城町教委2004
<b>鹿児島県</b>									
肝付町 (旧高山町)	永野原遺跡	包含層5層	-	-	3	-	(各時期の遺物が 出土)		(財)元興寺編2000
鹿屋市	榎木原遺跡	包含層	-	-	1	-	(各時期の遺物が 出土)		鹿児島県教委1987
指宿市	榎平川遺跡	59-29	-	-	1	-	(各時期の遺物が 出土)	「ふいご削口の未 製品、高坏舞部内 面に焼成後の穿孔 を施す遺物」未 使用品	指宿市教委1993
指宿市	長尾谷遺跡	1号住居跡	○	6C	14		鉄斧、白石(鉄床 石)、黒石	榎葉石斧1、打製石 斧1、磨石1、燧石片 加工品2、石加工 品3	指宿市教委1986
鹿児島市	鹿児島大学構内遺跡	包含層4層	-	6C?	2	-	(各時期の遺物を 含む)		鹿児島大理工学2011
日置市 (旧東市来町)	池之原遺跡	包含層	-	5C	2	-	(各時期の遺物が 出土)		鹿児島県史文2002

※遺跡名は基本的に報告書記載名で統一し、括弧内に遺跡の種類などを補記している。

り、鉄鋌も鍛冶素材としての可能性が高い。鉄鋌は東潮氏の「細型鉄鋌B」類(東1999)に該当する。同様な鉄鋌は、荻鶴遺跡(日田市教育委員会1995)の祭祀遺構からも出土しているほか、えびの市内小野遺跡(えびの市教育委員会2000a)のSA-130(竪穴建物跡)内からも小型の鉄鋌と考えられる鉄器片が出土している。東氏によれば、集落内から出土する鉄鋌は鍛冶素材とされている。また、野島氏も複数ある鉄鋌の機能の中で、畿内や中国地方の一部を除く列島各地では、鍛冶の素材として受け入れられた可能性を想定している(野島1997)。さらに、野島氏は同時に、畿内地域において銅造鉄斧を原料とする指向性を指摘しており、銅造鉄斧自体は出土していないが、平峰遺跡の状況はこれらの指摘によく似ている。

#### 平峰遺跡における転用羽口と鉄鋌の位置づけ

列島で見られる転用羽口は5世紀代に限られ、同じ時期に見つかる鉄鋌は、畿内政権からの再分配によってもたらされたが、このような流通構造は朝鮮半島の状況の変化にもよって5世紀後半～6世紀に変容し、鉄鋌が減少するとともに、転用羽口も消滅していくとされる(野島1997)。平峰遺跡はちょうどこの変革の時期に位置し、一部専用羽口も出土しており、その状況を反映している可能性がある。

#### 註

- 1次・2次調査分については、鍛冶がなかったというよりも、詳細な内容が明らかでないために不明である部分が大部分にある。
- このほか、坏底充填部(柱部充填部)のみの破片も出土している。なお、「脚柱充填部」ではなく「坏底充填部」としたのは、本遺跡においては、高坏を作る際に、坏の底部を最後に埋めているものが多く、脚柱を充填した後に坏を作っているものがはばみられないためである。
- 報告書中では、「平底で外面に格子目タタキが施される、朝鮮半島系の軟質土器」(日田市教育委員会2009、26頁)で、鉢として報告されている。

- (4) 上小田宮の前遺跡の報告書（熊本県教育委員会2010）によれば、熊本県内ではほかに熊本市（旧植木町）石川遺跡、菊池市平町遺跡で有孔円板が出土している。ただし、文献等が不明で確認できなかったため、本報告では除外している。
- (5) 向原第1遺跡の報告書では鍛冶工房という報告は行われていない。フローテーションによって鍛造剥片などを回収しているが、本来の目的が炭化種子・果実の回収であり、鍛造剥片などの回収ではないため、報告書では「炭化種子や錆状のものも含めた鉄片はおおむね住居全域から出土している」（宮崎県埋蔵文化財センター2006:40）、とのみ記載してある。
- (6) このほか、池之頭遺跡の報告書によれば、鹿児島県吹上町の大園遺跡からも、高坏脚部を転用した羽口が出土しているが、文献が入手なかったため確認していないため、除外している。

#### 引用・参考文献

- 東 潮 1999「第5章 鉄鋌の基礎的考察」『古代東アジアの鉄と倭』、淡水社、147-283頁
- 青木 保 2006a 「儀礼の象徴性」、岩波書店
- 青木 保 2006b 「儀礼」『社会学事典』（縮刷版）、弘文堂、220-221頁
- 青木 保 2006c 「祭り」『文化人類学事典』（縮刷版）、弘文堂、723-724頁
- 今村仁司・今村貞介 2007 「儀礼のオントロジー」、講談社
- 三宮昌弘 1989「初期須恵器製作集団と韓式系土器」『韓式系土器研究』Ⅱ、韓式系土器研究、1-11頁
- 第54回埋蔵文化財研究会事務局編 2005「第54回埋蔵文化財研究会 古墳時代の滑石製品-その生産と消費-発表要旨・資料集」、第54回埋蔵文化財研究会事務局
- 中村直子 1987「成川式土器再考」『鹿大考古』第6号 鹿児島大学法文学部考古学研究室、57-76頁
- 中村直子 2002「薩摩・大隅」『第5回 九州前方後円墳研究会 古墳時代中・後期の土師器-その編年と地域性- 発表要旨集』 九集前方後円墳研究会、175-200頁
- 野島 永 1997「弥生・古墳時代の鉄器生産の一様相」『たたら研究』第38号 たたら研究会、1-34頁
- 福本 寛 2005「九州における滑石製模造品の使用状況」『第54回埋蔵文化財研究会 古墳時代の滑石製品-その生産と消費-発表要旨・資料集』、第54回埋蔵文化財研究会事務局、136-156頁
- Moore, Saly F. and Barbara G. Myerhoff 1977 Introduction: secular ritual. *Secular ritual*, Van Gorcum & Comp. pp.3-24.

#### 引用・参考遺跡報告書

##### 奈良県

- 奈良県橿原考古学研究所 1981「新沢千塚古墳」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第39冊、奈良県教育委員会

##### 大阪府

- 大阪府教育委員会 2010「都屋北遺跡1」大阪府埋蔵文化財調査報告2009-3
- 大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1992「小阪遺跡-近畿自動車道松原海南線および府道松原泉天津線建設に伴う発掘調査報告書」
- 財団法人 大阪市文化財協会 2004「難波宮址の研究」第12

##### 大分県

- 大分県教育委員会 1994「植田市遺跡」
- 大分市教育委員会 1992「岡遺跡」
- 大分市教育委員会 2000「上野大友館（上原館）跡」
- 大分市教育委員会 2009「下郡遺跡群Ⅵ」大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第92集
- 久住町教育委員会・大分県教育委員会 2001「都野原田遺跡」大分県文化財調査報告書第128輯・久住町文化財調査報告書台10集
- 日田市教育委員会 1995「荻鶴遺跡」日田市埋蔵文化財調査報告書第9集
- 日田市教育委員会 2009a「求来里の遺跡Ⅰ」日田市埋蔵文化財調査報告書第88集
- 日田市教育委員会 2009b「求来里の遺跡Ⅱ」日田市埋蔵文化財調査報告書第89集

## 熊本県

- 熊本県教育委員会 2001「柳町遺跡Ⅰ」熊本県文化財調査報告書第200集  
熊本県教育委員会 2010「上小田宮の前・養寺遺跡」熊本県文化財調査報告書第255集  
熊本市教育委員会 2005「上高橋高田遺跡」  
玉名市教育委員会 2009「両迫間日渡遺跡」玉名市文化財調査報告書第19集

## 宮崎県

- えびの市教育委員会 2000a「内小野遺跡」えびの市埋蔵文化財調査報告書第24集  
えびの市教育委員会 2000b「佐牛野遺跡」えびの市埋蔵文化財調査報告書第27集  
えびの市教育委員会 2005「東川北地区遺跡群」えびの市埋蔵文化財調査報告書第41集  
えびの市教育委員会 2010「北岡松地区遺跡群」えびの市埋蔵文化財調査報告書第48集  
えびの市教育委員会 2011「下鷲遺跡」えびの市埋蔵文化財調査報告書第52集  
新富町教育委員会 1995「上蘭遺跡F地区 溜水第2遺跡」新富町文化財調査報告書第18集  
新富町教育委員会 1996「上蘭遺跡A・B・C地区（Ⅰ） 上蘭遺跡E地区（Ⅰ）」新富町文化財調査報告書第19集  
高城町教育委員会 2004「細井地区遺跡群」高城町文化財調査報告書第14集  
宮崎県教育委員会 1994「野久首遺跡 平原遺跡 妙見遺跡」九州縦貫自動車道（人吉～えびの間）建設工事にもなう埋蔵文化財調査報告書第2集  
宮崎県埋蔵文化財センター 2003「山崎上ノ原第2遺跡 山崎下ノ原第1遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第79集  
宮崎県埋蔵文化財センター 2006「向原第1遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第119集  
宮崎県埋蔵文化財センター 2011a「尾花A遺跡Ⅱ」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第195集  
宮崎県埋蔵文化財センター 2011b「板平遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第199集  
宮崎県埋蔵文化財センター 2012「平峰遺跡（1次・2次調査）」宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第211集  
宮崎市教育委員会 1999「北中遺跡」宮崎市文化財調査報告書第38集

## 鹿児島県

- 指宿市教育委員会 1986「尾長谷追遺跡」指宿市埋蔵文化財調査報告書（7）  
指宿市教育委員会 1992「橋幸礼川遺跡Ⅲ」指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書（10）  
指宿市教育委員会 1993「橋幸礼川遺跡Ⅴ」指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書（12）  
鹿児島県教育委員会 1987「榎木原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（44）  
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002「池之頭遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（32）  
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006「古市遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（89）  
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010「尾付野山遺跡 向井原遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（147）  
鹿児島大学埋蔵文化財調査室 2001「鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 15」  
鹿児島大学埋蔵文化財調査室 2011「鹿児島大学構内遺跡 釘田遺跡第一地点（鹿児島大学構内遺跡郡元団地J-4区）」鹿児島大学埋蔵文化財調査室調査報告書第6集  
（財）元興寺文化財研究所編 2000「永野原遺跡」高山町埋蔵文化財発掘調査報告書（7）鹿児島県高山町教育委員会

## 第6章 総括

### 第1節 平峰遺跡における古墳時代集落の変遷

#### (1) 竪穴建物跡の時間的・空間的変遷

平峰遺跡の3次調査で検出した竪穴建物跡の時期については、前章で検討を行った。1次・2次調査における時期区分と合わせれば、5世紀後半の平峰Ⅰ期のグループとして、5号・7号・11号・12号・13号・23号・24号・28号・29号・33号・35号・40号・42号竪穴建物、5世紀後葉～6世紀前葉の平峰Ⅱ期のグループが、2号・3号・6号・8号・20号・21号・26号・27号・36号・39号・43号・44号竪穴建物跡、6世紀前葉～6世紀中葉の平峰Ⅲ期のグループが1号・10号・14号・15号・16号・19号・30号・31号・32号・37号・41号・45号竪穴建物跡となる(図40)。六角形建物跡と五角形建物跡はそれぞれⅠ期とⅢ期に分かれている。Ⅲ期の五角形建物跡は、まるで南側の何かを区画するように直線上に並んでいる。

#### (2) 平峰遺跡の古墳時代集落における各期の特徴

##### 平峰Ⅰ期(5世紀後半)

この頃は、台地平坦部の北側と、中央付近にわかれて集落が営まれている。比較的大型の建物が多く、南北それぞれのグループ内に六角形の建物跡がみられる。北側のグループでは、西側と東側にやや分かれている様子がみられるので、西側にもう1軒六角形の建物跡がある可能性が考えられる。Ⅰ期では主に3つの集団によって集落が形成されていたとみられる。羽口は各集団においてみられるが、有孔円板と管玉が出土したのは台地平坦部北側の西側グループである。

##### 平峰Ⅱ期(5世紀後葉～6世紀前葉)

この頃は、北側の台地斜面、台地平坦部北側、台地平坦部中央付近の3カ所に建物跡がわかれており、Ⅰ期に引き続いて3つの集団で集落が形成されているが、平坦部北側の東側グループはこの時期の建物が見られない。北側の二つのグループでは羽口が出土しているが、最も南側のグループでは羽口は見られない。Ⅰ期と同様に、有孔円板が出土しているのは台地平坦部北側の西側グループである。また、北端の2号竪穴建物からは水晶製切子玉が出土している。

##### 平峰Ⅲ期(6世紀前半～中頃)

この頃は、南側3軒の五角形建物跡で区画されるように、台地平坦部の北側に建物跡が集中してみられる。この時期も台地北側の西側グループが離れて存在しており、西側にさらに数軒の建物が存在することを予感させる。これまでと同様に、管玉が出土しているのは台地平坦部北側の西側グループである。羽口は、台地平坦部北側の建物集中部で羽口が出土しているほかは、31号竪穴建物跡で出土しているだけである。また、この時期には鉄滓のみが出土する建物が見られるようになる。3次調査の状況を見ると、鉄滓はそれまで検出面・埋土からの出土が中心であったものが、床面からの出土へと変化している。加えて、遺物の出土量も減少することから、この時期は集落内あるいは集落をとりまく社会的な状況が変化したことが考えられる。



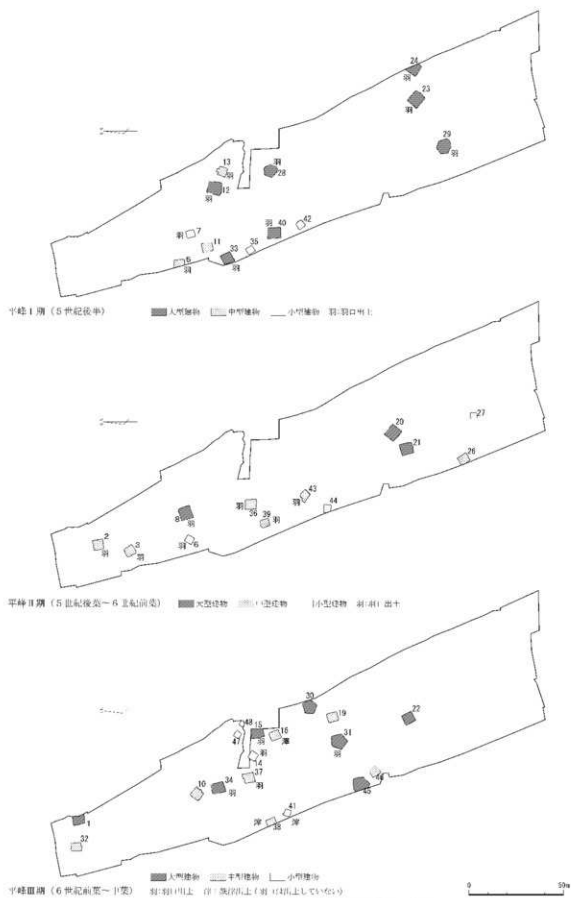


図80 平峰遺跡における古墳時代竪穴建物の変遷

## 第2節 平峰遺跡の歴史的位置づけ

### (1) 縄文時代から弥生時代における平峰遺跡の位置づけ

縄文時代～弥生時代の平峰遺跡において、人々が生活を行った痕跡が確認されたのは、縄文時代早期～晩期、弥生時代中期中頃である。縄文時代早期は集石遺構や土坑が確認されているが、遺物は少ない。これに対して縄文時代晩期は、竪穴建物跡は確認されていないが、多くの遺物とともに数基の土坑が確認されている。中には石鏃の失敗品と考えられるようなものや、剥片・破片類のほか、土器が出土した土坑もある。縄文時代晩期の都城盆地では、縄文時代後期から遺跡数が増加し、土掘り具とされる打製石斧の出土が増える（都城市史編さん委員会編2006）。今回の調査においても打製石斧の破片が出土しており、周辺の遺跡と歩調を合わせながら生活が送られていた様子が明らかとなった。

弥生時代では、土器片は比較的多く出土しているが、遺構は土坑1基のみが確認されている。土器片の多くは弥生時代中期中頃のものである。中には大隅半島付近に多い、雲母を多く含むものがみられる。隣接する弥生時代中期後半の備女木遺跡は、瀬戸内系土器や大隅半島を中心として分布する山ノ口式土器が出土しており（宮崎県埋蔵文化財センター2011）、広範な流通ネットワークの一部を担っていた様子を見ることができる。瀬戸内系土器は出土していないものの、雲母を含む土器が一定数みられる状況からは、平峰遺跡が、備女木遺跡の前段階にあたる流通ネットワークを担っていたと考えられる。

### (2) 古墳時代における平峰遺跡の位置づけ

古墳時代中期～後期、5世紀後半～6世紀中頃にかけての時期が平峰遺跡の中心的な時期である。この頃に、48軒の建物跡が場所を変えながら建てられ、人々の生活が営まれた。この頃の平峰遺跡の位置づけを考える上で、遺構では多角形建物跡、遺物では高坏脚部転用羽口、仕切付角鉢、平底瓶、有孔門板、滑石製玉類、鉄鋌、技術的な点では鍛冶における「下げ」行程などがキーとなる。これらの要素は、転用羽口を除けば、九州中・南部地域においては分布がかなり限られるか、きわめて稀である。現代的貨幣が普及する以前の社会において、多くの場合、各種の“モノ”（＝財）は、その財の категорияとそれを扱う人間の社会的関係によって分布が変化する（加藤2008）。これらの観点に立てば、一地域のレベルを超えた広範な社会的関係を有する上位レベルの集団であったことを想定することができる。渡来系や畿内の人間との関係をうかがわせるが、土器の形態や調整技法、建物の基本的構造は在地のものであり、“外”の人間の集落ではない。その中でも、多角形建物形状だけでなく、特徴的な配置をとる点からは、これらの建物が特殊な役割を果たしたと推測される。

ところで、九州南部地域における社会構造とその基盤となる経済構造、さらにその経済構造の基幹をなす交換システムは、現状でははっきりしない。前方後円墳に象徴される墓制を受容している地域は限られるため（図81）、畿内地域との関係を含めて、他地域と同様な交換システムを構築していたとは考えにくい。しかし、前章でみたように、専用羽口の出土を畿内政権による流通構造変革の現れとみれば、畿内政権の影響を強く受けていたことは明らかである。

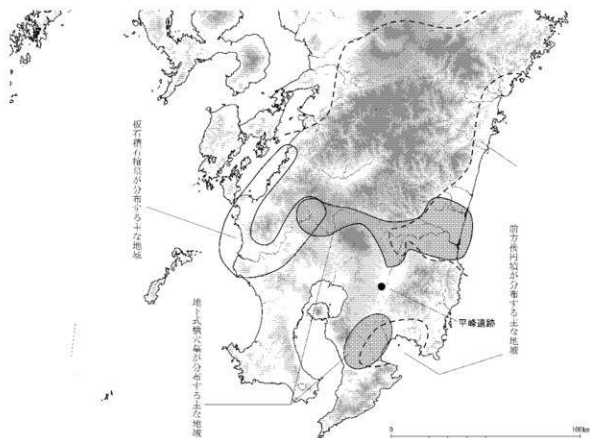


図81 九州南部地域の古墳時代における墓制の地域性（橋本2010を参考に作成）

### （3）古代以降における平峰遺跡の位置づけ

古代以降における人々の生活の痕跡は、土坑や道路状遺構、溝状遺構、畑と考えられる畝状遺構にみることができる。9世紀～10世紀頃の土器は、土坑などから多く出土している。調査区内で見られるピットはこの頃の掘立柱建物跡を構成していた可能性がある。その後、道路状遺構や、道や区画の性格を兼ねたと考えられる溝状遺構が作られ、さらに時期が下って15世紀頃には畑が作られている。現代の市道とほぼ同じ位置を通る道路状遺構からは、この付近が古くから道として機能していたことを感じさせる。また、この道路状遺構や区画溝の可能性のある溝や畑などからは、土地に対する意識の変化や社会の中における経済的状況の変化を読み取ることができる。

#### 引用・参考文献

- 加藤 徹 2008「3.弥生時代における鋳造鉄斧の流通について」『弥生時代における初期鉄器の舶載時期とその流通構造の解明』平成17年度～平成19年度科学研究補助金基盤研究(C)研究成果報告書、41-75頁
- 橋本達也 2010「九州南部の首長墓系譜と首長墓以外の墓制」『第13回九州前方後円墳研究会 九州における首長墓系譜の再検討 発表要旨集』第13回九州前方後円墳研究会鹿児島大会事務局、237-284頁
- 都城市史編さん委員会編 2006『都城市史』資料編考古、都城市
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011『働女木遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第205集

付表1 壁穴建物跡一覧表

遺構名	大きさ (m) 南北軸×東西軸 上：検出面、下：基礎	検出面・床面 レベル (m)	深さ (m)	床面積	扉床 炉	出土遺物	備考
32号壁穴建物跡	5.21 × 4.34 5.02(5.50) × 4.12	161.25 160.75	0.50	21.34	○ ○	土器類	( )内は掘出部含
33号壁穴建物跡	5.70 × - 5.42 × 5.34	165.30 165.30	0.30	27.84	○ ○	土器類、酒器類、石器、有孔円板、鉄 片、土師丸蓋は西辺付近 で計測	
34号壁穴建物跡	6.91 × 5.37 6.72 × 5.17	165.25 164.80-164.60	0.45	33.47	○ △?	土器類、(酒器類、)鉄片	
35号壁穴建物跡	3.84 × 3.47 3.69 × 3.26	160.75 160.35	0.40	12.21	○ ○	土師器、酒器類、石器、棒石	
36号壁穴建物跡	5.95 × 5.05 5.64 × 4.80	165.55 165.05	0.50	26.79	○ ○	土器類、(酒器類、)石器、有孔円板、 白土、鉄器、鉄片、陶料小塊	
37号壁穴建物跡	5.16(5.90) × 4.88 5.03(5.79) × 4.76	165.30 165.00	0.50	25.91	○ ○?	土器類、棒石	( )内は掘出部含
38号壁穴建物跡	4.93 × - 4.81 × -	165.80 165.50	0.30	15.97	○ ○	土器類、(酒器類、)棒石、鉄片	
39号壁穴建物跡	- × 3.97 (4.23 × 3.44) 4.06 × 3.44	165.45 165.25	0.40	13.13	○ ×	土器類、(酒器類、)石器、棒石、有孔 円板、鉄器、灰?	( )内は二次床
40号壁穴建物跡	約7.00 × 5.60 約6.70 × 5.29	165.75 165.30	0.45	35.53	○ ×	土器類、酒器類、石器、小玉、鉄器、 鉄片、陶料小塊-粒	
41号壁穴建物跡	3.37 × 3.46 3.25 × 3.37	165.35 165.35	0.43	10.48	○ ×	土器類、管玉、石器、鉄片、陶料粒	
42号壁穴建物跡	3.92 × 3.89 3.77 × 3.78	165.50 165.25	0.30	13.04	○ ○	土器類、石器、棒石、管玉	
43号壁穴建物跡	4.53 × 4.77 3.81 × 4.50(5.78)	165.50 165.05	0.45	18.22	○ ×	土器類、(酒器類、)刀子、鉄網、杖、 釘、灰?	( )内は掘出部含
44号壁穴建物跡	3.80 × 4.16 3.63 × 4.03	165.70 165.25	0.45	12.70	○ ×	土器類、酒器類、石器、陶料粒	大きき西辺付近及び 北辺付近で計測
45号壁穴建物跡	北辺→南側延長 推定4.97 × 4.23	165.80 165.70	0.40	45.90	○ ×	土器類、(酒器類)	平面五角形
46号壁穴建物跡	4.82 × 3.96 3.26 × 3.16	165.40 165.10	0.30	18.52	× ×	土器類	
47号壁穴建物跡	3.04 × 3.03 - × 2.52	165.45 165.25	0.35	8.93	○ ×	土器類、(酒器類、)付録?	
48号壁穴建物跡	- × 2.40 - × 2.40	165.10 165.10	0.15	4.02	○ ×	土器類	東西軸は北辺付近で 計測

※深さは検出面からの平均的な深さを示す。また、出土遺物類の位置が土器類は小片が出土していることを示す。

付表2 調査時略号等の注記対応一覧表

報告名	注記名	報告名	調査時名	報告名	調査時名	報告名	調査時名	報告名	調査時名
32号壁穴建物跡	→ 4号3 S421+平峰 S421	32号壁穴建物跡	1層 → 142層	35号壁穴建物跡	39-40号壁穴建物跡	45号壁穴建物跡	1層 → 141層		
33号壁穴建物跡	→ 4号3 S450	33号壁穴建物跡	2層 → 142S2 4層	36号壁穴建物跡	3層 → -	37号壁穴建物跡	2層 → 142層		
34号壁穴建物跡	→ 4号3 S4501+平峰 S421	34号壁穴建物跡	3層 → 142S21 3層	37号壁穴建物跡	4層 → 142S21 2層	38号壁穴建物跡	2層 → 136層		
35号壁穴建物跡	→ 4号3 S44	35号壁穴建物跡	5層 → 142S21 1層	38号壁穴建物跡	1層 → 70層	39号壁穴建物跡	4層 → 137層		
36号壁穴建物跡	→ 4号3 S42	36号壁穴建物跡	2層 → 69層	39号壁穴建物跡	2層 → 69層	40号壁穴建物跡	1層 → 26層		
37号壁穴建物跡	→ 4号3 S41	37号壁穴建物跡	3層 → 68層	40号壁穴建物跡	2層 → 68層	41号壁穴建物跡	2a層 → 23層		
38号壁穴建物跡	→ 4号3 S41	38号壁穴建物跡	5層 → 142S21 1層	41号壁穴建物跡	3層 → 24層	42号壁穴建物跡	6層 → 138層		
39号壁穴建物跡	→ 4号3 S45	39号壁穴建物跡	1層 → 142S27 1-8層	42号壁穴建物跡	3層 → 22層	43号壁穴建物跡	7層 → 140層		
40号壁穴建物跡	→ 4号3 S47	40号壁穴建物跡	9層 → 142層	43号壁穴建物跡	3層 → 24層	44号壁穴建物跡	1層 → 140層		
41号壁穴建物跡	→ 4号3 S48	41号壁穴建物跡	10層 → 142層	44号壁穴建物跡	4層 → 25層	45号壁穴建物跡	2層 → 140層		
42号壁穴建物跡	→ 4号3 S410	42号壁穴建物跡	11層 → 148層	45号壁穴建物跡	3層 → 18層	46号壁穴建物跡	2層 → 145層		
43号壁穴建物跡	→ 4号3 S411	43号壁穴建物跡	12層 → 185層	46号壁穴建物跡	4層 → 19層	47号壁穴建物跡	3層 → 144層		
44号壁穴建物跡	→ 4号3 S412	44号壁穴建物跡	13層 → 186層	47号壁穴建物跡	5層 → 17層	48号壁穴建物跡	2層 → 163層		
45号壁穴建物跡	→ 4号3 S415	45号壁穴建物跡	46号壁穴建物跡	48号壁穴建物跡	2層 → 104層	49号壁穴建物跡	1層 → 140層		
46号壁穴建物跡	→ 4号3 S4857+平峰 S418	46号壁穴建物跡	1層 → 142S18断面1 a層	49号壁穴建物跡	4層 → 160層	50号壁穴建物跡	2層 → 140層		
47号壁穴建物跡	→ 4号3 S4502	47号壁穴建物跡	2層 → 142S18断面1 b層	50号壁穴建物跡	1層 → 80層	51号壁穴建物跡	2層 → 140層		
48号壁穴建物跡	→ 4号3 S4503	48号壁穴建物跡	3層 → 142S18断面1 c層	51号壁穴建物跡	2層 → 91層	52号壁穴建物跡	1層 → 71層		
集石遺構	→ 4号3 S317	集石遺構	4層 → 142S18断面1 d層	52号壁穴建物跡	3層 → 96層	53号壁穴建物跡	2層 → 127層		
9号土坑	→ 4号3 SC18	9号土坑	142S18断面2 1層	53号壁穴建物跡	4層 → 92層	54号壁穴建物跡	3層 → 126層		
10号土坑	→ 4号3 SC16	10号土坑	5層 → 142(上)1層	54号壁穴建物跡	3層 → 126層	55号壁穴建物跡	2層 → 73-74層		
11号土坑	→ 4号3 SC111	11号土坑	6層 → 142(上)1断面1 1層	55号壁穴建物跡	4層 → 129層	56号壁穴建物跡	4層 → 74-75層		
12号土坑	→ 4号3 SC9	12号土坑	142S18断面2 II層	56号壁穴建物跡	1層 → -	57号壁穴建物跡	5層 → 77層		
13号土坑	→ 4号3 SC13	13号土坑	7層 → 142S18断面1 a層	57号壁穴建物跡	2層 → 100層	58号壁穴建物跡	6層 → 79層		
14号土坑	→ 番号付付志不?	14号土坑	142S18断面2 II層	58号壁穴建物跡	3層 → 154層	59号壁穴建物跡	7層 → 8504 3層		
15号土坑	→ 4号3 SC123	15号土坑	9層 → 142S18断面2 II層	59号壁穴建物跡	4層 → 101層	60号壁穴建物跡	8層 → 147層		
溝穴遺構(715c)	→ SC14	溝穴遺構(715c)	9層 → 142S18断面1 a層	60号壁穴建物跡	1層 → 160層	61号壁穴建物跡	9層 → 142層		
溝穴遺構(715d)	→ SC504	溝穴遺構(715d)	10層 → 142S18断面1 1層	61号壁穴建物跡	5層 → 159層	62号壁穴建物跡	10層 → 149層		
そのほか土坑	→ 4号3 SC-遺構番号	そのほか土坑	10層 → 142S18断面1 1層	62号壁穴建物跡	6層 → 159層	63号壁穴建物跡	11層 → 150層		
柱穴・ピット	→ 4号3 SC-遺構番号	柱穴・ピット	11層 → 142S18断面1 1層	63号壁穴建物跡	7層 → 160層	64号壁穴建物跡	12層 → 152層		
			12層 → 142S18断面1 1断面2	64号壁穴建物跡	8層 → 161層	65号壁穴建物跡	13層 → 151層		
			13層 → S4857 6層	65号壁穴建物跡	9層 → 162層	66号壁穴建物跡	14層 → 132層		
			14層 → S4857 7層	66号壁穴建物跡	10層 → 163層	67号壁穴建物跡	15層 → 163層		
			15層 → S4857 8層	67号壁穴建物跡	11層 → 164層	68号壁穴建物跡	16層 → 134層		
			16層 → S4857 9層	68号壁穴建物跡	12層 → 165層	69号壁穴建物跡	17層 → 135層		
			17層 → S4857 10層	69号壁穴建物跡	13層 → 166層	70号壁穴建物跡	18層 → 136層		
			18層 → S4857 11層	70号壁穴建物跡	14層 → 167層	71号壁穴建物跡	19層 → 137層		
			19層 → S4857 12層	71号壁穴建物跡	15層 → 168層	72号壁穴建物跡	20層 → 138層		
			19層 → S4857 13層	72号壁穴建物跡	16層 → 169層	73号壁穴建物跡	21層 → 139層		
			19層 → S4857 14層	73号壁穴建物跡	17層 → 170層	74号壁穴建物跡	22層 → 140層		
			19層 → S4857 15層	74号壁穴建物跡	18層 → 171層	75号壁穴建物跡	23層 → 141層		
			19層 → S4857 16層	75号壁穴建物跡	19層 → 172層	76号壁穴建物跡	24層 → 142層		
			19層 → S4857 17層	76号壁穴建物跡	20層 → 173層	77号壁穴建物跡	25層 → 143層		
			19層 → S4857 18層	77号壁穴建物跡	21層 → 174層	78号壁穴建物跡	26層 → 144層		
			19層 → S4857 19層	78号壁穴建物跡	22層 → 175層	79号壁穴建物跡	27層 → 145層		
			19層 → S4857 20層	79号壁穴建物跡	23層 → 176層	80号壁穴建物跡	28層 → 146層		
			19層 → S4857 21層	80号壁穴建物跡	24層 → 177層	81号壁穴建物跡	29層 → 147層		
			19層 → S4857 22層	81号壁穴建物跡	25層 → 178層	82号壁穴建物跡	30層 → 148層		
			19層 → S4857 23層	82号壁穴建物跡	26層 → 179層	83号壁穴建物跡	31層 → 149層		
			19層 → S4857 24層	83号壁穴建物跡	27層 → 180層	84号壁穴建物跡	32層 → 150層		
			19層 → S4857 25層	84号壁穴建物跡	28層 → 181層	85号壁穴建物跡	33層 → 151層		
			19層 → S4857 26層	85号壁穴建物跡	29層 → 182層	86号壁穴建物跡	34層 → 152層		
			19層 → S4857 27層	86号壁穴建物跡	30層 → 183層	87号壁穴建物跡	35層 → 153層		
			19層 → S4857 28層	87号壁穴建物跡	31層 → 184層	88号壁穴建物跡	36層 → 154層		
			19層 → S4857 29層	88号壁穴建物跡	32層 → 185層	89号壁穴建物跡	37層 → 155層		
			19層 → S4857 30層	89号壁穴建物跡	33層 → 186層	90号壁穴建物跡	38層 → 156層		
			19層 → S4857 31層	90号壁穴建物跡	34層 → 187層	91号壁穴建物跡	39層 → 157層		
			19層 → S4857 32層	91号壁穴建物跡	35層 → 188層	92号壁穴建物跡	40層 → 158層		
			19層 → S4857 33層	92号壁穴建物跡	36層 → 189層	93号壁穴建物跡	41層 → 159層		
			19層 → S4857 34層	93号壁穴建物跡	37層 → 190層	94号壁穴建物跡	42層 → 160層		
			19層 → S4857 35層	94号壁穴建物跡	38層 → 191層	95号壁穴建物跡	43層 → 161層		
			19層 → S4857 36層	95号壁穴建物跡	39層 → 192層	96号壁穴建物跡	44層 → 162層		
			19層 → S4857 37層	96号壁穴建物跡	40層 → 193層	97号壁穴建物跡	45層 → 163層		
			19層 → S4857 38層	97号壁穴建物跡	41層 → 194層	98号壁穴建物跡	46層 → 164層		
			19層 → S4857 39層	98号壁穴建物跡	42層 → 195層	99号壁穴建物跡	47層 → 165層		
			19層 → S4857 40層	99号壁穴建物跡	43層 → 196層	100号壁穴建物跡	48層 → 166層		
			19層 → S4857 41層	100号壁穴建物跡	44層 → 197層	101号壁穴建物跡	49層 → 167層		
			19層 → S4857 42層	101号壁穴建物跡	45層 → 198層	102号壁穴建物跡	50層 → 168層		
			19層 → S4857 43層	102号壁穴建物跡	46層 → 199層	103号壁穴建物跡	51層 → 169層		
			19層 → S4857 44層	103号壁穴建物跡	47層 → 200層	104号壁穴建物跡	52層 → 170層		
			19層 → S4857 45層	104号壁穴建物跡	48層 → 201層	105号壁穴建物跡	53層 → 171層		
			19層 → S4857 46層	105号壁穴建物跡	49層 → 202層	106号壁穴建物跡	54層 → 172層		
			19層 → S4857 47層	106号壁穴建物跡	50層 → 203層	107号壁穴建物跡	55層 → 173層		
			19層 → S4857 48層	107号壁穴建物跡	51層 → 204層	108号壁穴建物跡	56層 → 174層		
			19層 → S4857 49層	108号壁穴建物跡	52層 → 205層	109号壁穴建物跡	57層 → 175層		
			19層 → S4857 50層	109号壁穴建物跡	53層 → 206層	110号壁穴建物跡	58層 → 176層		
			19層 → S4857 51層	110号壁穴建物跡	54層 → 207層	111号壁穴建物跡	59層 → 177層		
			19層 → S4857 52層	111号壁穴建物跡	55層 → 208層	112号壁穴建物跡	60層 → 178層		
			19層 → S4857 53層	112号壁穴建物跡	56層 → 209層	113号壁穴建物跡	61層 → 179層		
			19層 → S4857 54層	113号壁穴建物跡	57層 → 210層	114号壁穴建物跡	62層 → 180層		
			19層 → S4857 55層	114号壁穴建物跡	58層 → 211層	115号壁穴建物跡	63層 → 181層		
			19層 → S4857 56層	115号壁穴建物跡	59層 → 212層	116号壁穴建物跡	64層 → 182層		
			19層 → S4857 57層	116号壁穴建物跡	60層 → 213層	117号壁穴建物跡	65層 → 183層		
			19層 → S4857 58層	117号壁穴建物跡	61層 → 214層	118号壁穴建物跡	66層 → 184層		
			19層 → S4857 59層	118号壁穴建物跡	62層 → 215層	119号壁穴建物跡	67層 → 185層		
			19層 → S4857 60層	119号壁穴建物跡	63層 → 216層	120号壁穴建物跡	68層 → 186層		

付表3 土器観察項目・内容一覧表

	<p>各出土遺構などを記載。ゴシックは破片で広い面積を占めるもの出土遺構・場所を、括弧内は接合したあるいは同一個体と考えられる破片の出土遺構・場所を示す。なお、「検出」は遺構検出面、「○/□cm」は検出面からの深さ、「上層」は埋土層、「床」は床面・床面直上、「陥没」は陥没内の上を示す。なお、検出面の標高は、次の以下の値で設定している。</p> <p>32号型穴建物跡=161.25m 33号型穴建物跡=165.50m 34号型穴建物跡=165.25m 35号型穴建物跡=165.75m            36号型穴建物跡=163.55m 37号型穴建物跡=165.50m 38号型穴建物跡=165.80m 39号型穴建物跡=160.45m            40号型穴建物跡=163.75m 41号型穴建物跡=165.78m 42号型穴建物跡=165.55m 43号型穴建物跡=165.50m            44号型穴建物跡=165.70m 45号型穴建物跡=165.80m 46号型穴建物跡=165.70m 47号型穴建物跡=165.45m            48号型穴建物跡=163.25m</p> <p>このほか、遺構のみの場合には、埋土中の出土を示す。また、「壁礎」は型穴建物跡を、その他「壁礎」は各壁礎の番号を示す。</p>
残存率	<p>口縁部、底面など径に対する遺物の残存率を示し、「○/□」で表現。また、括弧内は底面、「(1/8)」は1/8未満を示す。</p> <p>各種の調整技法を示すが、製作技法や製作者などの区別を試みるために、各調整について以下のような記載を行っている。なお、調整の順番を表す記号は、「→」が同一番、「↑」は順序不明あるいは併行の時間的関係、「↓」は部位が異なることなどを示す。方向は「横」が横方向、「縦」が縦方向、「斜」が斜方向。「多」が多方向の施工であることを示す。</p> <p>磨表面に条線がみられるものを「横↑」と表現。なお、判断が難しいものみられるが、その場合は上層の調整段階を考慮して以下のような区分・判断を行っている。</p> <p>「↑↑」：調整の最終段階において磨表面を平滑にする目的で、磨表面をなでつけたような条線をもつもの。確かな条線をもつが、条線は浅く1本1本の区分が不明瞭であるもの。なお、板状工具の小さいが当たったと思われる条線をもつものを「横↑↑」として区分している。他に幅3～5mmの棒状工具様の痕跡を使用したと思われるものを「棒↑↑」としている。</p> <p>「↑○」：調整の最終段階、あるいはその1段階前で、磨表面を平滑、あるいは表面の「あれ」をなくす目的で、磨表面をなでつけたような条線をもつもの。↑↑よりも条線が深く1本1本の区分が比較的明らかなもの。</p> <p>「↑↑」：「横↑」：「横↑」の確かな条線をもった調整痕をもつが、↑↑のように平滑ではなく、ブラシ痕のような条線とともに確かな砂粒の動きがみられるもの。↑↑のような粘土を削り取り厚さを調整するというよりも、磨表面の「あれ」を磨る目的で施工したと考えられるもの。</p> <p>なお、調整名の後に括弧付で(条線数/施工単位幅)を示す。条線数は、板状工具以外の条線数がはっきりしない原形の場合は「多」で表現。単位幅については、単位が明らかな場合はその数値を記載している。施工単位が明らかでない場合は、1cm単位での条線を記載し「○/□cm」で表現。また(多/5cm)の場合は省略している。</p> <p>「↑↑↑」：磨削の厚さを調整する目的で、粘土を削り取ったような条線をもつもので、砂粒の動きが確認されるもの。調整名の後の括弧内は施工単位幅を示す。</p> <p>施工単位幅が50cm以内で、その単位が明らかなものを「↑↑↑」。磨表面に「凹」様の光沢があるもの「↑↑↑」で単位が明でないもの。あるいは↑↑↑に凹に光沢を残したまま「↑」の単位を「↑」消したものを「↑↑」と表現。なお、「↑↑↑」を強く「消し」、光沢を持たないものは「↑↑」としている。「↑↑↑」については、調整名の後に括弧付で(施工深度/施工単位幅)を表現。「施工深度」は、「凹」は凹間深さ「凹」を施したものの、「凹や線」は凹間が凹つもの、「凹」は凹間が凹つもの、「部分」が一部分の施工にとどまるもの、を示す。</p> <p>↑↑↑ 括弧内は「凸面条数/施工単位幅」を示す。なお、単位幅が明らかでない場合は、5cm単位での凸面条数を示し、計測値の5.00cmと区別するために、小数点以下を省略し「○/5cm」と表現。</p>
突帯	突帯の有無を示し、「○」は突帯を有することを示す。
顔料	赤色顔料塗布の有無を示し、「○」は外面のみ、「◎」は外面+内面あるいは外面+内面の一部に顔料が塗布されていることを示す。
色調	括弧内は土色相記載の色名を示す。土層の基本的色調を示し、二次焼跡、煤、汚などによる変色は対象としていない。
	<p>以下のような土を含む含有物を含むことを示す。</p> <p>「陶」は角形または解石と考えられる単色光沢のある磁器を示す。            「英」は石と見られるガラス質で透明～半透明の磁器を示す。            「灰」は長石と見られる白色半透明の磁器を示す。            「雲」は雲母と考えられる光沢のある鱗片状の鉱物を示すが、土層部ではほとんどみられない。            「硝」は硝石と考えられる多角質で白色から黄褐色の岩石を示す。            「軟石」はクレンツクに類似した軟質赤褐色の軟石を示す。            「鉄」は長さ5mm前後の細長針状の鉄をもった赤褐色の調整物のものを示す。            「硝」 上記以外の5mm前後の大きさの硝を示す。多くは角が立たない角硝で、角硝はほとんどみられない。</p>
含有鉱物	<p>大きさ 各含有鉱物の大きさを示すが、「極微細」は粒状で計測できないものを示す。</p> <p>量 土色相を参考に、目視による表面におけるおおよその含有量を%で示している。なお、胎土における含有量は断面の観察をするべきであるが、破璃的な「定形品」では断面の観察が出来ないこと、および断面も胎土全体を表しているとは限らないことから、断面においてもっとも大きな面積を占める場合が多い磨表面における量を基準としている。したがって多くの場合、調整技法に依存して、断面の観察と異なる場合がある。また、「CN以下」は表面にみえる含有鉱物にパワキがあることを示し、最も多い箇所での含有率を表す。</p>
そのほか	<p>「灰」は原色の棒状の物質が付着していることを示す。            「汚」はコグ酸の物質が付着していることを示す。            「灰」は灰きこばれ灰と考えられる煤が消失した部分があることを示す。</p>

付表4 3次調査出土土師器・須恵器観察表

掲載番号	出土遺構 (採合関係)	器種	大きさ (cm) 口径 器高	残存率	調整	突 刺 料	色 調	含有鉱物	備考									
31	43号壁壇 20-25cm (43号壁壇 0-5cm 43号壁壇 25-35cm 43号壁壇)	甕	19.00	-	1/8	内・横片(多/1.00cm) 外・横片(多/1.00cm)	-	内:7.5187/4 (C2-5)黄緑 10188/3 (黄黒)	4cm以下層-2cm以下 軟土0-5%									
										37号壁壇 検出 32 G114層	甕	16.90	-	1/8	内・斜板片→横片(14/6cm) 外・横片	-	内:10188/4 (浅黄緑) 外:10188/3 (浅黄緑)	赤・黒 5%
34 41号壁壇 (41号壁壇 検出)	甕	17.85	-	6/8	内・横・斜片(1枚片)・横・斜片→ 横→13*(不明,0.30cm) 外・横・斜片(1枚片)(多/1.1cm), 横→13*(不明,0.30cm?)	○	内:10187/4 (C2-5)黄緑 外:10188/6 (黄黒)	日立った砂礫はみ られないが細砂礫 英を多く含む充泥 があるようにみえ る										
35 36号壁壇 (2114層)	甕	16.60	-	2/8	内・横片 外:(→片)→横板片	○	内:7.5187/6(黒) 外:7.5188/6 (浅黄緑)	2-3cm小層10%、2cm 以下層・英5%、軟土 赤										
E13 4層 36 (41号壁壇 D13 4層-5層)	甕 (→片?)	7.20	-	3/8	内・横片 外:横片→斜・縦→13*( 縦7.0,20cm)	-	内:(C2-5)黄緑 外:7.5187/4 (C2-5)黄緑	1cm以下層1(内)・軟土 18%以下	内外面黄緑									
37 43号壁壇 43号壁壇 上層	甕 (縦?)	11.60	-	2/8	内:(13*(1枚)横片,指持)→ 横片 外・横片(多/1.10cm)	-	内:10184/2 (浅黄緑)・黒 外:10184/1(黒)・ 10184/2 (浅黄緑)	黒帯部を英粒子,注 5に日立った砂礫 はない										
38 44号壁壇 20-27cm 44号壁壇 床	甕	13.90	-	1/8	内・横片 外:斜・縦片,横・斜片(1枚片)	-	内:5186/8(黒) 外:5186/8(黒)	4cm以下層-1cm以下 層	褐色の発色が強 い									
39 40号壁壇 25-35cm (40号壁壇 検出 40号壁壇 21a層 40号壁壇)	甕	11.70	38.05	7/8	内・指持→片 外・指持→横→(日本1.1cm) 板片(多/0.90cm)	-	内:5188/4(黄緑) 10188/4 (浅黄緑) 外:10188/4 (浅黄緑)	2cm以下層10%,3cm 以下英5%	内面に橙褐色の 粘土を使用・黄赤 土									
40 43号壁壇 35-45cm (43号壁壇 0-10cm 43号壁壇 15-30cm 43号壁壇)	甕	10.10 (3.40)	25.30	3/8	内・横片(多/1.05cm),多片 →化土上(片)・横片(1) 外・多片,縦片→縦→13*( 今や破,0.30cm)	-	内:10187/6 (黄黒) 外:10187/6 (黄黒) 10186/4 (C2-5)黄緑	2cm以下層-1cm以 下・軟土18%以下,た だし内面は砂礫目 立たない	内面の一部に成 軟土(幅0.35cm)									
41 40号壁壇 30-40cm (40号壁壇 25-30cm 40号壁壇)	甕 割部損 (口縁) (5.2, 5.4cm)	17.40cm	-	0/8	内:斜→(6本/0.95cm),斜板 片?,多片 外:不明	-	内:5187/8(黒) 外:10188/4 (浅黄緑)	2cm以下層-1cm 以下軟土10%(内面) 1.3cm以下層-2cm以 下層0-10%(外面)	内外面黄緑									
42 34号壁壇	甕								1次調査分									
43	35号壁壇 検出 35号壁壇 0-5cm (36号壁壇)	甕 (口縁) 割部損 (割部)	14.40	-	1/8	内・横片 外:不明	○	内:10188/6(黄緑) 外:5187/8(黒)	5cm以下層-10%,2 cm以下層2.1cm以下 層軟土0-5%									
										35号壁壇 検出 35号壁壇 0-5cm (36号壁壇)	甕	27.40cm	-	1/8	内・横板片 外:横→(1枚)板片	○	内:10188/6(黄緑) 外:5188/6(黒)	6cm以下層10%,3cm 以下英5%
44 (43号壁壇 検出-5cm 43号壁壇)	甕	10.80	-	1/8	内・横板片(多/0.95cm,多/0.75 cm),斜・縦片 外:横片(1枚片)→多→13*( 今や破・破,0.30cm)	-	内:7.5187/4 (C2-5)黄緑 外:7.5187/6(黒)	2cm以下層-2cm以下 層・軟土7%以下/軟 土やや多い	口縁部から3cm 程度の範囲が二 次被焼により灰 色に变色									
45 36号壁壇	甕	12.50	-	4/8	内・横板片(17/0.95cm) 外・横片(破/cm)	-	内:10186/4 (C2-5)黄緑 外:10188/4 (浅黄緑)	2cm以下層-英1% -										
46 39号壁壇 検出	甕	10.00	-	6/8	内・指持→横・斜片 外:斜板片→横片(多/0.70cm)	○	内:5187/8(黒) 外:5186/6(黒)	6cm以下層-2cm以下 層2-5%	13*?・破									
47 39号壁壇 15-20cm	甕	13.60	-	8/8	内:横→片 外:縦板片(多/0.90cm)→片 (多/0.90cm)→片	-	内:10188/3 (浅黄緑) 外:7.5187/4 (黄黒)	2cm以下層0-15% (内面),3% (外面)										

48	36号壁建 (41号壁建)	面	15.00	-	2/8	内:横仕*(多/1,407cm) 外:縦→横仕*(多/1,407cm) (11本/cm)→横仕*(多/1,607cm)	-	内:2,5188/6 (浅黄緑) 外:10188/4 (浅黄緑)	1cm以下-1cm以下黄 15	
43号壁建 検出										
41号壁建										
44号壁建										
49	43号壁建 0-10cm 43号壁建 35-40cm 43号壁建 上層 43号壁建 2層 43号壁建 6層 314 (4層-5層)	面	36.70	-	1/8 (2/8)	鋼部 内:横仕* 1/8 (縦→横仕*) (2/8) 中:中縦, 0.25×0.40cm	-	内:2,5188/6 (浅黄緑) 3187/6(縦) 外:10188/6(黄緑)	2cm以下縦7以下, 2 mm以下横-1mm-軟 木2%	一部に柱上層の一部のみ橙色が強い。
36号壁建										
50	36号壁建 1層 36号壁建 2層 F11 (4層) F11 (5層)	面	29.00	-	(8/8)	内:横仕*→縦仕*(1部分, 0.50cm) 外:横仕*→縦仕*(1部分, 0.50cm)	-	内:10187/6(縦) 外:10187/4 (浅黄緑)	6cm以下縦10%, 2cm 以下黄2%	外面に煤
43号壁建 0-5cm										
43号壁建 10-15cm										
51	43号壁建 上層 43号壁建 検出-5cm 43号壁建 25-35cm 43号壁建	面	16.75	-	鋼部 内:縦→斜仕*(多/0.90cm) 6/8 外:多仕*?	-	内:10185/2 (浅黄緑) 外:10185/4 (浅黄緑)	2cm以下目10%以下, 2cm以下縦-1cm 以下黄3%	下平が二次焼結により黄色/外面 を中心に白色の皮膜状物質 付着	
39号壁建 20-25cm										
52	39号壁建 35cm-床 (39号壁建 10-20cm)	面	26.75	-	鋼部 内:横仕* 外:横仕*→斜仕*(多/1.15cm) →斜横→縦仕*(多/0.30cm)	○	内:2,5173/3(浅黄) 外:10188/4 (浅黄緑)	2cm以下黄3%, 3cm以下赤・灰色小 石など10%		
35号壁建 0-5cm										
53	35号壁建 F11 (4層)	面	-	-	-	内:横仕*→縦仕* (柱全体に剥離) 外:横仕*→縦仕*(単位不明) →横→縦仕*(中:中縦, 0.35cm)	○	内:10187/4 (浅黄緑) 外:10185/2 (浅黄緑) 10187/3 (浅黄緑)	1cm以下縦-7%	
39号壁建 検出										
54	39号壁建 10-15cm 39号壁建	面	-	-	-	内:横仕*(多/1.40cm)→ 縦仕*(多/1.40cm) 外:縦→斜仕*(多/1.00cm)	○	内:2,5187/6(縦) 外:2,5187/4 (浅黄緑)	2cm以下赤-縦10% (内面), 1cm以下黄 3%外側)	
35号壁建 40cm-床 (35号壁建)										
55	35号壁建 35号壁建	面	22.70	-	-	内:横仕*(多/1.35cm) 外:横→縦仕*(縦7, 0.30cm) (横縦)	-	内:2,5187/6(縦) 外:2,5188/6 (浅黄緑)	1cm以下縦黄・その 他砂粒10%	煤
35号壁建										
56	35号壁建 検出 35号壁建 0-20cm 311 (4層-5層)	面	10.40	13.80	4/8	内:縦→斜仕*→横仕* (多/0.70cm) 外:横→縦仕*(縦, 0.30cm)	○	内:10188/6(黄緑) 外:3335/6 (明赤黄) 10188/4 (浅黄緑)	2cm以下横-1cm以下 縦-7%	
34号壁建										
39号壁建 検出										
39号壁建 0-5cm										
39号壁建 上層										
58	39号壁建 39号壁建 基礎 38号壁建 40号壁建	面	8.40 15.50	-	3/8	内:横仕* (7本/1.20cm), 横板 仕* (20本/1.30cm), 外:縦→横仕*(1本/0.90cm), 多→縦仕*(中:中縦, 1cm)	-	内:10187/4 (浅黄緑) 外:10187/6 (浅黄緑)	2cm以下黄-0.5-3cm 以下縦-10%, ただし 上面は目立たない とまよりがない	一部に縦線本数 2本の工具痕あり 破片の目立位置 とまよりがない
32号壁建										
42号壁建 15-20cm (42号壁建 0-25cm)										
60	42号壁建	面	8.30	-	5/8 (6/8)	内:横仕*, 斜仕*→横仕* (6/8) 外:横仕*, 横仕*?	-	内:2,5187/6(縦) 外:2,5188/4 (浅黄緑) 3386/6(縦)	1cm以下黄25%以下	
36号壁建 1層										
61	36号壁建 検出 36号壁建 2層	面	-	-	-	内:横仕*→斜仕*→縦仕* (中:中縦, 0.40cm) 6/8 外:縦→横仕*(1本, 0.25cm)→ 多仕*	-	内:2,5188/4 (浅黄緑) 2,5185/2(灰黄) 外:2,5186/6(縦) 2,5185/3 (浅黄緑)	2cm以下軟木5%以下 含む	
37号壁建 床										
62	37号壁建 30-35cm 36号壁建	面	14.80	-	-	内:横仕*→縦仕*(不明, 0.25- cm) 外:→縦仕*(縦, 0.20cm→0.35cm→ 横仕*(多, 0.60cm)	-	内:2,5188/3(浅黄) 外:10187/4 (浅黄緑)	目立った砂粒なし	
39号壁建 25-30cm (39号壁建 検出)										
39号壁建 0-5cm										
39号壁建 15-20cm										
39号壁建 35cm-床 39号壁建										
63	39号壁建	面	14.50	-	6/8	内:横仕*→横仕*? 外:横→縦仕*(縦, 2cm)→横仕* (横)	-	内:10187/6 (明黄緑) 外:2,5186/6(縦)	2目-軟木-1-2cm縦 1-2%	一部表面に厚1mm 程で黄褐色結上 を発生・帯着?
36号壁建 (36号壁建)										
64	36号壁建	面	5.30	7.45	3/8	内:斜仕*→横仕* 外:縦→横仕*→横仕*(横縦)	-	内:10187/6(縦) 外:2,5187/4 (浅黄緑) 3387/6(縦)	2cm以下黄-10%	

65	32号型建	直								1次調査分
66	34号型建	直								1次調査分
67	43号型建 10-15m	直	胴部径 6.40	-	胴部 内・横板付(多/0.50cm) 2/外・横→付(2/0.35cm)→横付	-	内・10035/3 (広・黄板) 外・7, 0100/4 (広・黄板)	2m以下層+1m以下 英・閃・軟赤1%, 補機 縦貫40%		
68	E13-4~5層 (41号型建 E15 4層)	直	胴部径 7.80	-	(4/外) 内・横付(日本/0.50cm)→横付 外・付(横)付	-	内・10038/4 (浅黄板) 外・7, 0107/6(白) 外・7, 0106/6(白)	目立った砂塵はみ られない		
69	36号型建	直?	(2.20)	-	内・付? 外・多→11'1'(今や破, 0.30cm)	-	内・7, 0106/4(白) 外・7, 0106/8(白)	1m以下英・閃・黒色 粒子10%ただし外面 は2%程度		
70	46号型建	直								1次調査分
71	43号型建 25-40cm (43号型建 検出 43号型建 上層 43号型建)	直	胴部径 15.20	-	胴部 内・横板付? (多/1.15cm), 横付(多/0.85cm), 2/外・多付?	-	内・10027/2 (広・黄板) 外・7, 0106/4 (浅黄板)	1m以下英・軟赤7% 以下/外面全体は種 子板状の同多数		
72	35号型建 (35号型建 検出)	直	胴部径 18.40	-	内・斜・横付 外・横付・斜→付(1'→ 横→付)付(補機)	◎	内・10031/4(赤板) 10038/2(灰白) 外・10043/3(赤板) 10038/2(灰白)	軽		
73	43号型建 上層	直	胴部径 10.70	-	胴部 内・1'11'付(縦付) 2/外・不明	-	内・10027/4 (広・黄板) 外・10027/4 (広・黄板)	1m以下英・閃・軟赤 15-20%		
74	44号型建 25-30cm	直	7.92	-	7/外 内・横付, 横→付 外・横→11'1'(直, 0.20cm)	○	内・10036/6 (明黄板) 外・7, 005/6(白) 外・2, 0105/6 (明赤板)	1m以下英・閃・軟赤 +補赤, 補機縦貫40% に鉄線状の細かい 付着物あり		
75	42号型建 20-25cm (42号型建 5-10cm)	直	11.90	-	24.06 内・横付 外・横付, 縦付	-	内・10027/4 (広・黄板) 外・10027/4 (広・黄板) 7, 0108/6 (浅黄板)	5m以下軟赤+補赤 以下, 1m以下英・閃 10%以下	横/→付, 底 部歪む	
76	40号型建 30-35cm (40号型建 検出 40号型建 21a層 40号型建)	直	胴部径 16.30cm	-	(8/30) 内・(→付)付, 横板付 (多/1.80cm) 外・多→付(直, 0.65cm)→ 多付, 縦付(付(不明), 付)	○	内・7, 0107/4 (広・黄板) 外・5107/6(白) 10027/3 (広・黄板)	5m以下赤板+2m以下 下層・閃5-10% しい	全体に歪みが著 しい	
77	40号型建 21a層 (40号型建 20層 40号型建 上層 40号型建)	斜?	胴部径 12.50	-	内・付, 横板付(多/1.30cm)→ 横→11'1'付(部分?, 0.30cm?) 外・横付, 横板付(多/1.30 cm)	-	内・10038/4(黄板) 外・5107/6(白)	5m以下英・閃5-10% 外面面識		
78	41号型建 30cm-床	直	31.70	-	4/外 内・横付 外・横付→付(付付), 横付, 縦付?	○	内・7, 0107/6(白) 外・10036/3 (広・黄板)	5m以下層?+10%, 5 m以下軟赤3%以下	付・横?/外面底 部付定二次鉄熱 付?	
79	42号型建 5-10cm (42号型建 15-20cm 42号型建 SCB)	直	28.00	-	1/外 内・横板付? (多/1.25cm) 外・縦付, 横→付	○	内・10038/4 (浅黄板) 外・7, 0107/6(白) 外・10038/4 (浅黄板)	4m以下層3%以下	付・横	
80	40号型建 25-40cm (40号型建 検出 40号型建 20層 40号型建 21層 40号型建 D12 5層 E12 4層-5層)	直	27.70	28.85	4.8 内・(横→付)付→縦→付(付 (部分, 0.20cm) 外・(横→付)→縦・横付	○	内・10027/4 (浅黄板) 外・10027/4 (浅・黄板)	2m以下閃・英・軟赤 +4m以下層5-10% に対して層状に施 工/腐	内面→11'1'は経 の1/3の範囲に対 して層状に施 工/腐	
81	39号型建 30-35cm 39号型建 35-床 (39号型建 0-5cm 39号型建 20-25cm 39号型建 39号型建 3R)	直	28.30	28.50	7/外 内・横板付(日本/1.70cm) 外・横板付	○	内・10027/4 (広・黄板) 外・10038/4 (広・黄板)	3-5m層3-5%	付・横	
82	36号型建 1層 (36号型建 2層 F11 4層 F11 4層-5層)	直	23.60	27.00	4/外 内・横・縦付 外・横・縦付・横付(多/0.60cm)	○	内・10035/3 (広・黄板) 外・10036/3 (広・黄板)	6m以下層10%, 1m 以下英・閃5%	付・横	
83	43号型建 検出 (43号型建 上層 43号型建)	直	(7.60)	-	(4/外) 内・横板付(多/1.60cm)・多付? 外・縦付(日本/0.7cm)	○	内・2, 0102/3 (広・黄板) 外・10027/4 (広・黄板)	4m層5-7%, 2m以下 内面に橙色の積 英・閃15%以下	内面に橙色の積 土を塗布?	



35号型建 検出 (30号型建 出1 4層 D11 4層)	変	34.80	-	2/8	内:横材*(多/1.10cm) 外:横材*→横材*(0.8cm/0.45cm →8cm/0.90cm)→横材* (多/0.20cm)	○	-	内:10Y8/3 (表・黄組) 2.5Y8/4 (黄組) 外:2.5Y (表・黄組) 2.5Y8/6(表)	4m以下階・2m以下 階・黄・表・赤15%
36号型建 (F11 4層)	変	20.80	-	5/8	内:11" 外:縦材*→17(鋼線束)→17(鉄材)* →縦材*	○	-	内:10Y8/3 (黄組) 外:10Y8/3 (黄組)	4m以下階・2m以下 階・3・5m階20%
34号型建	変	-	-	-	-	-	-	-	1次調査分
37号型建 床 (2+11 4層)	変	26.50	-	2/8	内:縦材*(多/0.23cm) 外:縦材*	○	-	内:2.5Y/3 (表・黄組) 外:2.5Y/3(黄組)	2m以下階・黄・赤15%
39号型建 検出 D12 (28号型建 検出 38号型建)	変	32.40	-	1/8	内:横材*(8cm/0.95cm 多/0.95cm)→横材*(多/ 0.40cm) 外:横材*→縦材*→横材*( 多/0.40cm)	○	-	内:10Y8/3 (黄組) 外:10Y7/3 (表・黄組)	1m以下・2m以下階25% →17・床
44号型建 床	変	29.10	-	1/8	内:15(1+1)→17(→17)→17、横板 * (多/1.20cm) 外:縦材*(多/1.20cm)、斜材*、 縦材*	○	-	内:2.5Y8/6(表) 外:2.5Y/4(黄組)	4m以下階・赤・2m 以下階・1m以下表 子・赤・表・外・赤 →赤・表・赤・表・ →赤・表・赤・表・
40号型建 25-35m (40号型建 検出 40号型建 4層 40号型建 E12 4層・5層 D12 4層・5層)	変	24.10	22.80	6/8	内:横材*→横材*(多/1.25cm) 外:縦材*→縦材*、横材*→横材* →縦材*→横材*→横材*	○	-	内:10Y6/4 (表・黄組) 外:10Y7/6(表)	4m以下階・2m以下 階・1m以下階・黄
43号型建 40-45m (43号型建 検出・5cm 43号型建 10-15cm 43号型建 35-40cm)	変	23.20	11.10	6/8 (7/8)	内:横材*(多/1.70cm/2) 横材*→横材* 外:縦材*(8cm/0.70cm) →縦材*(多/1.90cm)	○	-	内:10Y7/4 (表・黄組) 外:10Y7/4 (表・黄組) (黄組)	底部付近二次補 強により表色7/7 17・床・赤・表・赤 下面に鉄骨種 付重載)→黄組 に表色鋼線・
43号型建 2層 43号型建 5層 43号型建 6層 43号型建 F14 4・5m)	変	23.20	11.10	6/8 (7/8)	内:横材*(多/1.70cm/2) 横材*→横材* 外:縦材*(8cm/0.70cm) →縦材*(多/1.90cm)	○	-	内:10Y7/4 (表・黄組) 外:10Y7/4 (表・黄組) (黄組)	2m以下階35、1m以下 階・黄・赤15%以下 下面に鉄骨種 付重載)→黄組 に表色鋼線・
36号型建 40号型建 1層 E11 4層・5層	変	26.60	-	1/8	内:11" 外:縦材*→縦材*	○	-	内:2.5Y8/6(表) 外:2.5Y8/6(表)	2m以下階・2m以下 階・赤・表・2m以下 階・赤・表・15% 10%
39号型建 30-床 (39号型建 20-25cm 39号型建)	変	-	-	-	内:横材* 外:縦材*→縦材* →縦材*(0.8cm/1.00cm)	○	-	内:2.5Y8/3(黄組) 外:10Y8/2(黄組)	5m以下階3・5% 床
35号型建 15-20cm (35号型建 10-20cm 35号型建 40cm・H)	変	21.60	-	4/8	内:縦材*→横材*(多/0.90cm) →17* 外:横材*(多/0.90cm)→17* →縦材*	○	-	内:10Y7/4 (表・黄組) 外:10Y7/4 (表・黄組)	5m以下階 →17・床
43号型建 35-45m (43号型建 検出・5cm 43号型建 10-20cm 43号型建 27 43号型建)	変	15.40	-	5/8	内:縦材*(一部17*11) 横材*(0.8cm/1.00cm)→ 縦材*→斜材*(多/0.70cm) 外:縦材*	-	-	内:10Y7/3 (表・黄組) 2.5Y8/4 (表・黄組) 外:10Y7/3 (表・黄組)	2m以下階・1m以下 階・黄・赤15%以下
40号型建 35-40m 40号型建 (40号型建 20層 40号型建 21層 40号型建 22層 40号型建 1層 E12 4層・5層)	変	19.40	-	2/8	内:横材*(0.8cm/1.20cm)→横材* 外:縦材*(0.7cm/1.20cm)→ 多材*、横材*(多/1.20cm)	○	-	内:2.5Y8/4 (表・黄組) 外:2.5Y8/4 (表・黄組) 10Y8/4 (黄組)	4m以下階・斜・2m 以下表・黄・赤・赤3% (内面)、10% (外面)
36号型建 36号型建 1層 (36号型建 2層 F11 4層)	変	22.80	-	4/8	内:横材*(13cm/1.30cm) 外:縦材*→縦材*	○	-	内:13 外:10Y8/6 (黄組)	5m以下階・赤3% 床・赤
43号型建 検出 (43号型建 1層 43号型建)	変	(5.60)	20.75	4/8 (5/8)	内:横材*→縦材*(多/0.90cm) 外:縦材*→縦材*(12cm/0.80cm)	-	-	内:10Y6/6(表) 外:10Y6/3 (表・黄組) 10Y7/4 (表・黄組)	5m以下階・斜・2m 以下表・黄・赤15%以下 →17・床・鋼線より 上・表・
39号型建 検出 (39号型建 0-5cm 39号型建 1層 39号型建 E12 4層)	変	34.40	-	2/8	内:横材*→横材*(17*11(部分) 0.40 cm)→横材* 外:縦材*→横材*(8cm/0.90 cm)	○	-	内:10Y7/4 (表・黄組) 外:10Y8/3 (黄組)	5m以下階・赤7%、1m 階15% 床

39号壁建 横出 (39号壁建 0-5cm)					内→板付? 外→板付?→		内→10927/4 (広口・黄緑)	6cm以下赤線含む壁	上段の柱上端
99 39号壁建 上層					縦板付? (8cm/0.90cm)・		中→10927/3 (広口・黄緑)	105	合縁は設けなし
39号壁建					縦→334 (8cm/0.90cm)・				
40号壁建 20層					横板付? (8cm/0.60cm)				
E12 4層									
37号壁建 床 (37号壁建 36号壁建)	使	31.60	-	1/8	内→横付? 横付? 外→縦付?→横付?	○	内→2.916/2 (灰黄) 外→2.917/2 (灰黄)	3cm程の砂線を含む があまり目立たない	合縁は設けなし
101 31号壁建	使								1次調査充分
37号壁建 床 36号壁建 1層									
102 36号壁建 45-50cm (36号壁建 横出 36号壁建 2層)	使	30.80	-	6/8	内→斜板付? (7cm/0.70cm) 外→斜板付? (多/0.70cm)	○	内→7.9181/4 (黄)	7cm以下薄10%以下	3?・横
36号壁建 (36号壁建 1層)	使	44.00	-	6/8	内→横→? (14cm/cm)→横付? 横工具付? 外→横付? 縦付?	○	内→7.9187/6 (黄) 外→7.9187/4 (広口・黄)	赤線・鉄・灰20程 し外面は目立つた 砂線はみられない	3?・横
37号壁建 床 (37号壁建 E→11 5層)	使	21.00	-	1/8	内→横付? 斜付? 外→横付? (多/0.95cm) 縦付? 多付?	○	内→2.918/3 (灰黄) 外→2.918/3 (灰黄)	3-6cm中継5%	
36号壁建 横出 F11 4層									
103 36号壁建 (36号壁建 1層 E11 4層 5層)	使	25.80	-	-	内→斜板付? (0.20cm)→横→? (10 本/cm)→横板付? (多/1.50cm +1.00cm) 外→横付? 縦→?×?→?×?	○	内→10988/4 (浅黄緑) 外→10988/4 (浅黄緑)	4cm以下中継5% 下, 1cm以下中継15% 以下	
35号壁建 30-35cm (35号壁建20-30)	使	31.65	-	6/8	内→横→?→? 外→横→?→横付? 縦→斜→? →?	○	内→2.9172/3 (浅黄) 外→10927/4 (広口・黄緑)	4cm以下薄5%, 1cm厚 1%	
40号壁建 25-35cm (40号壁建 35-40cm)	使	29.00	-	7/8	内→横板付? (多/L.1.10) 外→横付? 縦→?×?→縦板付?	○	内→2.9172/4 (浅黄) 外→2.9172/4 (浅黄)	2-5cm中継2cm厚・灰 3-5%	3?・横
108 32号壁建									
36号壁建 25-30cm (36号壁建 E11 4層 5層)	使	28.00	-	6/8	内→斜付? 外→斜→縦付? (9cm/1.00cm)	○	内→10927/4 (広口・黄緑) 外→10927/4 (広口・黄緑)	4-5cm中継2cm厚・灰 5-10%	
37号壁建 30-35cm 36号壁建									
110 37号壁建 床 (36号壁建 1層 F11 4層)	使	26.20	-	2/8	内→斜→? (単位不明)→? 外→横付? 縦→斜板付?	○	内→31927/3 (広口・黄緑) 外→10988/6 (黄緑)	5cm中継・3cm鉄条5%	
44号壁建 横出 (44号壁建 0-5cm)	使	20.50	-	2/8	内→横付? (多/0.85cm) 外→横付? (7?→? 縦→? (6cm/0.60cm) 横→? 多付? (多/0.65cm)	○	内→2.916/2 (灰黄) 外→横付付で不明	6cm以下薄2cm以下 灰5-7%	横
38号壁建 20-25cm 38号壁建 25-床 (38号壁建 3層 38号壁建)	使	22.80	31.70	3/8	内→斜板付? (多/L.40cm) 斜→? (多/0.80cm)→縦板 付? (多/L.40cm)	○	内→10927/3 (広口・黄緑) 外→10927/3 (広口・黄緑)	5cm以下赤線2cm以下 灰5%	横
39号壁建 横出 (39号壁建 0-5cm 39号壁建 上層 39号壁建 2層 38号壁建 3層 E12 4層 5層)	使	17.20	19.80	4/8	内→横板付? (多/0.90cm) 外→?→? (多/0.90cm)→斜付? (多/0.70cm)	-	内→10988/3 (浅黄緑) 外→10988/4 (浅黄緑)	2cm以下中継・鉄条5% 5-10%含むがあまり 目立たない	3?・横・吹
43号壁建 20-25cm (43号壁建 20-25cm 12cm/0.80cm)	使	20.95	20.10	3/8	内→横板付? (多/L.20cm) 斜→? 横付?→斜→? (12cm/0.80cm)	-	内→10988/4 (浅黄緑) 外→2.917/3 (浅黄)	4cm以下薄3-5%	横→?・吹
40号壁建 (40号壁建 20層 40号壁建 21層 40号壁建 22層 40号壁建 上層 E12 4層 5層)	使	24.20	-	1/8	内→横板付? (多/L.70cm) 斜付? 外→?×?→横付? 斜付?	-	内→0988/5 (浅黄緑) 外→2.918/3 (浅黄)	4cm以下中継2cm 灰・鉄・鉄条5-10%	内面に黄緑色粘 土使用?
41号壁建 床 (41号壁建)	使	21.40	-	4/8	内→斜板付? (多/0.95cm)→ (7? 横付?→)横付? 外→多付? 斜付?→横付?	○	内→0988/6 (黄) 10927/4 (広口・黄緑) 外→9187/6 (黄) 10927/4 (広口・黄緑)	1cm以上中継10- 15% (断面以上), 4cm 以下中継2cm以下中 継(断面以下)	横・吹
39号壁建 横出 117 39号壁建 0-5cm (39号壁建 2-3層)	使	23.00	-	1/8	内→横→? (10cm/L.10cm) 横付? 外→横付?→縦付?	○	内→10927/4 (広口・黄緑) 外→10927/4 (広口・黄緑)	2cm以下灰・1cm以下 灰・1cm以下中継3%	横

118	41号壁建	壁	20.90	-	2/8	内:横材 <sup>1</sup> ,縦材 <sup>1</sup> 外:横材 <sup>1</sup> →縦材 <sup>1</sup>	○	-	内:10Y86/4 (C.25+黄檀) 外:2.5Y4/1(真直)	1mm以下漆2mm以下た だしの納まりは自立立 ない	
119	40号壁建 10-20cm (40号壁建)	壁	19.30	19.90	5/8 (0.80)	内:多材 <sup>1</sup> ,横板材 <sup>1</sup> (多/L.30cm) 外:(縦→横)1 <sup>1</sup> →縦材 <sup>1</sup> → 横材 <sup>1</sup>	○	-	内:10Y86/3 (浅黄檀) 外:2.5Y8/3 (浅黄檀)	5mm以下漆・小継+2 mm以下継ぎ+1mm 以下(内部),3mm以 下継ぎ+2mm以下継ぎ+ 1mm以下(外部) 内面剥離	壁
120	43号壁建 上層	板 1→2,7	-	-	-	内: 外:	-	-	7.5Y86/4 (C.25+黄檀)	無垢材・軟木5%・楡 無垢材10%	
121	39号壁建 検出 (39号壁建 上層 39号壁建)	瓦葺 (壁?)	7.90	-	(0.80)	内:(割継) 外:縦→横→3'3'(割継)	-	-	内:10Y87/3 (C.25+黄檀) 外:10Y87/3 (C.25+黄檀) 5Y87/4 (C.25+黄檀)	2mm以下漆・軟木+1 mm以下内漆	内面剥離・外面滑 膩仕上げ・二重塗 熱により変色・煤 け
122	40号壁建 35-40cm (40号壁建 20層)	瓦葺 (壁?)	7.60	-	(0.80)	内:縦→横→横 <sup>1</sup> 外:縦→横 <sup>1</sup> (1.20cm→横 <sup>1</sup> , →横 <sup>1</sup> 1 <sup>1</sup> →横 <sup>1</sup> )	-	-	内:1.5Y88/1(楡) 外:2.5Y88/3 (浅黄檀)	2mm以下漆10%・無垢 材10%以内),軟 木5%	内面剥離
123	40号壁建 35-40cm (39号壁建 20層 40号壁建 21層 40号壁建)	瓦葺 (壁?)	5.60	-	-	内:横板材 <sup>1</sup> (多/L.80cm) 外:縦→横 <sup>1</sup> 1 <sup>1</sup> →縦→横 <sup>1</sup> 1 <sup>1</sup> (縦,0.35cm)	-	-	内:10Y86/3 (浅黄檀) 外:2.5Y8/3 (浅黄檀)	2mm以下漆継ぎ5%	
124	42号壁建 検出	瓦葺 (壁?)	7.00	-	(0.80)	内:縦→横材 <sup>1</sup> (多/0.90cm) 外:多材 <sup>1</sup>	-	-	内:10Y86/4 (浅黄檀) 外:10Y86/3 (浅黄檀) 7.5Y88/3 (浅黄檀)	2mm以下漆継ぎ右種 2%	部材は平面調丸 方形状
125	43号壁建 検出 (43号壁建 0-5cm)	瓦葺 <sup>1</sup>	8.20	-	(2.80)	内:横→横(7cm/0.85cm)→ 横材 <sup>1</sup> 外:横→横 <sup>1</sup> 1 <sup>1</sup> (縦,0.30cm), 横→横 <sup>1</sup> 1 <sup>1</sup> (部分,0.10cm)	-	-	内:10Y86/2 (浅黄檀) 外:10Y86/4 (C.25+黄檀)	無垢材を裏打ちし,ほ とが自立した納め が忘る/横材付 着物	
126	41号壁建35-40cm (41号壁建 40cm+1尺)	板	27.40	-	3/8	内:(横材 <sup>1</sup> →)横→横 <sup>1</sup> 1 <sup>1</sup> (縦, 0.40cm)→横→横 <sup>1</sup> 1 <sup>1</sup> (縦, 0.40cm) 外:横→横 <sup>1</sup> 1 <sup>1</sup> (縦,0.40cm)→横→ 横 <sup>1</sup> 1 <sup>1</sup> (縦,0.40cm)→横材 <sup>1</sup>	-	-	内:1.5Y88/6 (浅黄檀) 10Y87/4 (C.25+黄檀) 外:7.5Y88/6 (浅黄檀) 10Y88/4 (浅黄檀)	5mm以下軟木・楡・榿 5mm以下継ぎ 下継ぎ2% 3'×楡	
127	39号壁建 検出 39号壁建 0-5cm (39号壁建 10cm 39号壁建 40号壁建)	板	23.30	-	8/8	内:横材 <sup>1</sup> →横→横 <sup>1</sup> 1 <sup>1</sup> (縦,0.90cm) 外:横材 <sup>1</sup> →横→横 <sup>1</sup> 1 <sup>1</sup> (縦,0.40cm)	-	-	内:10Y86/3 (浅黄檀) 外:2.5Y77/3(浅黄)	2mm厚+4mm継ぎ含む 継ぎ7%	3'×楡
128	40号壁建 35-40cm (40号壁建 21層 40号壁建)	板	16.80	-	4/8	内:→横 <sup>1</sup> 1 <sup>1</sup> 1 <sup>1</sup> ,横材 <sup>1</sup> 外:→横 <sup>1</sup> 1 <sup>1</sup> 1 <sup>1</sup>	-	-	内:7.5Y87/4 (C.25+黄檀) 外:10Y87/6 (明黄檀)	2mm以下継ぎ10%	内外面割減
129	40号壁建 25-30cm 40号壁建 97層 (40号壁建 20層 40号壁建 E12 4層+5層)	板	13.10	-	6/8	内:横材 <sup>1</sup> →横→横 <sup>1</sup> 1 <sup>1</sup> (縦,0.40cm) 外:(横材 <sup>1</sup> →)横→横 <sup>1</sup> 1 <sup>1</sup> (縦, 0.20cm+0.35cm)	-	-	内:10Y87/3 (明黄檀) 外:2.5Y86/6(楡)	1mm以下漆・黄・楡2% 以下	
130	41号壁建 (41号壁建 0-5cm E13 4層+5層)	板	13.60	-	3/8	内:横→横 <sup>1</sup> 1 <sup>1</sup> (縦,0.30cm)→ 横材 <sup>1</sup> 外:横→横 <sup>1</sup> 1 <sup>1</sup> (縦,0.30cm)→ 横材 <sup>1</sup>	-	-	内:10Y87/6 (明黄檀) 外:2.5Y77/3(浅黄)	1mm以下黄・黄・軟木 2色の結上を使用 710-10%	
131	43号壁建 検出 (43号壁建 上層 43号壁建)	板	13.60 (4.30)	7.70	4/8	内:横板材 <sup>1</sup> (多/0.90cm) 外:横→横 <sup>1</sup> 1 <sup>1</sup> (縦+0.30 cm)→横材 <sup>1</sup> ,横材 <sup>1</sup>	-	-	内:1.5Y87/6(楡) 外:2.06/6(楡)	1mm以下の黄・明 5mm以下	
132	36号壁建 検出 (36号壁建)	板	11.05 (3.80)	6.15	8/8	内:横→縦→横 <sup>1</sup> 1 <sup>1</sup> (縦,0.25cm) →横材 <sup>1</sup> 外:横→横→横 <sup>1</sup> 1 <sup>1</sup> (縦,0.40cm)	-	-	内:7.5Y86/6(楡) 外:2.5Y86/6(楡)	4mm以下軟木15%以下 +1mm以下 内面OK以下	壁
133	36号壁建 36号壁建 1層	板	11.40 (3.70)	9.60	2/8 (0.80)	内:横→横(7,0.10cm)→横材 <sup>1</sup> 外:横→横 <sup>1</sup> 1 <sup>1</sup> (割継)	-	-	内:7.5Y87/6(楡) 外:2.5Y87/6(楡) 5Y87/6(楡)	2mm以下継ぎ継ぎ5%	
134	44号壁建 床	板	4.70	(11.80)	(0.80)	内:横板材 <sup>1</sup> (多/L.30cm) 外:横材 <sup>1</sup> →横板材 <sup>1</sup> (多/0.70cm)	-	-	内:1.5Y86/6(楡) 外:2.5Y86/6(楡)	7mm以下漆+2mm以下 黄・明・軟木5%,3mm 以下継ぎ以下	



154	32号壁紙	紙								1次調色分
155	43号壁紙 横出 (43号壁紙 上層)	紙	13.10	-	3/8	内:不明(多)11(不明) 外:不明(多)11(不明)	-	-	内:10186/2 (C:25)(黄緑) 外:10186/3 (C:25)(黄緑)	1m以下蒸・乾ホ ・糊%、糊数糊長40%
41号壁紙	41号壁紙 15-20cm 41号壁紙 35-40cm	紙	13.70	6.45	3/8	内:不明(多)13(不明) 外:1177?→不明(多)13(不明、 6.30cm)	-	-	内:1.5187/6(黄) 2.5187/3(浅黄) 外:1.5188/6 (浅黄緑) 2.5187/6(黄)	2m以下蒸・乾燥ホ・ 糊%以下 白緑部付近一部 蒸・二次被熱により 変色/底紙内面に 粘上りあり/内 外面剥離
157	38号壁紙 横出 (40号壁紙 20層)	紙	12.80	3.10	4/8	内:横折?、横折?→横折?12? (不明) 外:横折?13(12、6、40cm)→ 横折?	-	-	内:10187/4 (C:25)(黄緑) 外:2036/6(黄)	糊縦ホ・糊% 内外表面剥離/内外 表面に糊両面粘 上り使用・粘着
158	37号壁紙 床 (37号壁紙)	紙	11.70	3.10	7/8	内:横折?13(全今糊、0.15cm) 外:縦・横・多?13(1 (全今糊、0.15cm→0.25cm)→ 横折?	-	-	内:1.5177/6(黄) 外:1.5187/6(黄)	目立った砂埃なし
159	40号壁紙 35-40cm 40号壁紙 21層 (40号壁紙 9層 40号壁紙)	紙	13.55	5.55	5/8	内:横・斜折?→横・多?12(1 (全今糊、0.30cm) 外:横折?→横?13(1(全今 糊、0.30cm)、11?横折? (不明)→多?13(1(全今 糊、0.30cm)	-	-	内:5186/6(黄) 2.5187/6(黄) 外:2036/6(黄) 10187/4 (C:25)(黄緑)	2m以下蒸・1m以下 1%
160	36号壁紙 横出	紙	14.10	5.90	1/8	内:横・多?13(1(2、0.20cm?)→ 11? 外:縦・横?13(1(2、0.4cm)	-	-	内:1.5188/4 (浅黄) 外:1.5187/6(黄)	目立った砂埃なし
161	39号壁紙 横出	紙	16.40	-	4/8	内:1177?(糊紙) 外:横折?13(1(2、0.30cm) →1177?	-	内: 外:	1m以下蒸・糊% 底部・外面上部二 次被熱で変色	
162	40号壁紙 30-35cm (40号壁紙 35-40cm)	紙	16.70	6.80	6/8	内:1013?11?→1177?横折?1 11? 外:横折?→1177?→1177?横 折?11?	-	-	内:10187/4 (C:25)(黄緑) 外:10188/4 (C:25)(黄緑)	3m以下蒸・2m以下 蒸1%
163	39号壁紙 横出 (39号壁紙 上層 40号壁紙 16層 40号壁紙)	紙	15.35	6.35	2/8	内:1013?12?(不明) 外:横折?13(1(2、0.30cm) →横折?(不明)	-	-	内:1.5188/6 (浅黄) 外:10188/2 (浅黄)	1m以下蒸・砂埃ホ 1%以下 白緑部を中心に 二次被熱により 変色
164	42号壁紙 横出	紙	17.00	6.30	3/8	内:不明 外:不明	-	-	内:1.5188/3 (浅黄) 外:1.5188/4 (浅黄)	2m以下蒸10-20% ただし表面消滅部 分は25-50%
165	43号壁紙 横出 (43号壁紙 上層 43号壁紙)	紙	14.87	5.60	7/8	内:横折?13(1(2、0.25cm) 外:横折?13(1(2、0.20cm)→ 横折?横折?13?	-	-	内:2036/6(黄) 外:2036/4 (浅黄) 10188/4 (浅黄) 10187/4 (C:25)(黄緑)	1m以下蒸・糊・糊 %、糊数糊長40%
166	40号壁紙 94層 (40号壁紙 20層 40号壁紙 21層 40号壁紙 39号壁紙)	紙	15.80	-	2/8	内:横折(多)0.60cm→横折? 13(1(2、0.20cm)、11?→ 斜折?13(1(2、0.30cm) 外:1177?→横折?13(1(全今糊? 0.20cm)	-	-	内:1.5187/4 (C:25)(黄緑) 10187/3 (C:25)(黄緑) 外:1.5187/4 (C:25)(黄緑) 10187/3 (C:25)(黄緑)	1m以下蒸・乾ホ・1 m以下蒸・糊% 糊%以下
167	36号壁紙 1層 (36号壁紙)	紙	13.60	6.10	6/8	内:横折?→横・斜折?13(1 (2、0.30cm) 外:横折?→多?13(1(全今糊、0.30 cm)	-	-	内:10186/6(黄) 外:2036/6(黄)	乾ホ%、糊・長0-7%
168	36号壁紙 1層	紙	12.80	4.82	2/8	内:1177?11?→多?13(1 (2、0.25cm)-斜・横折? 外:横折?13(1(2、0.15cm) (糊、0.45cm)	-	-	内:1.5187/8(黄緑) 10187/4 (浅黄) 外:1.5188/4 (浅黄)	目立った砂埃なし 1177?状付着物
169	36号壁紙 111 4層-5層 111 5層)	紙	12.20	-	2/8	内:横折?13(1(2、0.30cm) 外:斜折?13(1(2、0.25cm)	-	-	内:10188/4 (浅黄) 2.5188/4 (浅黄) 外:10188/6(黄緑) 2.5187/6(黄)	糊縦女間・糊%含 む 内外表面剥離状の 剥落多
170	36号壁紙 1層 (36号壁紙)	紙	15.00	5.50	3/8	内:横・斜折?13(1(2、0.35cm)→ 外:縦・斜折?13(1(2、0.35cm)→ 横折?13(1(2、0.35cm)	-	-	内:1.5186/6(黄) 外:10188/4 (浅黄)	目立った砂埃なし 二次被熱により変 色

171	39号壁建 35cm-床 (39号-40号壁建)	鉄	15.70	-	2/8	内: (横)→(上)→(下)→横・多分 外: 縦行→縦行	-	内: 5186/6(縦) 1092/4 (上・下)黄緑 外: 5187/6(縦) 1038/6(黄緑)	4m以下軟赤・縦→ mm以下黄・黄10%	内面中心に黄緑 色粘土を使用・建 布?
172	37号壁建 床	鉄	-	-	(7/8)	内: (上)→(下)→多分 外: 行→縦→行(今令確, 0.40 cm)	-	内: 7, 5186/6(縦) 外: 7, 5186/6(縦)	3m以下黄・黄・赤 ・軟赤7%以下	
173	42号壁建 横出 42号壁建 上層 44号壁建 上層 E14 4階-5階	鉄	11.75 (5.35)	13.10	1/8 (3/8)	内: 多分 (多/1, 50cm) 外: 縦行 (多/0.90cm), 縦行→ 縦→行 (縦, 0.20cm)	◎	内: 1092/4 (上・下)黄緑 外: 1085/6(赤)	2m以下黄・縦・1m 以下黄・軟赤7%以下	
174	42号壁建 横出 42号壁建 上層 42号壁建	鉄	12.00 (5.10)	11.00	6/8 (8/8)	内: 多分 (多/1, 40cm)→縦→ 行 (縦, 0.15-0.20cm) 外: 縦→行 (縦, 0.20-0.30 cm), 行 (多/0.40cm)	◎	内: 1085/6(赤) 7, 5187/6(縦) 外: 1085/6(赤) 1098/4 (上・下)黄緑	1m以下黄・縦10%以 上に黄い粘土 今令確減	
175	44号壁建 横出 44号壁建 上層	鉄	10.20 (4.50)	8.92	3/8	内: 縦行→縦行 外: 縦→行 (今令確, 0.30cm)→ 横行 (多/0.90cm)	-	内: 5186/6(縦) 外: 5186/6(縦)	1m以下黄・黄・縦赤 赤に黄いた粘土 を塗布?	
176	613 4階 613 4階-5階	仕切 角 鉄	-	-	-	内: →行 (縦, 0.40cm) (仕切部), 多分 外: 行→行 (行) (今令確, 0.40 cm)	-	内: 1098/2 (灰黄緑) 7, 5187/6 (縦) 外: 7, 5188/4 (灰黄緑)	1m以下黄・軟赤7% 以下(床部), 床部以 外は砂礫目立たな い	
177	36号壁建 1層 (36号壁建 36号壁建 2層)	珪藻 (横筋)	6.90	4.00	2/8	内: 縦→行 (縦, 0.15cm)今令 確, 0.35cm)→多分 外: 縦→行 (縦, 0.15cm) →行 (幅不明)→多分	-	内: 2, 5185/6 (明赤赤) 1092/4 (上・下)黄緑 外: 5185/3 (上・下)赤黒)	横筋間15以下	
178	36号壁建 1層	手取	4.30	-	8/8	内: 外:-	-	内: 1092/4 (上・下)黄緑 外: 1092/4 (上・下)黄緑)	2m以下黄赤, 横筋 軟赤	
179	37号壁建 横出 (E11) 5階	高坪	20.60	13.35	8/8	床部 内: 行, 横→行 (行) 外: 斜→縦→行 (縦, 0.30cm)→ 横行 脚部 内: 縦行→縦行 外: 斜→行 (縦, 0.30cm)	-	内: 1092/4 (上・下)黄緑 外: 1092/4 (上・下)黄緑)	目立った砂礫なし 内面一部・外面部 部部部・脚は床部 ・坪は砂礫出面中心 出上	
180	36号壁建 (36号壁建 1層)	高坪	16.60	13.20	4/8	床部 内: 縦→行 (縦, 0.45cm) 外: 縦→行 (縦, 0.45cm) 脚部 内: 行 外: 斜→行 (縦, 0.45cm)→行	-	内: 7, 5186/6(縦) 2, 517/4 (灰黄緑) 外: 7, 5185/6(明赤)	1-2m今令確・2m軟赤 5%	
181	36号壁建 1層	高坪	18.60	12.30	4/8	内: 行 縦行 外: 横→行→斜→縦→行 (縦)→斜行 →行→行 縦行	-	内: 1092/4 (明赤) 7, 5186/6(縦) 外: 7, 5186/6(縦)	2m以下黄・黄・赤 5%	
182	36号壁建 25-床cm 38号壁建 20-25cm)	高坪	23.35	16.70	4/8	床部 内: 縦行→行 (縦, 0.40cm) 外: 縦→行→縦行 脚部 内: 縦行, 縦行→縦行, 横行 外: 縦行→行 縦行	-	内: 1092/4 (上・下)黄緑 外: 1092/4 (上・下)黄緑)	脚部内面5cm以下赤 縦を含む縦→25% 粘土を塗布? 坪 は砂礫目立たない 部外面に黄色の 砂礫なし 付着物	
183	41号壁建 41号壁建 床	高坪	19.60	14.90	8/8 (8/8)	床部 内: 斜→行 (縦, 0.30cm) →行 縦行 外: 斜→行 (縦)→行→縦→行 (縦) (多/0.30cm)→行 縦行 (行) 横→行 (今令確, 0.20cm) 脚部 内: 縦行→縦行→縦行 外: 斜→行 (縦, 0.45cm)→ 横行 縦行	-	内: 1098/6(黄緑) 1098/4 (灰黄緑) 外: 7, 5187/6(縦)	2m以下黄・黄・軟赤 5%以下, 脚部部部 より光沢	内外面部部減
184	44号壁建 横出 44号壁建 床	高坪	25.70	18.80	6/8	床部 内: 横→行 (10本/cm)→多→行 (行) (多/0.70cm) 外: →行 (3本/0.75cm)→多行 (多/0.75cm) 脚部 内: 縦行 (多/0.75cm)→縦行 (多/0.35cm), (横)→(8本/cm) →縦行 外: 縦行, 横→行 (6本/cm)→縦行	-	内: 7, 5186/6(縦) 外: 7, 5186/6(縦)	1m以下黄・黄・軟赤 ・縦10%以下, ただし 脚部外面では砂礫 は目立たない, 脚部 内面では軟赤が5%	

					环境 内:多→13'(距,0.40cm→0.25cm)→横付(多/0.95cm) 外:横-斜→13'(距,0.40cm→0.25cm)→横付(多/0.95cm) 脚部 内:縦付'1,横付'3(不明)→縦付'7,横付'5(付付'(多/0.85cm) 外:横付'5(付付'→横-斜→13'(距,0.20cm)→横-斜→13cm)→横付'→横付'	内:2.517/2(浅黄)101K7/4 (12.5%黄相) 外:2.51K7/4(黄相) 101K7/4 (12.5%黄相)	目立った砂雜はみられないが種雜黄を多く含む気味があるようにみえる	外白粉内部に鉄粉付着一部黄入。押光部分外面に高乾付。→13'を7'下減す。	
41号壁建 床 (41号壁建 40号壁建)	高坪 坪	25.25 (18.70)	19.00	8/8 (8/8)					
36号壁建 5-15cm (36号壁建 1層 20号壁建 0-20cm F11 5層)	高坪 坪	27.50	-	5/8	内:縦→13'(→付付'→付付'縦13') 外:横-多→13'(→付付'縦13')	内:101K6/4 (浅黄相) 外:101K6/4 (浅黄相)	茶・肉色		
186 36号壁建 横出-5cm	高坪 坪	(17.60)	-	(4/8)	内:横→13'→溝→取付工具による付付'→縦付'→付付'→付付'→付付'縦13' 外:縦付'→→13'→付付'縦13'	内:101K6/4 (浅黄相) 外:101K6/4 (浅黄相)	茶・肉色		
187 32号壁建	高坪							1次調査分	
40号壁建 (38号壁建 40号壁建 上層 E12 4層-5層)	高坪 坪	20.50	-	3/8	内:横付'→横→13'(中央部,0.40cm) 外:横付'付付付'→横→13'(中央部,縦,0.40→0.20cm)	内:1006/6(赤相) 101K6/4 (浅黄相) 外:1008/6(赤)	2cm以下茶・1cm以下肉・7%	内外面黄	
42号壁建 15-25cm (42号壁建 5-15cm 42号壁建)	高坪 坪	18.80	-	5/8	内:縦→13'(距,0.40cm)→付付'縦13'→横→13'(部分,0.35cm) 外:付付'付付'→斜→13'(中央部,0.40cm)→多→13'(距,0.40cm)→	内:101K6/4 (浅黄相) 外:101K7/4 (12.5%黄相) 1005/6(赤)	2cm以下茶・肉・軟赤・7-10%	白緑接合前に面料を塗布	
37号壁建 床 (37号壁建)	高坪 坪	16.60	-	7/8	内:横-多→13'(距,0.20cm)→横付' 外:斜→13'(中央部,0.20cm)→横付',多→13'(距,0.20cm)→	内:2.51K6/8(相) 外:2.51K6/8(相)	1cm肉・軽1%以下	内面に灰色粘土付着	
42号壁建15-25cm (42号壁建 5-15cm 42号壁建 上層)	高坪 坪	19.60	-	7/8	内:横→13'(距,0.40cm)→横付' (多/0.25cm)付付'縦13' 外:(付付'→)横→13'(距,0.30cm→0.40cm)→	内:51K6/8(相) 101K7/4 (12.5%黄相) 外:101K7/8(相)	1cm以下茶・肉・軟赤15-20%	外面積の黄色が強い	
36号壁建 1層 (36号壁建)	高坪 坪	16.80	-	5/8	内:横-斜→13'(距,0.35cm)→横付' 外:横-斜→13'(距,0.35cm)→	内:51K6/6 (12.5%相) 101K7/4 (12.5%黄相) 外:51K6/6 (12.5%相) 101K7/4 (12.5%黄相)	1-1cm程-2cm以下軟赤-1cm以下茶・肉5%		
193 34号壁建	高坪 坪							1次調査分	
40号壁建 30-35cm (40号壁建 35-40cm 40号壁建)	高坪 坪	14.15	-	5/8	内:横→13'(距,0.25cm)→(中央部,0.40cm) 外:横付'→横→13'(中央部,0.40cm)→	内:1006/6(赤相) 101K6/4 (浅黄相) 外:1016/6(赤相) 101K6/4 (浅黄相)	2cm以下茶3-5%		
36号壁建 (36号壁建 1層 F11 4層)	高坪 坪	16.00	-	3/8	内:横付'→横→13'(距,0.45cm)→横付' 外:横付'(面積)	内:51K6/8(相) 外:51K6/6(相)	1cm以下肉・黄15%,1cm以下茶		
36号壁建 (2-F11 4層)	高坪 坪	13.00	-	5/8	内:横付'→横→13'(距,0.4cm→0.35cm) 外:横付付付'(多/0.25cm)→付付'→付付'縦13'付	内:7.51K6/4 (浅黄相) 外:101K6/8 (浅黄相)	肉・肉肉・黄10%,1cm以下軽1%以下7'		
36号壁建 36号壁建 1層	高坪 坪	27.30	-	1/8	内:横付'→横→付付' (中央部,0.40cm)→横付' 外:横付付'(多/1.00cm)→付付'→横→付付'→13'(中央部,縦,0.30cm)→横付'→	内:2.51K5/6 (明赤相) 外:2.51K4/8 (赤相) 101K6/6 (黄相)	1cm黄1%以下	内面底面剥落混着?	
35号壁建 5-10cm (35号壁建)	高坪 坪	22.50	-	4/8	内:横→13'(距,0.30cm)→横付'付付'縦13' 外:横付'付付'(中央部,0.30cm)→付付'	内:51K6/6 (12.5%相) 101K7/4 (12.5%黄相) 外:51K6/6 (12.5%相)	2cm以下茶・肉・軟赤10%	内外面黄	
36号壁建 1層 (36号壁建 E11 4層-5層 F11 4層)	高坪 坪	24.50	-	1/8	内:縦→13'(距,0.30cm)→付付'付付'縦13' 外:縦→13'(距,0.30cm)→横付'→横付'	内:7.51K5/6(相) 外:51K6/8(相)	2cm以下軟赤-1cm以下黄-肉10%		

200	34号型壁	高坏 坏							1次調査分
201	34号型壁	高坏 坏							1次調査分
202	35号壁壁 横出 (35号壁壁 0-10cm D11 5層)	高坏 坏	29.80	-	2/8	内→横行→横→行→横行 外→横行→斜→行(距7.0, 40 cm)→行	-	内→7.0188/6 (茂黄壁) 外→5187/8 (壁)	2m以下英・軟布 ・織75以下 内面塗装
203	42号壁壁 横出 (42号壁壁 上層 E14 4層・5層)	高坏 坏	27.10	-	5/8	内→横→行(距離) 外→横→斜→行(距7.0, 40cm) (距0.25-0.30cm)	-	内→1081/6(赤) 10938/4 (茂黄壁) 外→1085/6(赤) 5186/9(壁)	3m以下英・軟布 ・織75以下 内外面塗装
204	43号壁壁 横出	高坏 坏	23.80	-	3/8	内→多→行(1/2)(全中縦, 0.30cm) 外→行→横→行(1/2)(全中縦, 0.30 cm)	-	内→2.5184/6 (赤壁) 外→2.518 (赤壁)	1m以下英・内・織 10%
205	38号壁壁 横出 (38号壁壁 上層 38号壁壁)	高坏 坏	24.40	-	5/8	内→横行→横→行(距7.0, 30 cm), 多→行(1/2)(距7.0, 40cm) 外→横行→横→多→行(1/2)(距0.2 cm)	-	内→10188/3 (茂黄壁) 外→10188/4 (茂黄壁)	3m以下赤織含む織 ・1m以下英・内・織 内面近部二次装 飾により変化/内 面近部腐蝕状の 剥離
206	40号壁壁 (39号壁壁 横出 40号壁壁 横出 40号壁壁 20層 40号壁壁 0-35cm D12 4層・5層 D12 5層)	高坏 坏	31.00	-	5/8	内→横横行(多→1.80cm)→ 多→行(距0.40cm) 外→斜→行→横→行(1/2) (距0.35cm)	-	内→1085/6(赤) 10938/4 (茂黄壁) 外→1085/6(赤) 5187/6(壁)	1m以下英・内・軟布 18%以下 内面塗装
207	43号壁壁 横出 (43号壁壁 上層 43号壁壁 0-5cm 43号壁壁 5-10cm 43号壁壁 10-15cm 43号壁壁 2層)	高坏 坏	23.80	-	2/8	内→横→行(1/2)(全中縦, 0.25cm)→ 横行 外→横→行(1/2)(距0.25cm)→横行	-	内→7.0188/6 (茂黄壁) 外→7.0187/8 (黄壁)	2m以下英・内・織 10%, 軟布1%
208	40号壁壁 35-40cm (40号壁壁 22層 40号壁壁 21層 40号壁壁)	高坏 坏	21.80	-	3/8	内→横→行(1/2)(多→11.70cm) →横行→横→行(1/2)(部分, 0.30cm), 縦行 外→行→横→行(1/2)(距0.40cm) →全中縦, 0.40cm	-	内→7.0187/6(壁) 外→1084/6(赤)	3m以下等・1m以下 英・内・織, 織織類 により変化
209	44号壁壁 床	高坏 坏	28.25	-	8/8	内→斜→行(1/2)(距0.35cm), 多→ 行(1/2)(距7.0, 55cm)→横行 (多→1.00cm) 外→多→行(1/2)(全中縦, 0.40cm →0.15cm)→横行(多→0.75cm)	-	内→10187/4 (赤・白・黄壁) 内→10187/4 (赤・白・黄壁) 外→7.0186/6(壁)	4m以下軟布7%, 1m 以下英10%, 1m以下 内・織5%
210	37号壁壁 横出 F11 4層 E-11 4層	高坏 坏	23.80	-	1/8	内→横行→横→行(1/2) (部分, 0.30cm→0.20cm) 外→横行→横→行(1/2) (部分, 0.30cm)	-	内→(赤・白・黄壁) 内→(赤・白・黄壁)	目立った砂粒なし 粘土を足付けて 補修?
211	36号壁壁 横出 36号壁壁 1層 36号壁壁 (37号壁壁 35号壁壁 D11 4層・5層 F11 4層 F11 4層・5層)	高坏 坏	26.80	-	6/8	内→横→斜→行(1/2)→横行 外→横→行(1/2)(全中縦, 0.40cm) →横行	-	内→7.0187/6(壁) 10187/6 (明黄壁) 外→0186/6(壁)	2m以下英+2.5m以 下織10%
212	38号壁壁 横出 D12内窓 (38号壁壁 2層 38号壁壁)	高坏 坏	27.40	-	4/8	内→横→行(1/2) 外→横→行(1/2)(距0.40cm)	-	内→0186/8(壁) 外→7.0186/8 (明黄色)	3m以下英・軟布・織 1%
213	35号壁壁物 40cm・床 (35号壁壁)	高坏 坏	20.00	-	6/8	内→横→行(1/2)(距0.50-0.70cm) 外→斜→行(1/2)(距0.30cm)	-	内→2.017/3 (茂黄) 外→10187/4 (赤・白・黄壁)	2m以下の小織1%
214	39号壁壁 横出 39号壁壁 0-5cm	高坏 坏	20.75	-	3/8	内→横行→横→行(1/2)(全中 縦, 0.30cm) 外→不明	-	内→10188/4 (茂黄壁) 外→2.0186/8(壁)	織織類を含むが目 立つた砂粒はみら れなし。外面に織 製色粘土を薄く使 用・垂れカケ
215	40号壁壁 (40号壁壁 21層 40号壁壁 22層)	高坏 坏	38.80	-	1/8	内→横→行(不明)(1.40cm)→ 多行 外→不明	-	内→10188/6 (黄壁) 1.018/3 (黄壁) 外→2.018/3 (黄壁) 7.0187/6(壁)	2m以下英・内・軟布 ・3m以下織10-15%





234	42号壁建 0-15cm (4号壁建)	高环 脚	10.45	-	(2/9)	<p>环部 内:横材*2(断端) 外:横材*13*(断、0.40cm) →横材*(多、0.70cm)</p> <p>脚部 内:縦材*1 外:縦材*13*(断、0.45cm、 0.25cm)→横材*(多、0.70cm)</p>	内:7.0188/4 (改良型) 10088/4 (改良型) 外:7.0187/6(6型) 10088/4 (改良型)	2m以下壁・1m以下 高:10%・軟赤10%	化粧土様の黄褐色の粘土が付着 ない部分の一部が 二次焼結により 灰色に変色
235	39号壁建 輸出 (39号壁建 0-5cm 39号壁建)	高环 脚	(12.40)	-	(4/9)	<p>内:横材*2→横材*2 外:縦材*13*(断、0.40cm)→ 横材*</p>	内:5187/3(3型) 外:2.0187/6(6型)	2m以下高:10%以下 (内)、2m以下高: 75(5)	内外面焼結・二次 焼結により変色
236	37号壁建 床	高环 脚	(10.60)	-	6/9	<p>内:材*横材*横材*1→横材* 外:縦材*13*(断、0.35cm)、材*</p>	内:5188/8(8型) 外:5188/6(6型)	1m以下高:10% 軟赤25以下	
237	35号壁建 0-5cm	高环 脚	(12.50)	-	(8/9)	<p>环部 内:材*縦材*1 外:縦材*13*(断、0.40cm)→材* 脚部 内:横材*2→横材*横材* 外:縦材*13*(断、0.30cm)→横材*</p>	内:10088/3 (改良型) 外:10088/4 (改良型)		目立った砂礫はみ られないが細砂礫 英を多く含む気孔 があるようにみえ る
238	34号壁建 10-15cm (34号壁建 34号壁建 1層)	高环 脚	(12.10)	-	(4/9)	<p>内:材*1→縦材*縦材材*→ 横材材*(多、0.8cm) 外:縦材*13*(断、0.30cm)→材*</p>	内:10087/4 (改良型) 外:10087/4 (改良型)		目立った砂礫なし 二次焼結による 変色
239	32号壁建	高环 脚							1次調査分
240	41号壁建	高环 脚	(14.70)	-	5/9	<p>内:(横材*13)→(縦材* 1.10cm、横材*11材)* (多、0.85cm) 外:横材*14材*1→横材*13*( 断、0.30cm)→横材*13*( 断)→粘土塗布→横材* (多、1.10cm)</p>	内:10088/3 (改良型) 10088/3 (改良型) 外:10087/4 (改良型)		目立った砂礫はみ られないが細砂礫 英を多く含む気孔 があるようにみえ る
241	36号壁建 36号壁建 1層	高环 脚	(13.80)	-	(1/9)	<p>内:縦材*1材* 外:縦材*13*(断、0.30cm)→材*</p>	内:7.0187/8 (改良型) 外:7.0187/8 (改良型)	2m以下高:10%、5 m以下壁15以下	脚柱内部に横材 向の2'割れ
242	34号壁建	高环 脚							1次調査分
243	36号壁建	高环 脚	(10.00)	-	(8/9)	<p>内:横材*13*(2.50cm)→材* (断)→材*13*( 断) 外:縦材*13*(断、0.30cm) (断、0.30cm)</p>	内:7.0188 外:1085/6(6型)	2m以下高:10%・軟 赤5-10%(内)、目立 た砂礫なし(外面)	
244	43号壁建 輸出 (43号壁建 10-15cm)	高环 脚	(13.70)	-	5/9	<p>内:材*1、横材*1→材*2 外:材*縦材*1、横材*</p>	内:10087/4 外:7.0187/6(6型)	2m以下軟赤10%、軟 赤英・気孔	内外面焼結
245	43号壁建 輸出	高环 脚	(10.30)	-	(2/9)	<p>脚部 内:縦材*、斜材*→横材* (本、0.50cm) 外:縦材*13*(今今硬、0.30cm)、 斜材*13*(今今硬、0.20cm)</p>	内:10087/3 (改良型) 外:10087/3 (改良型)	4m以下軟赤・1m英 ・露5	
246	43号壁建 5-10cm	高环 脚		-	-	<p>内:縦材材*2(多、1.00-1.50 cm)、横材材*(多、0.85cm) 外:横材材*→多*13*(今今硬、 0.30cm)</p>	内:10087/6 (改良型) 外:7.0187/6(6型)	1m以下高:10%、軟 赤軟赤15、細砂礫英 30%	内面横材*が露状 文状
247	31号壁建	高环 脚							1次調査分
248	31号壁建	高环 脚							1次調査分
249	39号壁建 輸出 (39号壁建 上層)	高环 脚	(18.10)	-	(7/8)	<p>环部 内:材*縦材*1(断端、外)、 外:横材材*→縦材*13*(今今硬、 0.40cm)</p> <p>脚部 内:縦材材*→横材材*(脚柱、 横材材、材*→材*(脚架) 外:化粧土上→横材材*(脚柱) 横材材*13*(今今硬、0.30cm)、 横材材*(脚架)</p>	内:10088/4 (改良型) 外:10088/4 (改良型)	1m以下高:軟赤5% (5)、2-1m英15	脚柱内面仕上げ 粗/脚柱外面 に化粧土塗布 粘土塗布67
250	42号壁建 輸出 42号壁建 上層 42号壁建 1)4-4~5層	高环 脚	17.30	-	2/9	<p>内:横材*2→横材材、斜材、 横材材* 外:多*13*(断、0.25cm)→ (今今硬、0.20cm)</p>	内:10085/1(絶取) 外:1084/8(8型) 10088/4 (改良型)	1m以下高:10%20%	脚柱外面に顔 料の粘土から化粧 土様の粘土塗布 あり

251	42号壁建 10-15cm	高坪 脚	(17.05)	-	7/8	内:(→)3×17'→横付' 外:縦→13'4(距,0.15cm)→0.30 cm)	-	内:10Y07/3 (にぶい・黄楳) 外:10Y07/6 (明黄楳) 10Y06/6 (黄楳)	2mm以下灰・1mm以下 灰・軟赤10%以下	二次焼結に より変色
252	36号壁建 1層	高坪 脚	(18.20)	-	(8/8)	内:横付'・横付'→横付' 外:縦→13'4(距,0.50cm)→ 13' 幅は1/2	-	内:10Y07/4 (にぶい・黄楳) 外:10Y07/6 (明黄楳)	黒曜英3%	壁?
253	37号壁建	高坪 脚	(18.20)	-	2/8	内:横付'・多付' 外:縦→多付' 幅は1/3	-	内:2.5Y0/4 (にぶい・黄) 外:1.5Y07/6 (壁)	目立った砂礫なし	
254	32号壁建	高坪 脚								1次調査分
255	37号壁建 床 36号壁建 0-5cm	高坪 脚	(18.00)	-	(2/8)	内:横→(13本/0.9cm)→横付' 外:横付'・横→13'4(距,0.20 cm)	-	内:10Y07/4 (にぶい・黄楳) 外:10Y07/4 (にぶい・黄楳)	目立った砂礫なし	
256	36号壁建 横出 (36号壁建)	高坪 脚	(12.00)	-	(3/8)	内:19'7'・横付'・しぼり敷 外:横付'	-	内:2.5Y07/6(壁) 外:2Y07/6(壁)	1mm以下礫3-10%・1 mm以下灰3%	壁?/全体に二次 焼結により変色
257	37号壁建 30-35cm 37号壁建 床	高坪 脚	(10.10)	-	(3/8)	内:横→13'4→横付' (7本/1.45cm) 外:縦→13'4 (距,0.20cm)	-	内:10Y08/4 (浅黄楳) 外:1.5Y06/6 (壁) 0Y07/6 (壁)	2mm以下灰・1mm以下 灰10%	
258	43号壁建 横出	高坪 脚	12.43	-	4/8	内:(横)1'4→横付' (5本/0.45cm?) 外:縦→13'4(距,0.25cm)	-	内:10Y06/6 (明黄楳) 外:10Y07/6 (明黄楳)	1mm以下灰・灰・礫 5%・輪数雜英30%	19'7'
259	39号壁建 横出 (38号壁建 上層 38号壁建)	高坪 脚	13.90	-	5/8	内:横付'・横付'→横付' 幅は1/4 外:横付'・横付' (9本/1.60cm)→ 横付'	-	内:10Y07/4 (にぶい・黄楳) 外:1.5Y07/4 (にぶい・壁)	3mm以下赤褐色石 礫15(内面),外面1 mm以下灰・軟赤・礫 10%	
260	33号壁建 25-30cm (40号壁建 横出 33号壁建 5-20cm)	黄褐色 壁	20.50	-	6/8	内:当て具板→横付', 19'7' 外:平付19H(14本/5cm)→横付', 19'7'	-	内:3A/ (壁) 外:3A/ (壁)	2mm以下灰・灰3-5%	外面一部に自然 風・白緑部に変色, 剥離に→記号?
261	40号壁建 25-30cm (40号壁建 横出 40号壁建 2階 40号壁建 床 40号壁建)	黄褐色 板面壁	8.85	11.30	8/8	内:19'7' 外:19'7', 19'1'→19'7'	-	内:3A/ (壁) 外:3A/ (壁)	2mm以下灰10-15%	内外面に継ぎ物 あり
262	44号壁建 床	黄褐色 平底板	5.90 (9.25)	13.00	6/8	内:横付', 19'7', 19'7' 外:縦→9(0.82/cm)・格子目付材 →19'7'	-	内:3A/ (壁) 外:3A/ (壁)	目立った砂礫は含 まれない	百濟系陶質上層 あり

付表5 出土石器観察表

掲載番号	器種	出土場所	石材	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
2	削片	B3 4層	玉髄	2.80	2.29	0.90	4.6	
3	削片	B2 4層	チャート	1.80	1.68	0.78	2.8	下辺に鋭利な刺痕
4	削片	A2 4層	チャート	3.88	2.36	1.04	7.6	
5	二次加工削片	C3 4層	チャート	1.73	1.00	0.20	0.4	一面に鋭利な刺痕
6	二次加工削片	B2 4層	黒曜石	0.90	1.15	0.28	0.3	
7	削片	B4 4層	頁岩類(Ba7)a3	5.42	5.60	1.14	25.5	
8	使用痕ある削片	32号製煉	頁岩	4.05	3.81	0.60	7.0	
9	素材削片	C3	頁岩類(Ba7)a3	(9.36)	6.12	1.88	116.8	
10	石核	B3 5層	チャート	2.95	1.88	0.57	4.7	
11	石核	B4 4層	流紋岩	5.35	3.37	1.91	26.4	
12	石核	B4 4層	チャート	2.42	3.80	1.24	13.7	
13	板状石核	B4	頁岩類(Ba7)a3	(8.06)	7.70	2.03	168.0	
14	石核?	B3 5層	チャート	(2.25)	(1.84)	0.66	1.6	
15	石核	11号土坑	黒曜石	1.94	1.30	0.23	0.6	
16	石核	E調査区	チャート	2.02	1.30	0.47	1.0	
17	石核	E12c 4層	チャート	1.74	1.42	0.51	1.1	
18	石核	40号製煉	チャート	1.45	1.08	0.25	0.4	
19	石核	43号製煉 検出	チャート	1.60	1.39	0.28	0.4	
20	石核?	C3 4層	黒曜石	1.69	(1.37)	0.45	0.9	
21	石核?	B4 4層	チャート	2.86	1.43	0.53	2.1	
22	スクレイパー?	B2 5層	チャート	2.49	2.89	0.72	5.3	
23	敲石・磨石	B4 4層	砂岩	23.14	11.49	4.70	1950	2面にコーン・ドロス状の突起部あり
24	石核?	C4 4層	頁岩類(Ba7)a3	(4.77)	(4.74)	0.58	19.8	
25	スクレイパー?	B3 4層	輝石安山岩	(12.73)	5.95	2.36	147.6	
26	打製石斧基部	B4 5層	頁岩類(Ba7)a3	(5.40)	(5.44)	1.71	75.3	
27	打製石斧	B2 4層	頁岩類(Ba7)a3	(3.43)	(3.60)	0.58	16.5	折損は古い時期
28	打製石斧	E12	頁岩類(Ba7)a3	(6.06)	(4.45)	1.69	71.2	
29	石製	C4 4層	頁岩類(Ba7)a3	(8.70)	3.36	1.57	59.8	
30	磨製石斧	E調査区北側	Ba7)a3	8.12	4.52	1.54	89.9	刃部幅2.60cm
263	敲石	E調査区北側	砂岩	(5.76)	3.91	3.98	142.2	破損により一部赤く変色
264	敲石	44号製煉 床	砂岩	13.83	4.10	2.73	265.4	
265	敲石	D13 4層	砂岩	(9.41)	3.13	(2.85)	93.5	破損により一部赤く変色。破損後に鉄分が付着。破損後も使用可。
266	台石・敲石	33号製煉 35-40cm	砂岩	19.82	8.41	4.24	409.9	
267	磨石・台石・敲石	E15調査区西側	砂岩	(10.93)	8.97	3.00	1450	
268	磨石・台石	40号製煉	砂岩	(22.19)	(7.42)	(8.17)	1450	
269	台石	42号製煉 床	輝石安山岩	(13.11)	16.76	5.29	1950	
270	磨石	39号製煉 検出	砂岩	23.72	(17.55)	7.40	4200	
271	磨石・台石	26号製煉	砂岩	(17.25)	18.69	6.42	1700	
272	台石・敲石	44号製煉 検出	砂岩	23.52	22.41	5.81	4500	
273	金床石	40号製煉 23-30cm	砂岩	15.25	10.68	6.35	1000	破損により赤く変色した部分と赤く変色した部分あり
274	金床石・敲石	41号製煉 床	砂岩	(16.01)	(13.21)	5.60	1400	
275	金床石	F10 市道下	砂岩	(6.40)	(4.60)	(5.42)	29.4	破損により赤く変色部分あり
276	金床石	35号製煉 5-10cm	砂岩	(14.10)	(3.50)	(1.50)	77.3	破損により赤く変色部分あり
277	台石・金床石	40号製煉	輝石安山岩	17.04	22.15	8.25	4250	
278	磨石・金床石	36号製煉 1層	輝石安山岩	(19.15)	16.15	4.30	1700	表面・側面に鉄錆状の付着物あり
279	金床石	42号製煉	輝石安山岩	27.70	21.03	5.60	2300	全体に鉄錆状の付着物あり
280	金床石?・敲石	44号製煉 床	砂岩	26.50	9.95	7.12	4700	
281	磨石・金床石	36号製煉 1層	砂岩	20.16	18.98	13.24	9000	
282	敲石・敲石	F10 4層	砂岩	18.31	12.92	7.56	2600	破損後も使用。
283	円板状加工品	35号製煉 0-5cm	輝石	4.60	3.40	0.95	4.5	表面研削
284	穿孔鏝	42号製煉 5-10cm	輝石	3.75	4.35	1.80	5.6	
285	穿孔鏝	39号製煉 20-25cm	輝石	12.30	6.70	3.60	65.2	穿孔を地すが貫通していない
286	台石?	37号製煉 15-20cm	輝石	11.80	16.70	8.65	360.9	刃物による擦痕
287	台石?	D12 4-5層	輝石	17.30	14.10	5.20	402.7	刃物による擦痕
288	穿孔鏝	37号製煉 床	輝石	10.40	9.30	5.00	105.5	貫通していない穿孔多数
289	台石?	38号製煉 床内	輝石	44.10	25.10	13.40	3800	特に加工なし

※重量は1kg未満は0.1g単位、1kg以上は50g単位で表示。

付表6 出土石製品・玉類等観察表

図録番号	器種	出土場所	材質	外径 (cm)	孔径 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	備考
290	有孔円板	39号型埴 20-25cm	滑石	2.38×1.89	0.17	0.25	2.5	一孔
291	有孔円板	39号型埴 西平埴上	緑色凝灰岩	1.90×1.88	0.27×0.30	0.19	1.3	一孔
292	有孔円板	36号型埴 1層	頁岩	2.53×2.37	0.22×0.25	0.46	5.4	一孔
293	碧玉	41号型埴 埴上	滑石	0.49	0.31	3.13	1.0	両面穿孔。内面に穿孔時の回転による加工痕あり
294	碧玉	42号型埴 検出	頁岩	0.45×0.49	0.32	2.41	0.8	両面穿孔。内面に穿孔時の回転による加工痕あり
295	丸玉	43号型埴 検出	粘土	1.70-1.80	0.32	1.60	2.8	中央の孔のほかに側面に3カ所の穿孔あり。側面からの孔は中央のものよりやや小さい
296	白玉	36号型埴 49内埴上	滑石	0.43×0.47	0.18×0.20	0.28	0.1	
297	白玉	36号型埴 49内埴上	滑石	0.38×0.39	0.16×0.18	0.21	0.1	未測
298	白玉	36号型埴 49内埴上	蛇紋岩?	0.43×0.44	0.22	0.31	0.1	濁色を呈する
299	小玉	S0693(ピット)	ガラス	0.45×0.49	0.12×0.15	0.32	0.1	淡緑色
300	小玉	40号型埴 埴上	ガラス	0.33×0.34	0.11	0.17	0.1	未測 藍色

付表7 出土鉄器観察表

図録番号	器種	出土場所	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
301	鉄鏃	12号土坑 検出	2.89	2.03	0.20	8.6	先端付近に穿孔あり
302	鉄鏃	45号型埴 10-15cm	9.57	2.63	0.30	13.0	
303	鉄鏃?	36号型埴 1層	1.80	1.60	0.12	1.9	
304	刀子	33号型埴 25-30cm	13.05	1.90	0.45	23.9	両側、基部に樹皮状の皮積層着
305	刀子	43号型埴 10-15cm	5.81	1.20	0.20	4.7	両側、刃部長4.05cm
306	刀子	43号型埴 10-15cm (4.86)	1.33	0.20	4.5		
307	刀子	39号型埴 検出	5.30	1.05	0.20	3.5	刀側、側面および基部に木質積着
308	器種不明	36号型埴 埴	(2.00) (1.45)	0.96 1.28	0.42 0.51	4.4	横断面三角形の鉄器が2点積着。計測値は上下の値が各個体に対応している
309	鉄片	42号型埴 埴上	(2.73)	1.61	0.11	1.5	切斷痕あり
310	鉄鏃?	C3-4層	(2.70)	1.75	0.20	4.6	「2」字状に折り返げる
311	鉄鏃	43号型埴 検出	12.35 13.15 12.42	1.41 1.50 1.55	0.67 0.70	39.6	細型鉄鏃自前、3枚積着。表面に樹皮状および樹皮状の有機物積着。各段の計測値は3つの個体にそれぞれ対応している
312	鏃?	34号型埴 埴	14.90	1.66	0.43	15.1	木質および樹皮の有機物積着

※重量を除いた計測値は誤を含まない。重量は誤等を含む値である。